

**平成28年度
自己点検・評価「年次報告書」**

**長崎女子短期大学
自己点検評価室**

【作成者一覧】

	職 名	氏 名	頁
学長	学長	玉島 健二	1
生活創造学科	学科長	長尾 久美子	2
栄養士コース	コース長	草野 洋介	4
ビジネス・医療秘書コース	コース長	濱口 なぎさ	6
介護福祉士コース	コース長	長尾 久美子	8
幼児教育学科	学科長	白石 景一	10
学生部	部長	島田 幸一郎	12
図書館	館長	森 弘行	14
自己点検評価室	室長	武藤 玲路	16
入試広報室	室長	久原 和敬	18
学生相談室	室長	福井 謙一郎	20
FD・SD委員会	委員長	武藤 玲路	22
募集・広報委員会	委員長	久原 和敬	24
紀要・図書委員会	委員長	田川 千秋	26
教務委員会	委員長	山口 ゆかり	28
学生委員会	委員長	古賀 克彦	31
キャリア支援センター	センター長	原田 実輝	33
地域連携推進センター	センター長	長尾 久美子	43
生涯学習推進室	室長	山本 尚史	45
地域子育て支援室	室長	本村 弥寿子	47
保護者支援・教育研究センター	センター長	玉島 健二	49
食品加工研究センター	センター長	橋口 亮	51
I R推進室	室長	森 弘行	53
寮務委員会	委員長	植木 明子	55
事務局	局長	三藤 英文	57

職 名	氏 名	頁
学長	玉島 健二	59
教授	橋口 亮	60
	森 弘行	61
	長尾 久美子	62
	白石 景一	63
	草野 洋介	64
	中澤 伸元	65
	下釜 綾子	66
	松尾 公則	67
准教授	武藤 玲路	68
	島田 幸一郎	69
	濱口 なぎさ	70
講師	植木 明子	71
	山口 ゆかり	72
	古賀 克彦	73
	中村 浩美	74
	田川 千秋	75
	本村 弥寿子	76
	荒木 正平	77

職 名	氏 名	頁
講師	福井 謙一郎	78
	光武 きよみ	79
	江頭 万里子	80
	樋口 誠	81
助教	昆 正子	82
	山本 尚史	83
	蛭原 正貴	84
助手	原田 由貴	85
	太田 智子	86
	住吉 真美	87
事務局長	三藤 英文	88
入試広報室長	久原 和敬	89
キャリア支援センター長	原田 実輝	90
事務(学生)	森 綾果	91
〃(会計)	一瀬 章子	92
〃(入試広報・庶務)	石本 琳	93
〃(教務)	横山 和美	94
〃(会計)	林田 翔太郎	95
司書	木下 綾子	96

平成28年度 「学長」 年次報告書	
区分：	学科コース・委員会等・事務局等・教職員個人・その他（ ）
氏名：	玉島 健二（学長）
PLAN（計画）：	査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
	1. 運営委員会、入試委員会の活性化 2. 各学科・コースの教育活動や取組の充実と、学科・コース間の連携体制の推進 3. きめ細かな学生支援による学生の満足度の向上
DO（実行）：	目標の達成に向けて計画を遂行する。
	1. 運営委員会、入試委員会の活性化 定例的な議題だけでなく、28年度の特徴となるような協議を通じて、活性化策を模索する。 2. 各学科・コースの教育活動や取組の充実と、学科・コース間の連携体制の推進 各教員の授業力・指導力の向上、学生支援の充実等を通じて、学生の満足度をアップさせる。 3. きめ細かな学生支援による学生の満足度の向上 学生の要望を可能な限り実現するなどの取組を通じて満足度のアップを図る。
CHECK（検証）：	成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。
	1. 自己評価「S・A・ B ・C・D」 ・関係高校連絡協議会におけるプレゼン、コーヒータイムのカスタラ提供、小島奨学金（A免除・B免除）、H29年度「現代社会と女性」における初年次教育の等については、本学の特色を出す取組として、積極的な議論ができた。 2. 自己評価「S・A・ B ・C・D」 3. 自己評価「S・A・ B ・C・D」 2及び3については、卒業時アンケートの結果が一つの指標となり得る。「学食のメニューや価格」、「保健室の対応や助言」は前年度より0.4ポイント評価を下げている。一方、「良い教員に恵まれたか」、「本学への入学を後輩・知人に勧めたいか」については、全体は前年度と変わらないが、ビジネス・医療秘書コースは前年度から大きく改善した。また、28年度入学生の退学者が2名（1名は養成科、1名は病死）であったことも評価できる。
ACT（改善）：	課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
	1. 運営委員（入試委員）が当事者意識を持つことが重要。活性化に向けた協議ができるように、次年度は努めたい。 2. 及び3. 「学生第一主義」、「就職の長崎女子短大」を掲げているが、次年度も、学生からの評価及び満足度をアップするよう、全教職員で取り組んでいく。

平成28年度 「生活創造学科」 年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他 ()

氏名：長尾 久美子 (学科長)

PLAN (計画)： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. コース長会議を開催し、学科内の連携と課題の共有を図る。
2. 生活創造学科中・長期計画について学科内で検討し、計画案を作成する。
3. コースの地域貢献活動等において、学生がコースの特性を生かした協力を行う。

DO (実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. コース長会議を開催し、学科内の連携と課題の共有を図る。
入試・運営委員会にコース長全員が参加するため、その中で学科内課題も協議され連携できるため、学科内コース長会議を独自に開催する必要がなかった。
2. 生活創造学科中・長期計画について学科内で検討し、計画案を作成する。
学園本部から生活創造学科の改変に関する方針が出され、独自に計画案を作成する必要がなかった。
3. コースの地域貢献活動等において、学生がコースの特性を生かした協力を行う。
コース目標が異なり、学科として地域貢献する意義が薄く、時間的余裕、調整もできない。

CHECK (検証)： 成果を測定 (量的・質的データ) し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□ (囲み線) を付ける。

1. 自己評価「 S・A・ B・C・D 」
必要がなかった。
2. 自己評価「 S・A・B・ C・D 」
学園本部で生活創造学科の改変 (Fの廃止) が決定し、計画の必要がなかった。
3. 自己評価「 S・A・B・ C・D 」
学内交流活動で足りるため、学科内交流の必要性が乏しい。

ACT (改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 生活創造学科として残る栄養士コースとビジネス・医療秘書コースの学生確保及び学生支援について、学科として必要な支援・調整を行う。

平成28年度 生活創造学科 年次報告

Plan 計画

1. コース長会議を開催し、学科内の連携と課題の共有を図る。
2. 生活創造学科中・長期計画について学科内で検討し、計画案を作成する。
3. コースの地域貢献活動等において、学生がコースの特性を生かした協力を行う。

Do 実行

1. 入試・運営委員会にコース長全員が参加するため、その中で学科内課題も協議され連携できるため、学科内コース長会議を独自に開催する必要がなかった。
2. 学園本部から生活創造学科の改変に関する方針が出され、独自に計画案を作成する必要がなかった。
3. コース目標が異なり、学科として地域貢献する意義が薄く、時間的余裕、調整もできない。

Act 改善

1. 生活創造学科として残る栄養士コースとビジネス・医療秘書コースの学生確保及び学生支援について、学科として必要な支援・調整を行う。

Check 検証

1. 必要がなかった。
2. 学園本部で生活創造学科の改変（Fの廃止）が決定し、計画の必要がなかった。
3. 学内交流活動で足りるため、学科内交流の必要性が乏しい。

平成28年度 「栄養士コース」年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）

氏名：草野 洋介（コース長）

PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 模擬試験を柱に栄養士実力認定試験対策により力を入れる。1年時から認定試験を意識させる。
2. 長崎食育学に対する意識をさらに深化させるとともに、レシピの開発に意欲を持たせる。長崎市との連携を生かし本学の資源を生かした公開講座を開催する。
3. これまで以上に学生、教員、助手が一体となり協働するコースの雰囲気構築、情報を共有し学生支援を行う。

DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 実力ある栄養士の養成、特に栄養士実力認定試験のA判定、大量調理技術のさらなる向上を目指す。
2. 長崎食育学の知見と学んだ知識と技術を生かしたレシピ習得の意欲を高めるとともに、長崎食育学を生かし地域密着を図る。
3. チューター、卒業研究の垣根を超え学生に対する情報を共有し学生との一体感を構築する。また教員それぞれの立場からキャリア支援を行う。コースの教育内容に対する高校の認識を高め入学者増につなげる。

CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。

※評価のアルファベットに（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「S・A・B・C・D」

専任教員がより栄養士実力認定試験を意識した講義を心がけたが、A判定は微増したものの約50%にとどまった。しかしながら昨年に引き続き全国100位内という成績を残した学生が存在した。本学の強みである大量調理技術に関しては順調に深化している。

2. 自己評価「S・A・B・C・D」

長崎食育学に対する認識は深まっており、本学進学の一動機の一つになっており、学生は長崎の伝統食に対しての意識は高い。昨年度コンクールにおいて2名がグランプリを獲得したが、今年度は成績を残せなかった。公開講座では橋口教授による「加工食品と保存方法～カステラの製造と保存～」、コース教職員全員により「長崎の郷土料理（しっぽく料理）」を開催し栄養士コースへの認識を深めた。

3. 自己評価「S・A・B・C・D」

チューター、卒業研究の垣根を超え学生に対する情報を共有できている。特に学力面で問題がある学生が多い28年度入学生においては情報を共有し、再履修科目を出すことなく全員が進級できた。キャリア支援においてはこれまでの絆を生かした高い就職率は維持できているものの、就職活動へのとりかかりが遅い学生が数人みられた。また、長崎女子校はじめ高校との連携により本学への理解を深めたことにより入学者が42→43→47と増加につながった。

ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 模擬試験を柱に栄養士実力認定試験対策により力を入れる。1年時から認定試験を意識させる。非常勤教員含めたコースあげでの対策を行いA判定の増加を目指したい。
2. 長崎食育学に対する認識および長崎の伝統食に対しての意識のさらなる向上を目指すとともに本学の資源を生かした公開講座を昨年度に引き続き開催し学外の長崎食育学に対する認識を深める。
3. これまで以上に学生、教員、助手が一体となり協働するコースの雰囲気構築、情報を共有し学生支援を行う。入学実績がある高校との連携により本学への理解をより深めるとともに昨年度から新しく指定校となった沖縄県の高校、九州地区の農業、生活科学の高校との連携を強化し入学増につなげる。

平成28年度 栄養士コース 年次報告

Plan 計画

1. 模擬試験を柱に栄養士実力認定試験対策により力を入れる。1年時から認定試験を意識させる。
2. 長崎食育学に対する意識をさらに深化させるとともに、レシピの開発に意欲を持たせる。長崎市との連携を生かし本学の資源を生かした公開講座を開催する
3. これまで以上に学生、教員、助手が一体となり協働するコースの雰囲気構築、情報を共有し学生支援を行う。

Do 実行

1. 実力ある栄養士の養成、特に栄養士実力認定試験のA判定、大量調理技術のさらなる向上を目指す。
2. 長崎食育学の知見と学んだ知識と技術を生かしたレシピ習得の意欲を高めるとともに、長崎食育学を生かし地域密着を図る。
3. チューター、卒業研究の垣根を超え学生に対する情報を共有し学生との一体感を構築する。また教員それぞれの立場からキャリア支援を行う。コースの教育内容に対する高校の認識を高め入学者増につなげる。

Act 改善

1. 模擬試験を柱に栄養士実力認定試験対策により力を入れる。1年時から認定試験を意識させる。非常勤教員含めたコースあげての対策を行いA判定の増加を目指したい。
2. 長崎食育学に対する認識および長崎の伝統食に対する意識のさらなる向上を目指すとともに本学の資源を生かした公開講座を昨年度に引き続き開催し学外の長崎食育学に対する認識を深める。
3. これまで以上に学生、教員、助手が一体となり協働するコースの雰囲気構築、情報を共有し学生支援を行う。入学実績がある高校との連携により本学への理解をより深めるとともに昨年度から新しく指定校となった沖縄県の高校、九州地区の農業、生活科学の高校との連携を強化し入学増につなげる。

Check 検証

1. 専任教員がより栄養士実力認定試験を意識した講義を心がけたが、A判定は微増したものの約50%にとどまった。しかしながら昨年に引き続き全国100位内という成績を残した学生が存在した。本学の強みである大量調理技術に関しては順調に深化している。
2. 長崎食育学に対する認識は深まっており、本学進学の一助になっており、学生は長崎の伝統食に対する意識は高い。昨年度コンクールにおいて2名がグランプリを獲得したが、今年度は成績を残せなかった。公開講座では橋口教授による「加工食品と保存方法～カステラの製造と保存～」、コース教職員全員により「長崎の郷土料理（しっぽく料理）」を開催し栄養士コースへの認識を深めた。
3. チューター、卒業研究の垣根を超え学生に対する情報を共有できている。特に学力面で問題がある学生が多い28年度入学生においては情報を共有し、再履修科目を出すことなく全員が進級できた。キャリア支援においてはこれまでの絆を生かした高い就職率は維持できているものの、就職活動へのとりかかりが遅い学生が数人みられた。また、長崎女子校をはじめ高校との連携により本学への理解を深めたことにより入学者が42→43→47と増加につながった。

平成28年度 「ビジネス・医療秘書コース」 年次報告書

区分： 学科コース 委員会等 事務局等 教職員個人 その他（ ）

氏名：濱口 なぎさ（コース長）

PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 授業での学びを実践できる場を増やし、学生の応用力向上を図る。
2. ゼミナールを地域交流の場として活用し、学生のコミュニケーション力アップを目指す。
3. 就職活動支援体制を強化し、卒業前の内定率を上げる。

DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 学びの実践
 - ・ 2年 学長秘書（寮生4名）
 - ・ 1年全員 「現代社会と女性」の運営参加、短大フェア参加 等
 - ・ 1・2年全員 ねりんピック長崎大会参加
2. ゼミナールの活用
 - ・ 平成27年度から、統一テーマ「地域交流・地域貢献」を継続
 - ・ 全ゼミで学外者との交流を実践
3. 就職活動支援体制の強化
 - ・ 外部機関（ヤングハローワーク・フレッシュワーク・総合就業支援センター等）と連携した情報提供と就職支援の実施
 - ・ 教員によるきめ細かな面接指導の実施
 - ・ 掲示板を活用した情報提供の強化

CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「S・A・B・C・D」
 - ・ 学内外行事の運営に関わる学生への意識付けとふり返りの不足
 - ・ 卒業時アンケートでは学生支援の満足度の平均が4.3、「資格・検定等の取得」「学修支援」「総合的評価」が4.5、「全体的な授業の満足度」が4.4と全体的に評価が高かった
2. 自己評価「S・A・B・C・D」
 - ・ 発表会にて質疑応答の時間を設けたことで、1年生は課題発見力、2年生は課題解決力を引き出す場となった
 - ・ 学外者との交流は学生の視野を広げ、コミュニケーション力強化に有効だが、継続することが重要
3. 自己評価「S・A・B・C・D」
 - ・ 学生の初動が遅い。就活ノートの活用が不十分
 - ・ 就職先調査では「創造」と「実践」の能力特性が低かった
 - ・ 3月10日現在の就職率は73.3%、昨年3月22日時点での就職率は82.6%

ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 学びの実践
 - ・ 授業での学びを社会の中で具体的に実践できる場を増やし、ふり返りを充実させる
 - ・ 授業以外で教員と関わる場を増やし、応用的なアドバイスを行うことで、学修内容の定着につなげる
2. ゼミナール
 - ・ 統一テーマ「地域交流・地域貢献」は来年度も継続する
 - ・ 学外者との交流の場を増やし、コミュニケーション力強化と共に地域社会の課題発見と解決を目指す
3. 就職活動支援体制の強化
 - ・ 就活ノートの作成・充実によって、就職活動への意識付けを行い、初動を早める
 - ・ 「思考力・判断力・表現力・想像力」や「主体性・自立性・実行力」の強化は、学びの実践、ゼミナール等で多角的に取り組む

平成28年度 ビジネス・医療秘書コース 年次報告

Plan 計画

1. 授業での学びを实践できる場を増やし、学生の応用力向上を図る。
2. ゼミナールを地域交流の場として活用し、学生のコミュニケーション力アップを目指す。
3. 就職活動支援体制を強化し、卒業前の内定率を上げる。

Do 実行

1. 学びの实践
 - ・2年 学長秘書（寮生4名）
 - ・1年全員 「現代社会と女性」の運営参加、短大フェア参加 等
 - ・1・2年全員 ねんりんピック長崎大会参加
2. ゼミナールの活用
 - ・平成27年度から、統一テーマ「地域交流・地域貢献」を継続
 - ・全ゼミで学外者との交流を实践
3. 就職活動支援体制の強化
 - ・外部機関（ヤングハローワーク・フレッシュワーク・総合就業支援センター等）と連携した情報提供と就職支援の实施
 - ・教員によるきめ細かな面接指導の实践
 - ・掲示板を活用した情報提供の強化

Act 改善

1. 学びの实践
 - ・授業での学びを社会の中で具体的に实践できる場を増やし、ふり返りを充実させる
 - ・授業以外で教員と関わる場を増やし、応用的アドバイスを行うことで、学修内容の定着につなげる
2. ゼミナール
 - ・統一テーマ「地域交流・地域貢献」は来年度も継続する
 - ・学外者との交流の場を増やし、コミュニケーション力強化と共に地域社会の課題発見と解決を目指す
3. 就職活動支援体制の強化
 - ・就活ノートの作成・充実によって、就職活動への意識付けを行い、初動を早める
 - ・「思考力・判断力・表現力・想像力」や「主体性・自立性・実行力」の強化は、学びの实践、ゼミナール等で多角的に取り組む

Check 検証

1.
 - ・学内外行事の運営に関わる学生への意識付けとふり返りの不足
 - ・卒業時アンケートでは学生支援の満足度の平均が4.3、「資格・検定等の取得」「学修支援」「総合的評価」が4.5、「全体的な授業の満足度」が4.4と全体的に評価が高かった
2.
 - ・発表会にて質疑応答の時間を設けたことで、1年生は課題発見力、2年生は課題解決力を引き出す場となった
 - ・学外者との交流は学生の視野を広げ、コミュニケーション力強化に有効だが、継続することが重要
3.
 - ・学生の初動が遅い。就活ノートの活用が不十分
 - ・就職先調査では「創造」と「実践」の能力特性が低かった
 - ・3月10日現在の就職率は73.3%、昨年3月22日時点での就職率は82.6%

平成28年度 「介護福祉士コース」 年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）

氏名：長尾 久美子（コース長）

PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 国家試験（H28年度は卒業時共通試験）100%合格を確実に実現するための対策の推進
2. 学びを活かした地域貢献活動を推進し、実践力を高める。
3. 学生への適切な支援

DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 国家試験（H28年度は卒業時共通試験）100%合格を確実に実現するための対策の推進
 - ①卒業時共通試験対策（キャリアアップセミナー）でデータに基づく受験対策を実施した。
 - ②各教員担当授業で小テストを多く取り入れ、授業内容の理解と国試をつなげる工夫を行った。
2. 学びを活かした地域貢献活動を推進し、実践力を高める。
 - ①事例研究・発表で実習施設と連携し、専門職としての介護過程の展開やプレゼンテーションの修得を図った。
 - ②生活支援技術マニュアル作成、医療的ケアの実技、コミュニケーション技術など実技を強化する授業とした。
 - ③小島・茂木地区地域包括支援センターと連携し、認知症サポーター講座受講、「白木ふれあいサロン」での介護予防自主活動での交流事業、職員による介護予防出前講座など、地域活動に参加した。
 - ④ボランティア活動（ねんりんピック、施設の夏祭り、障害者団体の活動等）への参加を推進した。
3. 学生への適切な支援
 - ①教員の特性や役割を活かした丁寧な個別対応で、悩みや苦情相談、就職支援等に努めた。
 - ②新入生歓迎会やぜんざい会等の1・2年合同の交流行事を学生主体で企画し、支え合うクラス作りに努めた。

CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。

※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「S・A・B・C・D」
卒業時共通試験成績（H29.2.15実施 介護福祉士養成施設協会主催）

得点（125点満点）		ランク	本学 人数（%）	全国（%）
本学平均	92.80点	A（80点以上）	13名（86.67%）	70.39%
全国平均	86.67点	B（60点以上）	2名（13.33%）	25.94%
本学順位	89位/383校	C（59点以下）	0名（0%）	3.68%
		計	15名（100%）	100%

- ①全国平均よりも6.13点高かったが、入学時から課題のある学生1名が基準点に達しなかった。
 - ②全体的には、キャリアアップセミナーや各担当教員の授業の成果が見られるが、**①** 前期に基礎的項目の徹底理解を図ること、**②** データの有効活用を図ることを改善する必要がある。
 - ③自学の習慣化（特に、成績低位学生）が十分でなかった。
2. 自己評価「S・A・B・C・D」
 - ①事例研究・発表の内容も深まり、ボランティア参加率も100%で、取り組み内容としては成果があった。
 - ②学生の授業アンケート（H27入学生）の評価平均点は3.9であるが、1年次（4.0）よりも低下し、授業満足度や授業内容、教員の教え方などの項目で評価が低くなっている。検証が必要。
 3. 自己評価「S・A・B・C・D」
 - ①卒業時アンケート調査（2年）で学生支援の満足度平均が4.3で全体としては良かったが、一部に不満あり。
 - ②1年生は、まじめに学業や行事に参加し、欠席や遅刻もほとんどなく、支えあう雰囲気が出てきた。

ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 国家試験に全員合格するように取り組む
 - ①前期に基礎的項目の理解を強化
 - ②自学の習慣化と個別支援の充実
 - ③夏期講習の効果的な実施
2. 実践力を高める授業や地域活動の推進
 - ①事例研究・発表の充実継続
 - ②実践力、満足度を高める授業の実施
 - ③地域交流・貢献活動の継続
3. 学生への適切な支援
 - ①個別の悩みや不安等へ丁寧に対応し支える。
 - ②就職活動支援の充実
 - ③学業の個別支援・指導

平成28年度 介護福祉士コース 年次報告

Plan 計画

1. 国家試験（H28年度は卒業時共通試験）
100%合格を確実に実現するための
対策の推進
2. 学びを活かした地域貢献活動を推進し、
実践力を高める。
3. 学生への適切な支援

Do 実行

1. ①卒業時共通試験対策（キャリアアップセミナー）でデータに基づく
試験対策を実施した。
②各教員担当授業で小テストを多く取り入れ、授業内容の理解と国試を
つなげる工夫を行った。
2. ①事例研究・発表で実習施設と連携し、専門職としての介護過程の展開
やプレゼンテーションの修得を図った。
②生活支援技術マニュアル作成、医療的ケアの実技、コミュニケーション
技術など実技を強化する授業とした。
③小島・茂木地区地域包括支援センターと連携し、認知症サポーター
講座受講、「白木ふれあいサロン」での介護予防自主活動での交流
事業、職員による介護予防出前講座など、地域活動に参加した。
④ボランティア活動（ねんりんピック、施設の夏祭り、障害者団体の
活動等）への参加を推進した。
3. ①教員の特性や役割を活かした丁寧な個別対応で、悩みや苦情相談、
就職支援等に努めた。
②新入生歓迎会やせんざい会等の1・2年合同の交流行事を学生主体で
企画し、支え合うクラス作りに努めた。

Act 改善

1. 国家試験に全員合格するように取り組む
①前期に基礎的項目の理解を強化
②自学の習慣化と個別支援の充実
③夏期講習の効果的な実施
2. 実践力を高める授業や地域活動の推進
①事例研究・発表の充実継続
②実践力、満足度を高める授業の実施
③地域交流・貢献活動の継続
3. 学生への適切な支援
①個別の悩みや不安等へ丁寧に対応し支える。
②就職活動支援の充実
③学業の個別支援・指導

Check 検証

1. ①全国平均よりも6.13点高かったが、入学時から課題のある学生1名が
基準点に達しなかった。
②全体的には、キャリアアップセミナーや各担当教員の授業の成果が
見られるが、①前期に基礎的項目の徹底理解を図ること、②データの
有効活用を図ることを改善する必要がある。
③自学の習慣化（特に、成績低位学生）が十分でなかった。
2. ①事例研究・発表の内容も深まり、ボランティア参加率も100%で、
取り組み内容としては成果があった。
②学生の授業アンケート（H27入学生）の評価平均点は3.9であるが、
1年次（4.0）よりも低下し、授業満足度や授業内容、教員の教え方
などの項目で評価が低くなっている。検証が必要。
3. ①卒業時アンケート調査（2年）で学生支援の満足度平均が4.3で全体
としては良かったが、一部に不満あり。
②1年生は、まじめに学業や行事に参加し、欠席や遅刻もほとんどなく、
支えあう雰囲気が出た。

平成28年度 「幼児教育学科」 年次報告書

区分： **学科コース** ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）

氏名：白石 景一（学科長）

PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 2年間を通じてステップバイステップで、幼稚園教諭免許と保育士資格取得へ向けてより質の高いスキルや使命感などを養う。
2. 短大での授業へなるべくスムーズに入っていけるように接続教育や入学前教育などに力を入れる。
3. 地域の保育園、幼稚園、認定こども園、施設などに信頼される人材の育成を目指す。

DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 実習の依頼、附属幼稚園での体験学習の実施、意見交換会、実習報告会、園長講演会、実習評価カルテを利用した事後指導
2. 長崎女子高校応援プランの実施、ピアノ個人レッスンサポート講座の実施
3. 就職報告会、キャリアセンターによるセミナー、進路相談会（三者面談）、就職先訪問等の実施、各種ボランティアへの参加

CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「 S・A・**□**B・C・D 」
それぞれの学習の機会に取り組む度に、また、実習を体験するたびに着実にスキルアップした。
ただし、教育実習事前事後指導、保育実習指導ⅠⅡⅢ等が、かなり複雑になっている
2. 自己評価「 S・A・**□**B・C・D 」
今年度は、長崎女子高校応援プランについても入試広報室が日程調整などコーディネートして頂き、助かった。
しかし、体験学習もあることや、日程的にもかなり厳しくなっている。
3. 自己評価「 S・A・**□**B・C・D 」
幼児教育学科担当教員とキャリアセンターとの連携により開催したセミナーは、学生の就職に対する心構えなどに効果的であった。

ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 実習指導については様々な機会が絡み合い複雑であるため、更なるシステムの充実をはかる。
2. 長崎女子高応援プラン実施については来年度以降実施するか再検討したい。また、入学前課題やサポートレッスンはテキストの改定を含め、さらに充実させたい。
3. 今後は、さらにキャリアセンターと幼児教育学科担当教員との連携に努め、幼児教育学科全教員が情報の共有に努めていきたい。

平成28年度 幼児教育学科 年次報告

Plan 計画

1. 2年間を通じてステップバイステップで、幼稚園教諭免許と保育士資格取得へ向けてより質の高いスキルや使命感などを養う。
2. 短大での授業へなるべくスムーズに入っていけるように接続教育や入学前教育などに力を入れる。
3. 地域の保育園、幼稚園、認定こども園、施設などに信頼される人材の育成を目指す。

Do 実行

1. 実習の依頼、附属幼稚園での体験学習の実施、意見交換会、実習報告会、園長講演会、実習評価カルテを利用した事後指導
2. 長崎女子高校応援プランの実施、ピアノ個人レッスンサポート講座の実施
3. 就職報告会、キャリアセンターによるセミナー、進路相談会（三者面談）、就職先訪問等の実施、各種ボランティアへの参加

Act 改善

1. 実習指導については様々な機会が絡み合い複雑であるため、更なるシステムの充実をはかる。
2. 長崎女子高応援プラン実施については来年度以降実施するか再検討したい。また、入学前課題やサポートレッスンはテキストの改定を含め、さらに充実させたい。
3. 今後は、さらにキャリアセンターと幼児教育学科担当教員との連携に努め、幼児教育学科全教員が情報の共有に努めていきたい。

Check 検証

1. それぞれの学習の機会に取り組む度に、また、実習を体験するたびに着実にスキルアップした。ただし、教育実習事前事後指導、保育実習指導ⅠⅡⅢ等が、かなり複雑になっている
2. 今年度は、長崎女子高校応援プランについても入試広報室が日程調整などコーディネートして頂き、助かった。しかし、体験学習もあることや、日程的にもかなり厳しくなっている。
3. 幼児教育学科担当教員とキャリアセンターとの連携により開催したセミナーは、学生の就職に対する心構えなどに効果的であった。

平成28年度 「学生部」 年次報告書	
区分：	学科コース・ 委員会等 ・事務局等・教職員個人・その他（ ）
氏名：	島田 幸一郎（学生部長）
PLAN（計画）：	査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
	<ol style="list-style-type: none"> 1. 教務委員会、学生委員会と緊密に連携し、両委員会の円滑な運営に努める。 2. 寮務委員会の一員として、寮における危機管理体制の構築に努める。 3. 学生に関する情報共有を積極的に行い、問題行動の防止に努める。
DO（実行）：	目標の達成に向けて計画を遂行する。
	<ol style="list-style-type: none"> 1. 委員会の開催期日、議題等を事前に確認して全ての会議に出席するとともに、課題の整理や課題解決に向けた相談等に積極的に応じる。 2. 学生が安心して寮生活が過ごせるように、委員長と連携して寮の課題や学生の状況を把握するとともに、万一に備えての危機管理マニュアルの整備を行う。 3. 学生委員会や学生相談室等と連携して学生の実態把握・情報収集を行い、必要に応じて学生全体を指導する。また問題行動が懸念される学生については、関係職員と共に個別指導を行う。
CHECK（検証）：	成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。
	<ol style="list-style-type: none"> 1. 自己評価「S・A・□・C・D」 学生の実習事前指導のため1回欠席したが、年間を通してほぼすべての会議に出席した。学生部長初年度のため相談や助言を十分に行うことができなかったが、各委員長の的確なリードがあり支障なく取り組むことができた。 2. 自己評価「S・A・□・C・D」 委員長との連携はできていたが寮監長との情報共有が不十分であり、寮生の指導が不徹底であった。門限遅れに対する指導を複数回行ったが、バイト先の理解や学生自身の集団生活に対する意識が低く今後の課題である。危機管理マニュアルについては、委員会での協議を通して整備することができた。しかし、不審者対応に関しては、今後細やかな点を検討していく必要がある。 3. 自己評価「S・A・□・C・D」 バスマナーについて学生委員会・学友自治会を核に取り組んだが、周知徹底には至らなかった。自家用車の無許可通学や同乗違反があり、悪質な事例については通学許可停止の指導を行った。また定期試験中の不正行為が疑われる事案があり、該当の学生については試験後個別に注意を行った。
ACT（改善）：	課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
	<ol style="list-style-type: none"> 1. 各委員会の抱える課題を明確にし、課題解決に向けた相談・助言を積極的に行う。 2. 寮生の生活実態を細やかに把握し、寮務委員と密に連携して集団生活のマナー向上に努める。 3. 挨拶・言葉遣い・バスマナー等、学友自治会と連動して社会人としてのマナー向上に努める。

平成28年度 学生部 年次報告

Plan 計画

1. 教務委員会、学生委員会と緊密に連携し、両委員会の円滑な運営に努める。
2. 寮務委員会の一員として、寮における危機管理体制の構築に努める。
3. 学生に関する情報共有を積極的に行い、問題行動の防止に努める。

Do 実行

1. 委員会の開催期日、議題等を事前に確認して全ての会議に出席するとともに、課題の整理や課題解決に向けた相談等に積極的に応じる。
2. 学生が安心して寮生活が過ごせるように、委員長と連携して寮の課題や学生の状況を把握するとともに、万一に備えての危機管理マニュアルの整備を行う。
3. 学生委員会や学生相談室等と連携して学生の実態把握・情報収集を行い、必要に応じて学生全体を指導する。また問題行動が懸念される学生については、関係職員と共に個別指導を行う。

Act 改善

1. 各委員会の抱える課題を明確にし、課題解決に向けた相談・助言を積極的に行う。
2. 寮生の生活実態を細やかに把握し、寮務委員と密に連携して集団生活のマナー向上に努める。
3. 挨拶・言葉遣い・バスマナー等、学友自治会と連動して社会人としてのマナー向上に努める。

Check 検証

1. 学生の実習事前指導のため1回欠席したが、年間を通してほぼすべての会議に出席した。学生部長初年度のため相談や助言を十分に行うことができなかったが、各委員長の的確なリードがあり支障なく取り組むことができた。
2. 委員長との連携はできていたが寮監長との情報共有が不十分であり、寮生の指導が不徹底であった。門限遅れに対する指導を複数回行ったが、バイト先の理解や学生自身の集団生活に対する意識が低く今後の課題である。危機管理マニュアルについては、委員会での協議を通して整備することができた。しかし、不審者対応に関しては、今後細やかな点を検討していく必要がある。
3. バスマナーについて学生委員会・学友自治会を核に取り組みしたが、周知徹底には至らなかった。自家用車の無許可通学や同乗違反があり、悪質な事例については通学許可停止の指導を行った。また定期試験中の不正行為が疑われる事案があり、該当の学生については試験後個別に注意を行った。

平成28年度 「図書館」 年次報告書

区分： 学科専攻 ・ **委員会等** ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）

氏名：森 弘行（図書館長）

PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 図書館利用の促進。
2. 学外向け OPAC サービスの改善。
3. 九州地区大学図書館協議会 H29 総会研修会（H29.5 長崎市で開催）に向けての準備。

DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 前期・後期の2回学生・教員による選定図書の実施
学内電子掲示板で図書館からのお知らせを掲示
図書館利用規定の見直し
2. 有料サービス版 OPAC への移行を検討
3. 九州地区大学図書館協議会会長館との連絡調整

CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「 S・A・**□B**・C・D 」
学生の貸出冊数が 3102 冊と昨年度より約 10%減少、在学生 1 人あたりの貸し出しは 8.52 冊で昨年度より -0.57 冊、学生の活字離れが止まらない
図書館利用者を退職教職員にも拡大
購読雑誌の見直しを実施
2. 自己評価「 S・A・**□B**・C・D 」
学外からの OPAC 利用状況から、有料サービスへの移行は再検討
学外 OPAC 用の登録から洋書を除外し、冊数を 5 万冊未満に抑えることで無料サービス版の利用を継続
3. 自己評価「 S・**□A**・B・C・D 」
研修会講師の選任
木下司書の後任者への引き継ぎ

ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 利用者サービスの改善
古くて利用されない図書が書架を占有していて学生より目的の図書が探しにくいとの指摘があり、不要図書の廃棄を進め、利用しやすい環境を整える
授業での図書館活用
2. 不要図書の廃棄等により、学外向け無料サービス版 OPAC に対応
3. 九州地区大学図書館協議会 H29 総会研修会の運営

平成28年度 図書館 年次報告

Plan 計画

1. 図書館利用の促進
2. 学外向けOPACサービスの改善
3. 九州地区大学図書館協議会H29総会研修会（H29.5長崎市で開催）に向けての準備

Do 実行

- 前期・後期で学生・教員による選定図書の実施
- 電子掲示板で図書館からのお知らせを掲示
- 図書館利用規定の見直し
- OPAC有料サービスへの移行を検討
- 九私短図協会長館との連絡調整

Act 改善

1. 利用者サービスの改善
 - 古くて利用されない図書が書架を占有していて学生より目的の図書が探しにくいとの指摘があり、廃棄を検討
2. 九州地区大学図書館協議会H29総会研修会

Check 検証

- 学生の貸し出し冊数前年比10%減
- 利用者を退職教職員にも拡大
- 学外OPACから洋書を除外し、登録冊数を5万冊未満に抑え、無料版の利用を継続
- 総会研修会の講師選任など

平成28度 「自己点検評価室」 年次報告書

区分： 学科コース ・ **委員会等** ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）

氏名：武藤 玲路（室長）

PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 3つのポリシーのガイドラインに基づいて平成29年度の教育システム総覧を作成する。
2. 教育の内部質保証の根拠資料として、評価指標を体系化・可視化した図表を作成する。
3. 第3クールの認証評価について学内研修会を実施し、全教職員に準備計画を周知する。

DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 平成29年度の教育システム総覧を作成し、教育目標と学修成果、3つのポリシーの体系化を行った。
2. 自己点検・評価の根拠資料として、全学科・コース共通の教育内容一覧と学修成果一覧を作成した。
3. 年度末に実施したSD研修会において、全教職員を対象に第3クールの認証評価の概要説明を行った。

CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。

※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「**□**S・A・B・C・D」

今回改定した平成29年度の教育システム総覧は、運営委員会で何度も検討して作成したものであり、文科省のガイドラインの要件を十分満たし、認証評価においても適格とみなされる内容になっていると思われる。

2. 自己評価「S・**□**A・B・C・D」

各学科・コースの内部質保証のための根拠資料として、「特色のある教育内容」、「学修成果の到達度」、「学生支援の満足度」、「進路・資格の状況」等について、体系的に可視化した図表を作成することができた。

3. 自己評価「S・**□**A・B・C・D」

全教職員を対象とした学内のSD研修会において、第3クールの認証評価の趣旨や準備日程、報告書執筆要項、短大評価基準、書面調査、訪問調査、今後の計画等について、概要説明を行った。

ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 教育システム総覧は毎年全学的に点検し、社会のニーズに応じた本学独自の内容にしていく必要がある。
2. 他に有効な評価指標がないかを検討し、学務システム上で自動算出できるように構築していく必要がある。
3. 全学的に根拠資料に基づいた成果検証の手法を確立し、早期にPDCAサイクルを確立する必要がある。

平成28年度 自己点検評価室 年次報告

Plan 計画

1. 3つのポリシーのガイドラインに基づいて平成29年度の教育システム総覧を作成する。
2. 教育の内部質保証の根拠資料として、評価指標を体系化・可視化した図表を作成する。
3. 第3クールの認証評価について学内研修会を実施し、全教職員に準備計画を周知する。

Do 実行

1. 平成29年度教育システム総覧を作成し、教育目標と学修成果、3つのポリシーの体系化を行った。
2. 自己点検・評価の根拠資料として全学科・コース共通の教育内容一覧と学修成果一覧を作成した。
3. 年度末に実施したSD研修会において、全教職員を対象に第3クールの認証評価の概要説明を行った。

Act 改善

1. 教育システム総覧は毎年全学的に点検し、社会のニーズに応じた本学独自の内容にしていく必要がある。
2. 他に有効な評価指標がないかを検討し、学務システム上で自動算出できるように構築していく必要がある。
3. 全学的に根拠資料に基づいた成果検証の手法を確立し、早期にPDCAサイクルを確立する必要がある。

Check 検証

1. 今回改定した平成29年度の教育システム総覧は、運営委員会で何度も検討して作成したものであり、文科省のガイドラインの要件を十分満たし、認証評価においても適格とみなされる内容になっていると思われる。
2. 各学科・コースの内部質保証のための根拠資料として、「特色のある教育内容」、「学修成果の到達度」、「学生支援の満足度」、「進路・資格の状況」等について、体系的に可視化した図表を作成することができた。
3. 全教職員を対象とした学内のSD研修会において、第3クールの認証評価の趣旨や準備日程、報告書執筆要項、短大評価基準、書面調査、訪問調査、今後の計画等について、概要説明を行った。

平成28年度 「入試広報室」 年次報告書	
区分：	学科コース ・ <input checked="" type="checkbox"/> 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他 ()
氏名：	久原 和敬 (室長)
PLAN (計画)：	査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
	<ol style="list-style-type: none"> 1. 積極的な高校訪問、各種ガイダンスへの参加、オープンキャンパス、各種印刷物のリニューアル、HPの更新等を積極的に行い、次年度入学の学生募集活動に繋げる。 2. 本学教職員及び校内の各種会議 (特に運営委員、募集広報委員会) と連携し、積極的な募集広報に努める。 3. 少子化の進行で高校生が減少する中、各種取組を通じて、平成28年度入学生以上の学生確保を目指す。
DO (実行)：	目標の達成に向けて計画を遂行する。
	<ol style="list-style-type: none"> 1. 前年度の内容や取組を見直し、積極的に改善・行動する。特に、募集活動に繋がるであろうと思われるものについては、費用対効果も勘案しながら、積極的に取り組んでいく。 2. ほぼ毎週行われる運営委員会及び1か月に1回程度行われる募集広報委員会では、各委員との情報共有 (報告・連絡・相談) に努め、全学体制を構築する。 3. 前年度以上の入学生確保のため、特に各種ガイダンスとオープンキャンパスには力を入れて取り組む。また、広報用チラシの作成、HPの更新、情報収集のための高校訪問、長崎女子高校との連携なども積極的に取り組む。
CHECK (検証)：	成果を測定 (量的・質的データ) し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに <input checked="" type="checkbox"/> (囲み線) を付ける。
	<ol style="list-style-type: none"> 1. 自己評価「S・A・<input checked="" type="checkbox"/> B・C・D」 高校訪問は延べ250校 (4月～2月)、進路ガイダンスは71回 (高校51回、会場20回) で、面談者は延べ約652人 (H29年2月まで)、学校見学会は4校 (長崎女子高校を除く) に対応、オープンキャンパスは4回実施し、高校生だけの参加者は延べ249名 (参加者数は夏の3回分) 2. 自己評価「S・<input checked="" type="checkbox"/> A・B・C・D」 ほぼ計画どおりに実施し、全学で取り組む体制が確立できた。 3. 自己評価「S・A・<input checked="" type="checkbox"/> B・C・D」 11月の推薦入試での志願者は174人 (前年比-2名)。その他の入試を含めて約190名を想定している。
ACT (改善)：	課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
	<ol style="list-style-type: none"> 1. 高校訪問計画、募集要項作成 (入試日程、学外会場、検定料納入方法等)、オープンキャンパスの取組など、次年度は手直しする必要がある。また、進路ガイダンスでは、県外・離島地区なども検討したい。 2. 運営委員会では28年度以上に積極的に提案して、学生募集の改善策・活性化につながる取組を模索したい。 3. HPを含めた広報の手法について、更なる改善を図り、190名程度の入学者数確保に努める。

平成28年度 入試広報室 年次報告

「『本学に入学したい』と思える短大づくり」の一環としての入試広報室の取組

Plan 計画

- ・ 高校訪問、ガイダンス、HP更新、OC等への積極的な対応
- ・ 本学教職員及び各種会議との連携
- ・ 各種取組を通じた前年度以上の入学生確保

Do 実行

進路ガイダンス、OC、高校訪問、HPの更新・充実、広報用チラシの新規作成、大学案内パンフレット・募集要項の充実、学校見学会の充実、長崎女子高校との連携推進、関係高校連絡協議会の開催 等

Act 改善

1. 進路ガイダンス：県北、離島、県外へ
2. OC：積極的な広報、メニューの検討
3. 高校訪問：訪問校、時期等の見直し、タイムリーな資料提供
4. パンフレット：2017版を基に改善
5. 募集要項：入学者受入れ方針等を追加、出願時の封筒にチェック欄を記載

Check 検証

進路ガイダンス（71回）【高校51回、会場20回・面談者652名】、高校訪問（延べ250校）、OC参加者（高校生が249名）
→ 結果として、推薦入試での入学予定者174名＋一般入試・自己推薦2期で13名
計187名

平成28年度 「学生相談室」 年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）

氏名：福井 謙一郎（室長）

PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 「学生相談室」としての学生への広報活動を行う。
2. 学生への直接的支援を行う。
3. 学生の病態水準が上がった際のリファー先を確保し、連携する。

DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 新入生オリエンテーション時に学生相談室の紹介を行った。
2. 学生への直接的支援は、相談員全員のセッション数がおおよそ120件に上り、かつ継続したケースの中で退学に至ることがほとんどなかった。
3. 学生の病態水準が上がったと認識した時点で、日頃連携している医療機関へ連絡し、リファーを行った。

CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。

※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「S・A・B・C・D」
学生の「学生相談室」への認識が未だ低く、改善されていないように感じられる。
2. 自己評価「S・A・B・C・D」
学生の直接的支援に関しては、相談員でこまめに連絡を取り合いながら進められたと考えられる。
3. 自己評価「S・A・B・C・D」
リファー後も医療機関と連絡を取り合いながら支援に当たった。

ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 教員間の連携をより密に行っていく必要があると考えられる。
2. 学生への広報活動を、チラシ等の作成を通してより活発に行っていく必要がある。

平成28年度 学生相談室 年次報告

Plan 計画

1. 「学生相談室」としての学生への広報活動を行う。
2. 学生への直接的支援を行う。
3. 学生の病態水準が上がった際のリファー先を確保し、連携する。

Do 実行

1. 新生オリエンテーション時に学生相談室の紹介を行った。
2. 学生への直接的支援は、相談員全員のセッション数がおおよそ120件に上り、かつ継続したケースの中で退学に至ることがほとんどなかった。
3. 学生の病態水準が上がったと認識した時点で、日頃連携している医療機関へ連絡し、リファーを行った。

Act 改善

1. 教員間の連携をより密に行っていく必要があると考えられる。
2. 学生への広報活動を、チラシ等の作成を通してより活発に行っていく必要がある。

Check 検証

1. 学生の「学生相談室」への認識が未だ低く、改善されていないように感じられる。
2. 学生の直接的支援に関しては、相談員でこまめに連絡を取り合いながら進められたと考えられる。
3. リファー後も医療機関と連絡を取り合いながら支援に当たった。

平成28年度 「FD・SD委員会」 年次報告書

区分： 学科コース ・ **委員会等** ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）

氏名：武藤 玲路（委員長）

PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. FD 研修会で授業内容や方法に関する討論会・意見交換会を実施し、各教員の授業改善の参考にする。
2. SD 研修会で学務システムのPC 技術講習会を実施し、全教職員がシステムを活用できるようにする。
3. SD 研修会で学科・コース別の年次報告会を実施し、PDCA サイクルによる教育の質保証を確立する。

DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 8月の第1回FD 研修会で、初年次教育と教授法、成績評価をテーマとしたディスカッションを実施した。
2. SD 研修会でPC 技術講習会を3回実施し、学務システムの操作方法の修得と改善点の意見交換を行った。
3. 3月の第4回SD 研修会で、学科・コース別に特色ある職業教育と成果について年次報告会を実施した。

CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「S・**□A**・B・C・D」
授業改善を統一テーマにした学科・コース間での少人数のディスカッションは、どのテーマのグループにおいても活発な意見交換ができ、グループごとの議事録にも大変有用で参考になる意見が多く記載されていた。
2. 自己評価「S・A・B・**□C**・D」
学務システムの履修関係の操作は理解できたが、他の機能が未開発であり、未だ学生支援に活用できない。
3. 自己評価「S・**□A**・B・C・D」
今回は、IR 推進室と連携して「教育内容」と「成果一覧」を学科・コース別に統一した図表にして示した。そのため、学科・コース間の比較が容易になり、成果を客観的に評価することができた。特に、Lの濱口先生の年次報告は質的・量的な根拠資料を駆使して、特色ある職業・キャリア教育、ゼミナール、就職支援などの成果検証を明快に行っており、多くの教職員から絶賛されていた。研修会のアンケートでは、今回の研修会の満足度は5段階評価で4.3、自分の業務での有用性は4.4であり、大変有意義な内容であったと言える。

ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 次年度のFD 研修会では、引き続き「授業改善」をテーマにしたディスカッション等を実施していきたい。
2. 次年度のPC 技術講習会では、引き続き「学務システム」の操作取得とシステムの改善について検討したい。
3. 次年度のSD 研修会では、3つのポリシーとPDCA サイクルによる教育の質保証について検証していきたい。

平成28年度 FD・SD委員会 年次報告

Plan 計画

1. FD研修会で授業内容や方法に関する討論会・意見交換会を実施し、各教員の授業改善の参考にする。
2. SD研修会で学務システムのPC技術講習会を実施し、全教職員がシステムを活用できるようにする。
3. SD研修会で学科・コース別の年次報告会を実施し、PDCAサイクルによる教育の質保証を確立する。

Do 実行

1. 8月のFD研修会で、初年次教育と教授法、成績評価をテーマとしたディスカッションを実施した。
2. SD研修会でPC技術講習会を3回実施し、学務システムの操作方法の修得と改善点の意見交換を行った。
3. 3月のSD研修会で、学科・コース別に特色ある職業教育と成果について年次報告会を実施した。

Act 改善

1. 次年度のFD研修会では、引き続き「授業改善」をテーマにしたディスカッション等を実施していきたい。
2. 次年度のPC技術講習会では、引き続き「学務システム」の操作取得とシステムの改善について検討したい。
3. 次年度のSD研修会では、3つのポリシーとPDCAサイクルによる教育の質保証について検証していきたい。

Check 検証

1. 授業改善を統一テーマにした学科・コース間での少人数のディスカッションは、どのテーマのグループにおいても活発な意見交換ができ、グループごとの議事録にも大変有用で参考になる意見が多く記載されていた。
2. 学務システムの履修関係の操作は理解できたが、他の機能が未開発であり、未だ学生支援に活用できない。
3. 今回はIR推進室と連携して「教育内容」と「成果一覧」を学科・コース別に統一した図表にして示した。そのため、学科・コース間の比較が容易になり、成果を客観的に評価することができた。研修会のアンケートでは、今回の研修会の満足度は5段階評価で4.3、自分の業務での有用性は4.4であり、大変有意義な内容であったと言える。

平成28度 「募集・広報委員会」 年次報告書	
区分：	学科専攻・ 委員会等 ・事務局等・教職員個人・その他（ ）
氏名：	久原 和敬（委員長）
PLAN（計画）：	査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
	<ol style="list-style-type: none"> 1. オープンキャンパスの充実と積極的な広報活動による集客を図る 2. 本学の教育内容や活動を学内外に発信するための、効果的な広報について検討する 3. 募集・広報に必要な情報の収集・整理・共有の方法を検討する
DO（実行）：	目標の達成に向けて計画を遂行する。
	<ol style="list-style-type: none"> 1. 夏のオープンキャンパスは、7月16日（土）、7月30日（土）、8月11日（祝・木）の3回実施した。また、3月25日（土）には春のキャンパス見学会を実施した。それぞれリーフレットやチラシを作成して各高校へ持参また郵送による広報を行うとともに、短大HPでの広報・申し込みを行った。「女子短アンバサダー」と名称変更した学生スタッフもオープンキャンパスを中心に活動してもらった。 2. 学校案内パンフレットの作成に早めに着手した。学報グリッターを大幅にリニューアルして7月と11月の2回発行した。主な高校生を読者のターゲットに絞り込み、本学に興味を持ってもらえるよう、7月は在学生をメインに掲載し、11月は各学科・コースの内容を分かりやすく工夫して掲載した。短大HPのリニューアルも積極的に行った。 3. 入試広報室が中心となって募集・広報に必要な情報を収集し、委員会にて協議する流れができた。
CHECK（検証）：	成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。
	<ol style="list-style-type: none"> 1. 自己評価「S・A・B・C・D」 夏のOC参加者数は前年度より若干減少したものの、保護者説明会の時間帯を変更するなど、保護者にも体験学習に参加・見学してもらうように配慮した。 2. 自己評価「S・A・B・C・D」 事務局職員の若い感性和委員の協力により、前年度以上の広報活動が展開できた。 3. 自己評価「S・A・B・C・D」 入試広報室と募集広報委員会が一体となって、業務を推進できた。
ACT（改善）：	課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
	<ol style="list-style-type: none"> 1. 入試広報室と募集・広報委員会の業務内容を整理し、役割を明確にするとともに、一体となった取組を推進する。 2. オープンキャンパス準備計画の早期立案と役割分担の明確化を図り、全学的な取り組み体制を強固にする。 3. 本学の教育内容や活動を学内外に発信するための効果的な広報として、様々な広報媒体の活用方法について検討する。

平成28年度 募集・広報委員会年次報告

Plan 計画

1. オープンキャンパスの充実と積極的な広報活動による集客を図る
2. 本学の教育内容や活動を学内外に発信するための、効果的な広報について検討する
3. 募集・広報に必要な情報の収集・整理・共有の方法を検討する

Do 実行

1. 夏には3回のオープンキャンパスを実施。また、3月25日(土)には春のキャンパス見学会を実施した。それぞれリーフレットやチラシを作成して各高校へ持参また郵送による広報を行うとともに、短大HPでの広報・申し込みを行った。「女子短アンバサダー」を中心とした学生スタッフには、オープンキャンパスを中心に活動してもらった。
2. 学校案内パンフレットの作成に早めに着手した。学報グリッターを大幅にリニューアルして7月と11月の2回発行した。主な高校生を読者のターゲットに絞り込み、本学に興味を持ってもらえるよう、学科コースの内容を分かりやすく工夫して掲載した。短大HPのリニューアルを行った。
3. 入試広報室が中心となって募集・広報に必要な情報を収集した。

Act 改善

1. 入試広報室と募集・広報委員会の業務内容を整理し、役割を明確にする
2. オープンキャンパス準備計画の早期立案と役割分担の明確化を図り、全学的な取り組み体制を強固にする
3. 本学の教育内容や活動を学内外に発信するための効果的な広報として、短大HP等の積極的な活用方法を検討する

Check 検証

1. 入試広報室が中心となって、オープンキャンパス準備が行われたこともあり、運営もスムーズであった。夏のオープンキャンパスの参加者は延べ249名。
2. 高校生と感覚の近い若い女性目線での広報資料の作成ができた。学内で作成したチラシは約18種類にも上る。
3. 入試広報室と募集広報委員会との連携により、募集・広報に必要な情報の収集・整理・共有は格段に進んだ。

平成28年度 「紀要・図書委員会」年次報告書

区分： 学科コース ・ **委員会等** ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）

氏名：田川 千秋（委員長）

PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 図書館利用者増のため授業との関係を深化させる。そのため教職員へ協力を依頼する。
図書選定は学生、教職員共に前・後期で実施する。
2. 紀要について、掲載内容など執筆要綱と電子公開などについて平成27年度同様とする。

DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 運営委員会および教授会において、授業関係で図書館での学びも取り入れてもらうようお願いする。
・学内の電子掲示板で、月ごとに図書館からのお知らせや、新刊案内を掲載し利用者数増加の成果をねらう。
2. 教員へはメールにて投稿を呼びかけ、11月頃に投稿を希望する教員を調査し、
12月頃に業者へ見積もりを依頼する。
・1月の中旬頃に投稿1回目を締め切り、3月初旬に完成予定。

CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「S・A・**□**B・C・D」
図書選書は前期・後期それぞれ予算内でできた。学生が参考文献を選ぶ際の参考にはなっただと思われるが、選書に関わっていない、その他の学生たちには参考文献の選び方、図書の魅力について伝えられなかった。その結果図書入館者数増に至らなかった。
単に入館者数で比較するのではなく在籍者数と利用者数の割合で比較する必要がある。
4月に入館者数が確定する。
2. 自己評価「S・A・**□**B・C・D」
投稿呼びかけは予定通りでき、本年は20件の投稿で4件の増であった。
校正が多くあったため納品が少し遅れたが支障があるほどではなかった。

ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 入館者数と在籍者数との比較で、本当に入館者数が減っているのか把握し、減じる原因を探る。
2. 投稿の呼びかけを早めにし、注意・喚起を促す。執筆要綱、電子公開については本年同様とする。

平成28年度 紀要・図書委員会 年次報告

Plan 計画

1. 図書館利用者増のため授業との関係を深化させる。そのため教職員へ協力を依頼する。
2. 紀要について、掲載内容など執筆要綱と電子公開などについて平成27年度同様とする。

Do 実行

1. 運営委員会および教授会において、授業関係で図書館での学びも取り入れてもらうようお願いする。
2. 教員へはメールにて投稿を呼びかけ、11月頃に投稿を希望する教員を調査し、12月頃に業者へ見積もりを依頼する。

Act 改善

1. 入館者数と在籍者数との比較で、本当に入館者数が減っているのか把握し、減じる原因を探る。
2. 投稿の呼びかけを早めにし、注意・喚起を促す。執筆要綱、電子公開については本年同様とする。

Check 検証

1. 図書選書は前期・後期それぞれ予算内でできた。学生が参考文献を選ぶ際の参考にはなったと思われるが、選書に関わっていない、その他の学生たちには参考文献の選び方、図書の魅力について伝えられなかった。その結果図書入館者数増に至らなかった。単に入館者数で比較するのではなく在籍者数と利用者数の割合で比較する必要がある。
2. 投稿呼びかけは予定どおりでき、本年は20件の投稿で4件の増であった。校正が多くあったため納品が少し遅れたが支障があるほどではなかった。

平成28年度 「教務委員会」 年次報告書

区分： 学科コース ・ **委員会等** ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）

氏名：山口 ゆかり (委員長)

PLAN (計画)： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 授業力の更なる向上と改善
 - (1) 学修成果に基づきシラバスの様式 (DP、CP等とのリンク) を検討する。
 - (2) オフィスアワーの設定期限と記録の徹底を図る。
 - (3) 相互授業参観の実施要領を見直し、学び合う環境づくりに努める。
2. 初年次教育の充実
 - (1) フレッシュヤーズセミナーの開催 (平成29年度以降) について検討する。
3. 「タイプ1 教育の質的転換」の獲得を目指した取組の推進
 - (1) GPA制度の活用法を検討する。
 - (2) 履修登録上限値を検証する。

DO (実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. (1) 学修成果の項目数を変更 (3→6) するとともに、短期大学教務必携、タイプ1の要件等を参考に、準備学修時間と課題 (試験やレポート) に対するフィードバック方法を明記した。併せて、IR推進室長の協力により、科目コードの見直しを行った。
 (2) 前・後期とも担当委員と教務課が、メールで協力を依頼した。
 (3) 担当委員の提案により、オープンクラスウィーク (7/11~15) を設け、期間内に開講している授業の参観を、事前予約を行わず自由に行うこととした。
2. (1) 「現代社会と女性」とのタイアップ方法を考えた。
 (2) 教務に関わる手続き等を徹底させるため、オリエンテーションを利用した教務課職員によるガイダンスを提案した。
 (3) 教育システム総覧の改訂に伴い、建学の精神を理解させるための資料 (シラバス、カリキュラムツリー、カリキュラムリスト) を見直した。
3. (1) GPAを進級・卒業判定に用いる基準の提案、履修規程ならびに既修得単位に関する規程の見直し、単位認定規程の廃止を行った。併せて、IR推進室長の協力により、成績証明書 (様式) の見直し、成績報告時の留意事項に関する提案を行った。
 (2) 教務課を通して、学科・コース別の履修登録最大値を確認した。

CHECK (検証)： 成果を測定 (量的・質的データ) し、測定結果を分析して課題を発見する。

※評価のアルファベットに□ (囲み線) を付ける。

1. 自己評価「S・**□A**・B・C・D」

- (1) シラバス：平成29年度シラバスの作成要領は、第8回 (12月) 教授会で承認を得た。今回は開発中の学務システムを用いて作成したが、SD研修会での学びが活かされ、入力作業はこれまでよりスムーズに進んだ。しかし昨年同様、授業担当者の一部に遅延がみられ、その後の作業 (第三者チェック、訂正、簡易製本シラバスの完成) に遅れが生じた。また、今年度追加した2項目 (準備学修時間、課題等への対応) について、その意図が十分に伝わっておらず、再度検討をお願いするケースがみられた。これについては、第三者チェック後の訂正依頼書に記入例を示すことで対処できた。次年度のシラバス作成要領には、今回検討した記入例を明記したい。
- (2) オフィスアワー：2月21日現在の実施状況 (定時と臨時の合計) は、前期：85件、167名、記録11名、(H27前期：52件、74名、記録11名)、後期：41件、92名、記録13名、(H27後期：20件、29名、記録3名) であった。昨年と比較すると、いずれの項目とも増加している。予め設定した時間を利用した学生は、年間を通して11名 (9%) と少なかったが、在室中は基本的に受け入れるオープンなスタイルが、利用者増につながった。また、担当委員の呼びかけにより後期の記録者が増加し、目標 (記録の徹底) に近づけたことは良かった。一方、設定期限の厳守については、前期に一部徹底できずホームページでの告知 (4月25日) が遅れたが、後期は教務課の働きかけと教員の協力により、期限前に告知 (8月25日) することができた。なお、オフィスアワーを利用した学生の相談内容 (表1) は、昨年同様、学修に関すること (67%) が最も多く、次いで、就職に関すること (16%)、その他 (13%) の順であった。

表1 平成28年度・オフィスアワー相談内容別月間利用状況

	4月	5月	6月	7月	8月	10月	11月	12月	1月	2月	計
学修に関するこ と	5	19	14	9	7	10	5	0	7	10	86 (67%)
就職に関するこ と	4	4	3	3	0	0	2	2	1	1	20 (16%)
私的なこと	0	2	0	2	0	0	0	0	0	1	5 (4%)
その他	3	5	5	2	0	0	0	0	0	2	17 (13%)
計	12 (9%)	30 (23%)	22 (17%)	16 (13%)	7 (5%)	10 (8%)	7 (5%)	2 (2%)	8 (6%)	14 (11%)	128 (100%)

※6月は、学修と就職について同時に相談を受けたケースが2件あった。(いずれも件数にカウントしている)

- (3) 相互授業参観：実施要領は、第3回(6月)教授会で承認を得た。7/11~27までの参観件数は16件で、前年度前期(19件)より少なかったが、参観を受けた教員を合わせると21名が関わっていた。参観件数が減少した理由として、実施要領の提案が遅れたことや、時間確保の問題があげられる。一昨年前期の実施件数(41件)から考えると、早めの周知と教員の意識改革が必要と思われた。

2. 自己評価「S・A・B・C・D」

- (1) フレッシュャーズセミナー：担当者の計画が遅れ(11月)、運営委員会への提案には至らなかった。教務委員会としては現在、学長主導のもと進んでいる「現代社会と女性」(初年次教育：3回)に、できる限り参加することとした。
- (2) 教務課によるガイダンス：学生部長を通して運営委員会に提案(4月)したが、人事異動等の問題から難しいとの回答(1月)を得た。
- (3) 「建学の精神」に関連する資料：学務システムで管理するシラバスは、4月より学生もWeb上での検索が可能となる。また、学科・コースの教務委員が改訂したカリキュラムツリーは、新年度のCollege Lifeに掲載し、ホームページでも公開する。さらに、平成28年度版のカリキュラムリストは、5月にホームページで公開した。一方、新年度版カリキュラムリストの作成には、シラバスの訂正が済み次第取りかかるが、学務システムのデータを用いて作成していただくよう、業者に検討を依頼(2月)している。

3. 自己評価「S・A・B・C・D」

- (1) GPAの活用法：第3回(6月)教授会で承認を得た。具体的には、学期末のGPAが1.2未満の者に学修指導を行った上で、進級要件(1年次通年のGPA：1.0以上)ならびに卒業要件(卒業時のGPA：1.2以上)を定めるとした。併せて、履修規程に継続履修制度を付け加えた。次年度以降は、成績の提出期限を厳守することや、学務システムを活用した学修指導の徹底が求められる。
GPAを記載した成績証明書の様式：第3回(6月)教授会で承認後、9月から適用している。
成績報告時の留意事項：運営委員会(7月)で承認後、教務課が授業担当者に通知し、前期成績の報告から適用している。
- (2) 学科・コース別年間履修登録単位の最大値は、表2のとおりである。ただし、履修規程第10条第2項に則り、学外実習、集中講義、卒業単位に含まない科目の単位数は除いている。また、通年科目の単位数は、初めて登録した学期に加算した。表2より、各学科・コースとも上限値を越えて履修した学生はいなかったことがわかる。

表2 平成28年度・年間履修登録単位の最大値

学科・コース	1年生	2年生	履修規程に基づく 年間履修登録上限値
栄養士	45単位	36単位	45単位
ビジネス・医療秘書	46単位	32単位	50単位
介護福祉士	52単位	38単位	60単位
幼児教育	43単位	40単位	57単位

16年度生より基礎科目の選択必修方法が変わったため、2年次の上限値は次年度の履修状況を基に検証することとした。なお、1年次から2年次にかけて開講する科目(現代社会と女性、幼児体育、保育実習指導I)については、登録単位数算定の関係から、学年別に科目名を分割(〇〇1、〇〇2)または開講時期を見直す必要があることを確認した。

ACT(改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

- シラバスの作成要領を見直し(記入例の追加)、スケジュールに沿った業務の進行を心がける。
- 「現代社会と女性」にできる限り参加し、必要に応じてサポートする。
- 学務システムを活用した学修支援の推進に努める。

平成28年度 教務委員会 年次報告

Plan 計画

1. 授業力の更なる向上と改善
 - (1)学修成果に基づくシラバス様式の検討
 - (2)オフィスアワーの設定期限と記録の徹底
 - (3)相互授業参観実施要領の見直し
2. 初年次教育の充実
 - (1)フレッシュヤーズセミナーの検討
3. 「タイプ1 教育の質的転換」の獲得を目指した取組の推進
 - (1)GPA制度の活用法の検討
 - (2)履修登録上限値の検証

Do 実行

1. (1)学修成果の項目数(3→6)の変更
準備学修時間と課題等に対するフィードバック方法の追加
科目コードの見直し
(2)担当委員と教務課による呼びかけ
(3)オープンクラスウィークの設定と事前予約なしの参観
2. (1)「現代社会と女性」とのタイアップ企画の立案
(2)オリエンテーションを利用した教務課による指導の提案
(3)「建学の精神」の理解につながる資料の作成
3. (1)進級・卒業判定に用いる基準の提案と履修規程の見直し
成績証明書の見直しと成績報告時の注意事項に関する提案
(2)学科・コース別履修登録最大値の確認

Act 改善

1. シラバスの充実
 - (1)作成要領の見直し(記入例の追加)
 - (2)期限の厳守
2. 「現代社会と女性」への積極的な参加
3. 学務システムを活用した学修支援の推進
 - (1)Web履修登録の実施と見直し
 - (2)成績入力期限の設定と学修指導の徹底

Check 検証

1. (1)第8回(12月)教授会で承認
学務システムを用いた入力作業は、容易に進行
一部入力の遅延→第3者チェック以降の作業に影響あり
追加した2項目の書き方について質問あり
→訂正依頼書に記入例を示して対処
(2)【前期】85件、167名、記録11名 (H27:52件、74名)
【後期】41件、92名、記録13名 (H27:20件、29名)
(3)【7/11~27】16件、21名が関与 (H27前期:19件)
2. (1)検討が遅れ(11月)、提案には至らなかった
(2)運営委員会(4月末)に提案→実施困難と回答(1月)
(3)シラバス(1~3月)、カリキュラムツリー(2月)、
カリキュラムリスト(H28版:5月完成、H29版:シラバス完成後着手)
3. (1)第3回(6月)教授会で承認、平成29年度カレッジライフに掲載
成績の入力方法や証明書は、H28前期分から適用
(2)16年度生1年次の履修上限値は問題なし、2年次の検証は次年度実施
(1年次登録最大値:S45単位、L46単位、F52単位、Y43単位)

平成28年度 「学生委員会」 年次報告書

区分： 学科コース ・ **委員会等** ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）

氏名：古賀 克彦（委員長）

PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 【学生生活の支援】学生生活全般並びに学友自治会活動に関する事項について、学生の自主性を尊重し支援活動を行なう
2. 【地域との関係】社会の一員として地域に貢献し、地域に愛される短大を目指す
3. 【学友自治会運営】学友自治会役員から各担当学生委員への報告・連絡・相談を徹底させる。また学友自治会への適切な教育・指導を行い学友自治会円滑な運営を支援する。
4. 【学生委員会運営】学生委員間のコミュニケーションも緊密にし、効率的な活動ができるように協力体制を確立する。

DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 各行事担当に分かれて学生の主体性を尊重し支援活動を行った。支援・指導は一方的にこちらの考えを押し付けるのではなく、学生の考えや希望を聞き取り話し合いを行い、どのようにしたら問題点が解決し行事が円滑に進行するか学生に考えさせながら行った。
2. バスマナー向上を目指しクラス会や各行事等で学生が集まった際にバスマナー向上について呼びかけたり、バスマナー向上に関するポスターを作成し呼びかけを繰り返したりした。また弥生祭後片付け日に「わたしたちのまちグリーン作戦実施」を実施し短大周辺の清掃を実施した。
3. 学友自治会役員から各担当委員への報告・連絡・相談については、年度当初に指導を行った結果ほぼ全ての役員において円滑に行われた。また当初コミュニケーションが苦手な学生もいたが、毎週、学友自治会役員内で定期的なミーティングを実施し委員内で積極的に支えあうことで、最終的には全ての役員がにおいて報告・連絡・相談が行われた。また、コミュニケーションが密となったため学友自治会運営は円滑に行われた。
4. 定期的に学生委員会を開催し各行事の進行状況や総括を行い、教員間での情報共有に努めた。また学生委員会以外にも毎週開催されるアssenブリの時間に教員も集まり、各学友自治会行事運営について情報共有や問題点解決を行った。

CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。

※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「S・**A**・B・C・D」
今年度は学友自治会役員内や自治会役員と教員間でのコミュニケーションや報告・連絡・相談は円滑に行われ、また学生の自主性を尊重した学友自治会運営が行われたと思われる。これは鷺池学友自治会会長のリーダーシップと学生課の森綾果職員による学生・教職員間各種折衝や調整によるものが大きい。
2. 自己評価「S・A・**B**・C・D」
地域貢献として実施した清掃活動については参加した全員の学生には達成感があり、地域の活動がマナーを見直すきっかけになったと思われる。バスマナーに関しては指導を行ったにもかかわらず、バスマナーが悪いとの指摘を外部の方からいただいた。
3. 自己評価「S・**A**・B・C・D」
今年度は学友自治会役員と学生委員会教員とのコミュニケーションは円滑に行われ、学友自治会運営も問題なく行われたと思われる。来年度も今年度と同様に運営できるように指導や引継ぎ等をしっかり行いたい。
4. 自己評価「S・**A**・B・C・D」
学生委員会やアssenブリの時間を活用し連携はうまくできていると思われる。来年度も引き続き学生委員会教職員の連携を密にしていきたい

ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 今年度、学友自治会活動が円滑に進行できた点を総括し、来年の学友自治会活動に反映させる。
2. バスマナー向上の方策を学生委員会、学友自治会で考え、全学的な取り組みとして実行する。
3. 今年度の総括を踏まえた引継ぎや指導を行う。
4. 定期的な学生委員会の開催とアssenブリの時間の活用

平成28年度 学生委員会 年次報告

Plan 計画

1. 【学生生活の支援】学生生活全般並びに学友自治会活動に関する事項について、学生の自主性を尊重し支援活動を行なう
2. 【地域との関係】社会の一員として地域に貢献し、地域に愛される短大を目指す
3. 【学友自治会運営】学友自治会役員から各担当学生委員への報告・連絡・相談を徹底させる。また学友自治会への適切な教育・指導を行い学友自治会の円滑な運営を支援する。
4. 【学生委員会運営】学生委員間のコミュニケーションも緊密にし、効率的な活動ができるように協力体制を確立する。

Do 実行

1. 各行事担当に分かれて学生の主体性を尊重し支援活動を実施。支援は学生の考えや希望を聞き取り話し合いを行い、学生に考えさせながら実施。
2. バスマナー向上を目指しクラス会や各行事等で学生が集まった際にバスマナー向上について。また弥生祭後片付け日に「わたしたちのまちクリーン作戦実施」を実施し短大周辺の清掃を実施した。
3. 学友自治会役員から各担当委員への報告・連絡・相談については、年度当初に指導を実施
4. 定期的に学生委員会を開催したりアッセンブリの際に各行事の進行状況確認や総括を行い情報共有に努めた。

Act 改善

1. 今年度、学友自治会活動が円滑に進行できた点を総括し、来年の学友自治会活動に反映させる。
2. バスマナー向上の方策を学生委員会、学友自治会で考え、全学的な取り組みとして実行する。
3. 今年度の総括を踏まえた引継ぎや指導を行う。
4. 定期的な学生員会の開催とアッセンブリの時間の活用

Check 検証

1. 今年度は学友自治会役員内や自治会役員と教員間でのコミュニケーションや報告・連絡・相談は円滑に行われ、また学生の自主性を尊重した学友自治会運営が行われた。
2. 地域貢献として実施した清掃活動については参加学生がマナーを見直すきっかけになった。しかしバスマナーに関しては指導を行ったにもかかわらず、バスマナーが悪いとの指摘を外部の方からいただいた。
3. 今年度は学友自治会役員と学生委員会教員とのコミュニケーションは円滑に行われ、学友自治会運営も問題なく行われたと思われる。
4. 学生委員会やアッセンブリの時間を活用し連携はうまくできていると思われる。

平成28年度 「キャリア支援センター」 年次報告書

区分： 学科コース ・ **委員会等** ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）

氏名：原田 実輝（センター長）

PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 就職率100%を目指す。
2. 昨年度の改善点を踏まえ、引き続き就職先調査を行う。
3. 就職関係の書類を整備する。

DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 各学科・コースにおいて就職ガイダンスや卒業生講話、外部講師による講話、二者・三者面談、模擬面接を行った。またセンターでも履歴書添削指導や、面接練習を行った。今年は特に、受験前と後の報告を徹底させ、その学生に合ったタイミングでの個別相談・支援に力を入れた。
2. 平成27年度卒業生の就職先を対象に郵送による就職先調査を11月より順次行った。依頼文は学長名で統一し、3領域6項目の質問を全学科・コース共通質問とした。
3. ・正規・非正規等勤務条件が明確にわかるように求人票を変更する。
・認定こども園化に伴い、進路届の職種分類等必要書類を見直す。
・証明書交付願い・証明書用封筒を整備する。

CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「S・**□A**・B・C・D」
3月28日現在の全体の就職率は96.3%で、昨年同期末（96.5%）とほぼ同じ就職率を維持することができた。最終就職率に向け、残り6名の未決定者の支援をしっかりと行っていきたい。
2. 自己評価「S・**□A**・B・C・D」
回答率（対卒業生）は S 66% L 53% F 80% Y 76% 全体平均 68%で、目標の70%に近づくことができた。

全学の評価平均は3.3で、項目別では 思考力・判断力と主体性・実行力の項目がやや低い評価であった。
3. 自己評価「S・A・**□B**・C・D」
求人票に関しては他大学の求人票の情報収集のみに終わってしまい改訂までは行えなかったため、次年度早急に取り掛かりたい。

ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 活動開始が遅い学生の支援、専門就職をしない学生の支援を強化するべく、各学科・コースとの連携を深め、就職支援体制を充実させる。
2. 就職先調査の結果を分析し教育支援の改善を図ると共に、就職先調査の内容も全学科・コース共通の質問に学科・コース独自の質問を加えて進化させていく。
3. 次年度も引き続き就職率100%を目指す。

平成28年度 キャリア支援センター 年次報告

Plan 計画

1. 就職率100%を目指す。
2. 昨年度の改善点を踏まえ、今年度も引き続き就職先調査を行う。
3. 就職関係の書類を整備する。

Do 実行

1. 各学科・コース別支援に加え、センターでは履歴書添削指導や、希望者には面接練習を適宜行った。今年は特に就職試験前と後の報告体制を強化し、その学生に合ったタイミングでの個別支援・アドバイスに力を入れた。
2. 平成27年度卒業生の就職先を対象に、郵送による就職先調査を11月に実施した。
依頼文は学長名で出し、3領域6項目の全学科共通質問を設定した。
3. 証明書交付願や証明書用の封筒の見直しを図った。

Act 改善

1. 活動開始が遅い学生の支援、専門就職を希望しない学生の支援を強化するべく、各学科・コースとの連携を深め、就職支援体制を充実させる。
2. 就職先調査の結果を分析して教育支援の改善を図ると共に、就職先調査の内容や方法についても再検討する。
3. 次年度も引き続き就職率100%を目指す。

Check 検証

1. 3月39日現在の全体の就職率は96.3%で、昨年同期(96.5%)とほぼ同様の就職率を維持することが出来た。
未決定者はあと6名。
2. ① 回答率(対卒業生)は、S 66%、L 33%、F 80%、Y 76%、全体68%と、目標の70%に近づく結果であった。
② 全学の評価平均は3.3で、思考力・創造力と主体性・実行力の項目がやや低かった。
3. 求人票に関しては他大学の情報収集のみに終わり改訂までには到らなかったため、次年度早急にとりかかりたい。

平成28年度 「キャリア支援・S」年次報告書

区分： 学科コース ・ **委員会等** ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）

氏名：橋口 亮（キャリア支援委員）

PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 専門就職の割合を高め、100%の就職率を目指す。
2. 学生及び教職員とも報告・連絡・相談の徹底を目指す。
3. 卒業生の就職先調査を行う。

DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 2年生は、4月の3者面談をはじめ、キャリアガイダンスを開催し、活動のマナーや模擬面接などを行い、活動を支援した。また、直営の栄養士を希望する学生や進学を希望する学生には個別に対応した。
1年生は、後期よりキャリアガイダンスを開催し、就職活動の意識を高める取組を実施した。委託の企業による会社説明会の他、内定した先輩による活動体験など意識向上に努めた。
2. 活動報告は、就職担当者、チューターおよびキャリアセンターへの報告、連絡、相談するようガイダンスなどの機会を利用して伝え、学生の意識向上に努めた。
3. 昨年度に引き続き、平成27年度の卒業生を対象に、就職先アンケートを実施（11月～12月下旬）した。

CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。

※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「S・**□A**・B・C・D」

2年生および1年生ともキャリアガイダンスの出席率は昨年度に比べると高くなり、2年生の場合、第1回が100%、第2回が93%、1年生は89%であった。1年生に数名、連絡なしに欠席した学生がおり気になるところである。2年生、1年生のガイダンスとも就職活動に直結したもので、必要性を感じていると思う。1年生対象の委託の企業による会社説明会は、後期に実施したので2年次からの活動に有効であったといえる。なお、三者面談には31組の学生と保護者が参加した。

2. 自己評価「S・**□A**・B・C・D」

ほぼ、報告、連絡、相談はできていたと感じている。数名、3月まで活度をする様子がなく後押しが大変であった。チューターが個別に支援される場所もあり、担当者として助けられることもあった。

3. 自己評価「S・A・B・C・D」

アンケートの実施結果は、回収結果が83%と高く安心した。質問項目の結果を見ると、学科、コースで統一した質問は、いずれも5点満点中3点台で、全体的に高い評価とはいえない。また、栄養士コース独自の質問（栄養士としての力）は、3点台ではあるものいずれも低い評価であった。評価の高い意見もある一方、課題や改善を求める意見も多く、教育支援の課題が見えている。

ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 効果的なキャリアガイダンスを実施する。その際、連絡なしの欠席者を減らすため、あらゆる機会を見て社会人のマナーに関することを伝えたい。
2. 引き続き、報告、連絡、相談の徹底を図りたい。
3. 就職先の評価は、教育支援の評価でもある。キャリア支援を含む全学的な課題でもある。次年度も就職先のアンケートは実施する予定である。

平成28年度 キャリア支援S 年次報告

Plan 計画

1. 就職率100%の達成
2. 学生および教職員との報告・連絡・相談の徹底
3. 就職先アンケートの実施

Do 実行

1. 2年生に対し就職3者面談、キャリアガイダンスを実施した。1年生は後期にキャリアガイダンスの一環として企業説明会を実施した。
2. ガイダンス、その他を利用して報告・連絡・相談の徹底について伝えた。
3. 平成27年度卒業生を対象に、就職先アンケートを実施した

Act 改善

1. 学生が必要とするキャリアガイダンスを実施する。
2. 報告・連絡・相談の徹底を図る。
3. 11月に、卒業生のアンケートを実施する。

Check 検証

1. 就職率は、3月8日現在、92%である。8%は、未活動の学生である。また、1、2年生とも昨年度に比較し、キャリアガイダンスの出席率が高く、普通の状態に戻った。三者面談は31組参加。
2. 2年生は、ほぼ守れていた。
3. 就職先アンケートの回答率は83%と高かったが、アンケートの各項目とも3点台であり評価が高いとはいえなかった。

平成28年度 「キャリア支援・L」 年次報告書

区分： 学科コース ・ **委員会等** ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）

氏名：武藤 玲路（キャリア支援委員）

PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. Lの教員全員で未就職者に対する個別指導に取り組み、未活動者や家事手伝いの学生をなくす。
2. 就職先調査を全学科・コース共通の質問と学科・コース独自の質問に分類して継続的に実施する。
3. 次年度も引き続き就職率100%を目指す。

DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 専任教員3名全員による就職支援体制で、11月と1月に未活動者や活動停滞者に4者面談を実施した。
2. 今年度も昨年度のLの卒業生の就職先を対象にして、全学科・コース共通の就職先調査を実施した。
3. 年間を通してキャリアアップセミナーの授業を中心に、就職試験対策と求人斡旋の就職支援を行った。

CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「S・**□A**・B・C・D」
3/15現在で、病気による家事手伝いは1名いたが、例年数名いた未活動者は今年度0名であった。
2. 自己評価「S・A・**□B**・C・D」
就職先調査は実施したが、回答数8件（回答率53%）で、L独自の質問による調査も実施しなかった。
3. 自己評価「S・**□A**・B・C・D」
3/15現在で、卒業生15名、就職希望14名、就職内定13名（一般事務6名、医療事務7名）、未就職者1名、就職率92.9%、専門就職率と正社員率はともに100%であった。

ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. Lの教員全員で未就職者に対する個別指導に取り組み、未活動者や家事手伝いの学生も減少させる。
2. 就職先調査の内容を全学科コース共通の質問と学科コース独自の質問に分類して、継続的に実施する。
3. 次年度も引き続き就職率100%を目指す。

平成28年度 キャリア支援L 年次報告

Plan 計画

1. Lの教員全員で未就職者に対する個別指導に取り組み、未活動者や家事手伝いの学生をなくす。
2. 就職先調査を全学科・コース共通の質問と学科・コース独自の質問に分類して継続的に実施する。
3. 次年度も引き続き就職率100%を目指す。

Do 実行

1. 専任教員3名全員による就職支援体制で、11月と1月に未活動者や活動停滞者に4者面談を実施した。
2. 今年度も昨年度のLの卒業生の就職先を対象にして、全学科・コース共通の就職先調査を実施した。
3. 年間を通してキャリアアップセミナーの授業を中心に、就職試験対策と求人斡旋の就職支援を行った。

Act 改善

1. Lの教員全員で未就職者に対する個別指導に取り組み、未活動者や家事手伝いの学生も減少させる。
2. 就職先調査の内容を全学科コース共通の質問と学科コース独自の質問に分類して、継続的に実施する。
3. 次年度も引き続き就職率100%を目指す。

Check 検証

1. 専任教員3名全員による就職支援体制で、11月と1月に未活動者や活動停滞者に4者面談を2回実施した。
2. 就職先調査は実施したが、回答数8件(回答率53%)で、L独自の質問調査も実施しなかった。
- 3/15現在で、卒業生15名、就職希望14名、就職内定13名(一般事務6名、医療事務7名)、未就職者1名、就職率92.9%、専門就職率と正社員率はともに100%であった。

平成28年度 「キャリア支援・F」 年次報告書

区分： 学科コース ・ **委員会等** ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）

氏名：田川 千秋（キャリア支援委員）

PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 就職活動へ早期に取り組む
2. 就職率100%の維持
3. 就職活動のための職場見学と体験を実現する

DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 4月後半から6月に三者面談（養成科を除く）を実施し、就職についての希望を確認、履歴書の書き方をキャリア支援センター長と共に確認、助言を行った。
事業所説明会へ積極的に参加できるよう説明会の周知と参加を促し、遠方や締め切りが迫っている事業所見学へは教員が送迎をするなどの支援を行った。
2. 就職率100%の維持のため社会福祉協議会への人材登録を行い、事業所・卒業生から、現場で求められる介護福祉士像、就職するにあたり学んでおくべきこと準備しておくことなど講話をしてもらった。
3. 27年度卒業生を対象に就職先アンケートを実施した

CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。

※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「**S**・A・B・C・D」

本人・家族の意思確認は7月中旬にはできた。養成科の学生には教員がそれぞれに声をかけ、得た情報を教員が共有、教員の特性を活かした支援をしたことで途中での就職先希望変更などへもスムーズに対応でき、就職支援に当たることができた。

幾つもの事業所見学、企業説明会に参加する学生いた一方で、教員全員が活動を促すような学生もおり、全体としての活動が遅かった。

2. 自己評価「S・A・**B**・C・D」

就職は3月末に93.3%で、1名は不採用となったためこれからも支援を継続する。

1名に対し教員の特性で支援を続けたが、本人が支援の受け入れを拒むことがあった。

3. 自己評価「S・A・**B**・C・D」

評価については今回から5段階評価で調査を実施し、評価平均が3.4%であった。これは社会人のそれまでの価値観、生活習慣、仕事する上での優先順位のつけ方なども、問われたように感じられるものがあったように思われる。

ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 就職活動への促しを全体と個別にそれぞれ学生の個別性に合わせて行い、求人票の見方などが理解出来るような支援をする
2. 国家試験受験があるため11月までに就職が内定する
3. 自分の自己評価と社会の評価の違いを理解してもらい、社会人としても基礎力をつける。

平成28年度 キャリア支援F 年次報告

Plan 計画

1. 就職活動へ早期に取り組む
2. 就職率100%の維持
3. 就職活動のための職場見学と体験を実現する

Do 実行

1. 4月後半から6月に三者面談（養成科を除く）を実施し、就職についての希望を確認、履歴書の書き方をキャリア支援センター長と共に確認、助言を行った。事業所説明会へ積極的に参加できるよう説明会の周知と参加を促し、遠方や締め切りが迫っている事業所見学へは教員が送迎をするなどの支援を行った。
2. 就職率100%の維持のため社会福祉協議会への人材登録を行い、事業所・卒業生から、現場で求められる介護福祉士像、就職するにあたり学んでおくべきこと準備しておくことなど講話をもらった。
3. 27年度卒業生を対象に就職先アンケートを実施した。

Act 改善

1. 就職活動への促しを全体と個別にそれぞれ学生の個性に合わせて行い、求人票の見方などが理解出来るような支援をする。
2. 国家試験受験があるため11月までに就職が内定する。
3. 自分の自己評価と社会の評価の違いを理解してもらい、社会人としても基礎力をつける。

Check 検証

1. 本人・家族の意思確認は7月中旬にはできた。養成科の学生には教員がそれぞれに声をかけ、得た情報を教員が共有、教員の特性を活かした支援をしたことで途中での就職先希望変更などへもスムーズに対応でき、就職支援に当たることができた。幾つもの事業所見学、企業説明会に参加する学生いた一方で、教員全員が活動を促すような学生もおり、全体としての活動が遅かった。
2. 就職は3月末に93.3%で、1名は不採用となったためこれからも支援を継続する。1名に対し教員の特性で支援を続けたが、本人が支援の受け入れを拒むことがあった。
3. 評価については今回から5段階評価で調査を実施し、評価平均が3.4%であった。これは社会人のそれまでの価値観、生活習慣、仕事する上での優先順位のつけ方なども、問われたように感じられるものがあったように思われる。

平成28年度 「キャリア支援・Y」 年次報告書

区分： 学科コース ・ **委員会等** ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）

氏名：中村 浩美（キャリア支援委員） 昆 正子（キャリア支援委員）

PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 就職先調査を実施する。
2. 従来からの進路相談会を効果的・効率的に実施することに加え、日頃からの学生の就職活動状況の把握、キャリア支援センターとの連携の仕方についての整理を進め、よりきめ細かな情報共有と指導を行う。
3. 就職に関する心構えを機会があるごとに学生に伝える。

DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. ①2年生の進路希望の把握と就職内定までの指導を強化する（平成28年4月～）。
②就職先を訪問しての卒業生調査を実施する（平成28年6月～8月）。
③就職先に評価票を送付しての就職先調査を実施する（平成28年11月～平成29年1月）。
2. 以下の方法でキャリア支援センターとの情報共有に努める。
・朝夕に支援委員がセンターを訪れ、最新の学生の動向について情報交換をする。
・学生の進路調査をHフォルダに作成し、互いに閲覧できるようにする。入力は支援委員ほか、チューターに依頼する。
3. 「就活セミナー」を開講（前期始業後～夏頃：計3回）。

CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。

※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「S・A・**□B**・C・D」

- ①就職担当とチューターによって随時その進路状況を確認しメールでも求人情報を送信し指導を重ねてきた。
- ②実習先訪問と兼ねて実施した。概ね「よく頑張っている」との評価であったが、素直さ、積極性に欠けるといった意見も1割弱見られた。
- ③卒業生の評価は回答率76.4%。全体平均3.5（5項目中高いもの…誠実性・真摯性4.1 低いもの…思考力・創造力3.2）。自由記述から評価点・課題点の詳細を確認できた。
素直さ・子どもへの愛情・自分の意見を持つ・文章作成能力・ピアノ等実技能力・明るさ・元気さ卒業生が評価されている点もあったが、卒業生の課題点としては以下の内容が見られた（下線部は比較的多かった意見）。
○保育者（社会人）としての基本的な課題点（スピーディさ・常識の把握・思い込みで行動する・伝達ミス・提出期限を守れない・体調管理等）
○知識に関する課題点（月齢に合わせた四大習慣の理解）
○保育技術に関する課題点（ピアノの練習・園児を引き付けるための保育技術・事務作業（PC）への慣れ・文書作成能力（記録）・子どもへの接し方や保護者への言葉遣い・歌やダンス・堂々と子どもの前に立つ等）
○コミュニケーション力に関する課題点（あいさつをする際の態度・明るさ・分からないことを素直に聞く等）
○人間力に関する課題点（自分で考え判断する・感情の浮き沈みを子どもの前で出す・大きな行事への不安感・積極的、主体的な行動が苦手等）

2. 自己評価「S・**□A**・B・C・D」昨年度に比べ細めに支援委員が進路状況を入力することができ、センターと連携した学生の動向把握・進路支援が行えた。

3. 自己評価「S・**□A**・B・C・D」

「就活セミナー」は2回実施した。学生からは「就活生としての意識づけになった」との声が聞かれた。

ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. ①チューターとの連携（情報交換）
②時期的に実習も重なり、9月まで延期させたい。また全教員が記入を確実にを行う。
③就職先の園が多いため、期日までの返信が難しかったが、締切期日時点で打ち切り、集計担当者に提出する。
2. 年次当初より2年生就職状況一覧表に記入しキャリア支援センターと連携をとる。
3. 就活への意識をより高く持たせるレクチャーを行う。

平成28年度 キャリア支援Y 年次報告

Plan 計画

1. 就職先調査を実施する。
2. 従来からの進路相談会を効果的・効率的に実施することに加え、日頃からの学生の就職活動状況の把握、キャリア支援センターとの連携の仕方についての整理を進め、よりきめ細かな情報共有と指導を行う。
3. 就職に関する心構えを機会があることに学生に伝える。

Do 実行

1.
 - ①2年生の進路希望の把握と就職内定までの指導を強化する（平成28年4月～）。
 - ②就職先を訪問しての卒業生調査を実施する（平成28年6月～8月）。
 - ③就職先に評価票を送付しての就職先調査を実施する（平成28年11月～平成29年1月）。
2. 以下の方法でキャリア支援センターとの情報共有に努める。
 - ・朝夕に支援委員がセンターを訪れ、最新の学生の動向について情報交換をする。
 - ・学生の進路調査をHフォルダに作成し、互いに閲覧できるようにする。入力支援委員ほか、チューターに依頼する。
3. 「就活セミナー」を開講（前期始業後～夏頃：計3回）。

Act 改善

1. ①チューターとの連携（情報交換）
 - ②時期的に実習も重なり、9月まで延期させたい。また全教員が記入を確実に行う。
 - ③就職先の園が多いため、期日までの返信が難しかったが、締切期日時点で打ち切り、集計担当者に提出する。
2. 年次当初より2年生就職状況一覧表に記入しキャリア支援センターと連携をとる。
3. 就活への意識をより高く持たせるレクチャーを行う。

Check 検証

1. ①就職担当とチューターによって随時その進路状況を確認しメールでも求人情報を送信し指導を重ねてきた。
 - ②実習先訪問と兼ねて実施した。概ね「よく頑張っている」との評価であったが、素直さ、積極性に欠けるといった意見も1割弱見られた。
 - ③卒業生の評価は回答率76.4%。全体平均3.5（5項目中高いもの...誠実性・真摯性4.1 低いもの...思考力・創造力3.2）。自由記述から評価点・課題点の詳細を確認できた。
2. 昨年度に比べ細めに支援委員が進路状況を入力することができ、センターと連携した学生の動向把握・進路支援が行えた。
3. 「就活セミナー」は2回実施した。学生からは「就活生としての意識づけになった」との声が聞かれた。

平成28年度 「地域連携推進センター」 年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他 ()

氏名：長尾 久美子 (センター長)

PLAN (計画)： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. センター規定の見直し、定例会議の開催など、運営の定着化を図る。
2. 長崎市との連携会議を開催する。(1回)
3. 各学科・コースにおける地域連携の活動について、取り組みの推進を図る。

DO (実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. センター規定の見直し、定例会議の開催など、運営の定着化を図る。
 - ①センター規定を見直した。
 - ②地域連携に関する事項は運営委員会で協議され、地域連携推進センター独自で協議する必要がなかったため会議は開催しなかった。
2. 長崎市との連携会議を開催する。(1回)

全体的な連絡会議は開催しなかった。
現代社会と女性の「長崎さるく」などで、長崎市と連携して取り組んだ。
3. 各学科・コースにおける地域連携の活動について、取り組みの推進を図る。

各学科・コースで地域連携活動が活発に行われた。ねんりんピックにL・Fの学生全員が参加した。

CHECK (検証)： 成果を測定(量的・質的データ)し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□(囲み線)を付ける。

1. 自己評価「S・A・B・・D」
規定は見直したが、会議の開催なく、センターとしての活動は行われなかった。
2. 自己評価「S・A・B・・D」
センターとしての年1回の連絡会議は開催せず、主体的なかわりがなかった。
3. 自己評価「S・・B・C・D」
各学科・コースにおける地域連携活動が積極的に行われ、多くの学生が参加した。

ACT (改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 組織改正に伴うセンターの在り方を検討する。
2. 各学科・コースにおける地域連携の活動の推進を図る。

平成28年度 地域連携推進センター 年次報告

Plan 計画

1. センター規定の見直し、定例会議の開催など、運営の定着化を図る。
2. 長崎市との連携会議を開催する。(1回)
3. 各学科・コースにおける地域連携の活動について、取り組みの推進を図る。

Do 実行

1. センター規定を見直した。地域連携に関する事項は運営委員会で協議され、地域連携推進センター独自で協議する必要がなかったため会議は開催しなかった。
2. 全体的な連絡会議は開催しなかった。現代社会と女性の「長崎さるく」などで、長崎市と連携して取り組んだ。
3. 各学科・コースで地域連携活動が活発に行われた。ねんりんピックにL・Fの学生全員が参加した。

Act 改善

1. 組織改正に伴うセンターの在り方を検討する。
2. 各学科・コースにおける地域連携の活動の推進を図る。

Check 検証

1. 規定は見直したが、会議の開催なく、センターとしての活動は行われなかった。
2. センターとしての年1回の連絡会議は開催せず、主体的なかわりがなかった。
3. 各学科・コースにおける地域連携活動が積極的に行われ、多くの学生が参加した。

平成28年度 「生涯学習推進室」 年次報告書

区分： 学科コース ・ **委員会等** ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）

氏名：山本 尚史（室長）

PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 地域のニーズを把握し、全学的な講座運営を目指す。
2. 地域の方々、受験生とその保護者等への広報という視点を取り入れ、学科・コースのつながりを意識した講座を設け、本学をアピールする。
3. 各講座運営は、学科・コースが責任をもって実施するとともに、事務局との連携を強化する。

DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 平成27年度の公開講座で実施したアンケート調査をもとに講座を精選し、全学科・コースの協力のもと、15講座実施した。
2. 地元長崎ならではの食に関する講座、子育て支援を目的とした講座、地域住民の関心の高い講座、地域の働き手が求める講座を実施した。
3. 各講座については実施を担当する学科・コースに募集・広報をお願いした。また、HPの更新・情報誌への広告掲載など事務局会計課、入試広報室と連携した。

CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「S・A・**□**・C・D」
いずれの講座も受講者の満足度は高いものであった。栄養士コースの2講座は参加者が調理に参加することで本学の教育研究の広報に繋がった。ビジネス・医療秘書コースと介護福祉士コースの講座は本学近隣の地域住民を対象に行ったため、地域と本学をつなぐ講座であった。そして幼児教育学科のわくわく講座は地域の保育者のニーズを捉え、参加者も多くかった。ただし、シンポジウムに関しては保育者のニーズとのミスマッチ、幼小の卒園式・卒業式と重なり開催にはいたらなかったことが残念であった。

2. 自己評価「S・A・**□**・C・D」
地域の関心の高いもの、現職保育者への研修等を通じて地域の方々への講座を十分に意識して取り組むことができた。ただし、目標としていた各学科・コースが連携して受験生・保護者へ本学をアピールする講座を実施するには至らなかった。

3. 自己評価「S・A・**□**・C・D」
限られた人員のもと、各学科・コースの協力のもと講座の運営を行うことができた。HP、情報誌での発信については、事務局との連携もあり、十分に効果があったと思われる。

ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 今後も地域のニーズを踏まえて講座を実施していきたい。本学は学生の免許資格の取得を推進し、地域に人材を送り出すことを使命としている。地域で働く人たちのニーズを掘り起こすことで、今後の公開講座の展開を考えていきたい。特に保育者のニーズについては園の訪問等の際に掘り起こしていきたい。
2. 本学の講座は、地域の方々と寄り添い実施できている。今後も継続して地域に寄り添い、実施していきたい。また、受験生や保護者については、公開講座等は本学を知ってもらうよき機会となる。大学行事と一体的に実施する機会を見出していきたい。
3. 各学科・コースの先生方には書類作成・広報等、多大なる御協力をいただいた。他の業務との兼ね合いもあるが書類作成・広報などの手続きについては、生涯学習推進室の運営を考えれば、今後も協力していただきたい。そして講座の取りまとめについては、各学科・コースの窓口の先生に今後ご指導をいただきたい。また、募集に関しては早めの対応を心がけると同時に、あらゆる機会を活用したい。最後に事務局との連携については事務局側からの配慮もあり、円滑に行うことができているため、今後もこの体制を維持したい。

平成28年度 生涯学習推進室 年次報告

Plan 計画

1. 地域のニーズを把握し、全学的な講座運営を目指す。
2. 地域の方々、受験生とその保護者等への広報という視点を取り入れ、学科・コースのつながりを意識した講座を設け、本学をアピールする。
3. 各講座運営は、学科・コースが責任をもって実施するとともに、事務局との連携を強化する。

Do 実行

1. 平成27年度の公開講座で実施したアンケート調査をもとに講座を精選し、全学科・コースの協力のもと、13講座実施した。
2. 地元長崎ならではの食に関する講座、子育て支援を目的とした講座、地域住民の関心の高い講座を実施した。
3. 各講座については実施を担当する学科・コースに募集・広報をお願いした。また、HPの更新・情報誌への広告掲載など事務局会計課、入試広報室と連携した。

Act 改善

1. 今後も地域のニーズを掘り起こしていきたい。特に、地域で働く人たちのニーズを掘り起こすことに努めたい。
2. 本学の講座は、地域の方々のニーズをよく踏まえ実施できている。今後も継続して地域に寄り添い、実施していきたい。また、受験生や保護者については、公開講座等は本学を知ってもらうよき機会となる。大学行事と一体的に実施する機会を見出していきたい。
3. 各学科・コースの先生方には書類作成・広報等、多大なる御協力をいただいた。今後も協力していただきたい。講座の取りまとめについては、各学科・コースの窓口の先生に今後ご指導をいただきたい。最後に事務局との連携については事務局側からの配慮もあり、円滑に行うことができているため、今後もこの体制を維持したい。

Check 検証

1. いずれの講座も受講者の満足度は高いものであった。しかし、参加者募集の観点からは、参加者の需要と本学の企画との間にミスマッチが生じ、開催に至らなかった講座もあった。
2. 目標としていた各学科・コースが連携して受験生・保護者へ本学をアピールする講座を実施するには至らなかった。
3. 限られた人員のもと、各学科・コースの協力のもと講座の運営を行うことができた。HP、情報誌での発信については、事務局との連携もあり、十分に効果があったと思われる。

平成28年度 「地域子育て支援室」 年次報告書

区分： 学科コース ・ **委員会等** ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）

氏名：本村 弥寿子（室長）

PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 地域連携推進室との連携を密に取り、子育て支援に関する情報を地域に多く提供する。
2. 他学科・コースとの連携を取りながら、多面的に地域の子育て家庭への支援に努める。

DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 公開講座の中にわくわく講座として、“絵本の読み聞かせ” “運動遊び” “親子ふれあい遊び” を附属幼稚園で行った。
2. 公開講座の“絵本の読み聞かせ”の講師を、昨年度まで時津図書館司書にお願いしていたところ、本年度は本学図書館司書の木下さんに依頼した。

CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。

※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「 S・A・**□B**・C・D 」
3講座を予定したものの、11月に開校予定だった“運動遊び”は参加者がなく、2月の“親子ふれあい遊び”と一緒にいった。開講できたものに関しては、適当な参加者数であったため、充実した時間を過ごしてもらうことができていると思われる。参加者が附属幼稚園在園児の弟妹や本学の近所の親子であった。もっと多くの地域の人に足を運んでもらうことが課題である。
2. 自己評価「 S・**□A**・B・C・D 」
図書館司書の木下さんに快く引き受けていただけたため、長崎女子短期大学ブランドをアピールすることができた。大学の図書館に地域の親子が来館できることを伝えることもできた。今年度中は来館者はいなかったが、大学自体が地域の子育て家庭に開かれたものであることを伝える機会となった。

ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 地域子育て支援室による遊びの場や講座の提供を、短大と附属幼稚園だけではなく、他の幼稚園や保育園、公民館等を利用して行うことで、様々な地域の親子が参加できるようにする。そのため、PRを大々的に行っていく。
2. 活動を行うたびに短大が子育て家庭に門戸を開いていることを伝え、気軽に足を運んだり相談したりできるようにしたい。そのために、他学科・コースにも協力を依頼し、子育て中の保護者の様々な要望や相談に対応できる体制を作りたい。

平成28年度 地域子育て支援室 年次報告

Plan 計画

1. 地域連携推進センターとの連携を密に取り、子育て支援に関する情報を地域に多く提供する。
2. 他学科・コースとの連携を取りながら、多面的に地域の子育て家庭への支援に努める。

Do 実行

1. 公開講座の中でわくわく講座として“絵本の読み聞かせ”“運動遊び”“親子ふれあい遊び”を附属幼稚園で行った。
2. 公開講座の“絵本の読み聞かせ”の講師を、本学図書館司書の木下さんに依頼した。

Act 改善

1. 今後は、会場を本学と附属幼稚園だけでなく他園や公民館等でも行い、より多くの親子が参加できるようにしたい。そのために、PRをしっかり行いたい。
2. 活動のたびに、本学が子育て家庭に門戸を開いていることを伝え、気軽に足を運んだり相談したりできるようにしたい。そのためにも、他学科・コースにも協力を依頼し、子育て中の保護者の様々な要望や相談に対応できる体制を作りたい。

Check 検証

1. 3講座を予定したものの、“運動遊び”は参加者がなく、“親子ふれあい遊び”と一緒にいった。開講したものに関しては参加者数が適当で、充実したものとなった。参加者は附属幼稚園在園児の弟妹や近所の親子であった。
2. 本学図書館司書に講座保持してもらったため、本学のアピールができた。

平成28年度 「保護者支援・教育研究センター」 年次報告書

区分： 学科コース ・ **委員会等** ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）

氏名：玉島 健二（センター長）

PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 地域連携の視点から、県内市町村との共同事業（親育ち講座）を行う。
2. 研究的視点に基づき、保護者からの意見を取り入れ、講座を改善する。

DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 昨年度と同様、今年度も親育ち講座を実施した。昨年度の評判が高かったためか、受講者が多く、また継続的に受講していた。
2. 昨年度得られた保護者からの意見を取り入れ、講座の内容をよりわかりやすく改変し、そして保護者からの直接的相談にも応じる時間を設けた。

CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「 S・**□A**・B・C・D 」
今年度は受講者が多く、毎回の講座内容に対しても満足度が高かったようで、概ね良い実施状態だったのではないかと考えられる。
2. 自己評価「 S・**□A**・B・C・D 」
「保護者への直接的支援」ならびに「講座の難易度改善」という昨年度の反省を生かして行われた今回の講座は、保護者から『わかりやすかった』等の意見を得たように、改善されたのではないかと考えられる。

ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 今年度の実施状態は良好であったものの、保護者支援・教育「研究」と謳われているような研究がほとんど進まないまま終結した。次年度の「子育て支援センター」化に向けて、研究的な視点を引き継ぎ、保護者の意見を今まで以上に取り入れつつ、活動していきたい。

平成28年度 保護者支援・教育研究センター 年次報告

Plan 計画

1. 地域連携の視点から、県内市町村との共同事業（親育ち講座）を行う。
2. 研究的視点に基づき、保護者からの意見を取り入れ、講座を改善する。

Do 実行

1. 昨年度と同様、今年度も親育ち講座を実施した。昨年度の評判が高かったためか、受講者が多く、また継続的に受講していた。
2. 昨年度得られた保護者からの意見を取り入れ、講座の内容をよりわかりやすく改変し、そして保護者からの直接的相談にも応じる時間を設けた。

Act 改善

1. 今年度の実施状態は良好であったものの、保護者支援・教育「研究」と謳われているような研究がほとんど進まないまま終結した。次年度の「子育て支援センター」化に向けて、研究的な視点を引き継ぎ、保護者の意見を今まで以上に取り入れつつ、活動していきたい。

Check 検証

1. 今年度は受講者が多く、毎回の講座内容に対しても満足度が高かったようで、概ね良い実施状態だったのではないかと考えられる。
2. 「保護者への直接的支援」ならびに「講座の難易度改善」という昨年度の反省を生かして行われた今回の講座は、保護者から『わかりやすかった』等の意見を得たように、改善されたのではないかと考えられる。

平成28年度 「食品加工研究センター」年次報告書

区分： 学科コース ・ **委員会等** ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）

氏名：橋口 亮（センター長）

PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 食品加工研究センター設置の位置づけ（目的）を明確にする。
2. 加工センター設置の目的に沿った活動を計画する。
3. 活動計画に沿い具体的な活動を実施する。

DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 食品加工センターの位置づけについて協議する機会がないまま、年度を終了した。予算がついていたようであるが、目的が明確でない状態で使うことはできない。
2. 行事の際に、必要に応じ、加工食品を提供することにした。
3. 教育懇談会、オープンキャンパスなどにおいて、カステラを製造し、食品加工センターとして提供していることを伝えた。

CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「 S・A・**□**・C・D 」
食品加工センターを設けた目的が明確でない。何が期待されているのか、教育支援との関わりは何か、組織運営における位置づけなど不明である。
2. 自己評価「 S・A・**□**・C・D 」
今年度は、行事の際にカステラを加工し提供したが、評価は高かったと感じている。オープンキャンパスでは、アンケートにカステラの評価を記載する参加者が多かった。
3. 自己評価「 S・A・**□**・C・D 」
教育支援や業務の中で、できる限りの活動をした。

ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 食品加工センターの位置づけを明確にする。
2. 目的が明確になれば、年度計画をたてる。
3. 年度計画に沿い、具体的な活動を行う。

平成28年度 食品加工研究センター 年次報告

Plan 計画

1. 食品加工センターの組織的な位置づけ
2. 目的に沿った活動計画
3. 活動計画に沿った活動

Do 実行

1. 組織的な位置づけに関する協議
2. 具体的な活動計画
3. 教育懇談会、オープンキャンパスなど行事において加工食品を提供した。

Act 改善

1. 加工センターの位置づけを明確にする
2. 目的に沿う実施計画をたてる
3. 行事における加工食品の提供を行う

Check 検証

1. 位置づけが明確でないまま年度末を迎えた
2. 加工センターとしてできる実施計画をたてた
3. 行事において加工センターの加工食品が提供できた。特にオープンキャンパスで提供できたことは参加者のアンケート結果からも評価できる

平成28年度 「IR推進室」年次報告書	
区分：	学科コース・委員会等・ 事務局等 ・教職員個人・その他（ ）
氏名：	森 弘行（室長）
PLAN（計画）：	査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
	1. 複数の資料をリンクした情報分析 2. 学務システム導入に向けてのデータ整備基準の作成 3. IR 関連の情報提供
DO（実行）：	目標の達成に向けて計画を遂行する。
	1. 短期大学コンソーシアム九州共同教学アンケートシステムによる「学修成果の到達度」、「学生支援の満足度」調査の分析 社会人基礎力検査の実施 2. 教務委員会と共に授業コードの提案、成績評価コードの設定 学務システム打ち合わせ会議への出席 学生データの遡及入力 3. 文部科学省からの情報を抜粋して配信
CHECK（検証）：	成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。
	1. 自己評価「S・ □A ・B・C・D」 紀要第41号に掲載 2. 自己評価「S・A・ □B ・C・D」 遡及入力をするための学生データの多くが事務局内PCやサーバーに分散し、管理法が統一されていないため、必要な情報を探し出せない状況がある。 3. 自己評価「S・ □A ・B・C・D」 継続。
ACT（改善）：	課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
	1. 学務システム、各種調査を活用したデータ分析 2. ファイルサーバーのファイルおよびフォルダ管理の推進 3. 適用可能なデータ分析手法の調査

平成28年度 IR推進室 年次報告

Plan 計画

1. 複数の資料をリンクした情報分析
2. 学務システム導入に向けてのデータ整備基準の作成
3. IR関連の情報提供

Do 実行

1. 社会人基礎力検査、短期大学コンソーシアム九州共同教学アンケートの実施
2. 教務委員会と共に授業コードの提案、成績評価コードの設定
3. 学生データの遡及入力
4. 文部科学省新着情報の抜粋を配信

Act 改善

1. 学務システム、各種調査を活用したデータ分析
2. ファイルサーバーのファイルおよびフォルダ管理の推進
3. 適用可能なデータ分析手法の調査

Check 検証

1. 紀要第41号に掲載
2. 遡及入力をするための学生データの多くが事務局内PCやサーバーに分散し、管理法が統一されていないため、必要な情報を探し出せない
3. 文部科学省新着情報の配信は継続

平成28年度 「寮務委員会」 年次報告書

区分： 学科コース ・ **委員会等** ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）

氏名：植木 明子（委員長）

PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 寮生がルールに沿って安全に気持ちよく過ごせるようにする。
2. 短大と高校が情報を共有し、寮運営をサポートする。
3. 若竹寮に関する地震に関しての避難マニュアル・不審者対策マニュアルを具体的に策定する。

DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. ①寮におけるルールづくり等、学生の自治力の育成・・・寮生役員は毎月第1木曜日に役員会を実施。寮生による公平かつ公正な役員選挙の実施。
 ②チューター制を設け、1・2年生の交流を図った
 ③2年生から新1年生への指導がスムーズにできるよう、寮生活のヒントを活用し実施した。
 ④寮生活を学生が楽しめるよう、自主的な活動は実施できるよう支援する。
 スポーツ大会を開きたいという要望は出されたが、日程を組むのが難しく、新年会を球技大会に変えて実施できた。
 ⑤門限違反や夜間消灯後のルール違反、朝点呼に出ない等の学生がおり、学生部長・学長の指導をお願いした。
 ⑥今年度は、夕食を食べずアルバイトに出かけ、門限ぎりぎりに帰寮する学生（2年生）が多くいた。
 そのために、消灯後に食事を作って食べる学生がいた。一部はルール違反の部分で学長に注意してもらった。その際、学生より、「夕食を食べれるようにしてほしい、もしくは食費が戻るようにしてほしい」と要望があった。→ 現在夕食時間が18：00からとなっており、早められないかシダックスと相談中。
2. 寮務委員会での生徒・学生の状況を把握する。・・・会議回数は少ないが、避難訓練、防犯講座の終了後などを活用して情報を共有した。寮生（高校生）に関しては洗濯機の使いかた、担当毎の仕事、食事の時間を守ることなど徹底できないときには高校の先生方の指導に入ってもらい、その都度指導してもらい改善された。また、会議の中で何かあったときの連絡先について日中・夜間・緊急時について確認した。また、全体では気になる行動や問題についても短大・高校で情報を共有し、指導のあり方を話し合った。
3. ①地震マニュアル・不審者対策のマニュアルを期日を決めて、策定した。
 ②防犯講座を設定し、受講させ、寮生に日常での行動で、防犯につながることを見直してもらった。

CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。

1. 自己評価「S・**A**・B・C・D」
 ①寮におけるルールづくり等、学生の自治力の育成・・・寮生役員会により、寮の運営での課題（寮職員が感じていること、学生が感じていること）をあげ、学生が自ら主体的に寮の問題に取り組む流れはだいたいできるようになった。役員選挙については検討してもらい、前期最後に2年生が1年生を集めて集会を開き選挙については役員が1年生へ伝えた。後期ははじめに選挙は実施できた。ただし、引継ぎに関しては会長職以外は文面ではなく口頭での引継ぎをしている。次年度はルールを守ってもらえるような工夫を考えてもらい、文書で残していくように促したい。度重なる門限違反に伴い、再三注した学生もおり、アルバイト先との調整や指導を受ける態度について、学生の社会人としての振る舞い方など、今後とも学生に合わせた助言をする必要があると思われる。
2. 自己評価「S・**A**・B・C・D」
 今年度は、行事日程に高校の意見が反映されなかったことを反省し、次年度は活かせるようにしたい。次年度は高校生の人数も増えるため、各人が気持ちよくすごせる配慮もさらに必要と考えられる。また、個別に対応に必要な高校生、短大生がいるため、引き続き短大と高校で情報共有し、連携していく必要がある。
3. 自己評価「S・**A**・B・C・D」
 防犯マニュアルについては警察署の意見も反映できるようにしたい。他の、マニュアルについても見直しを図り充実していくものにする必要がある。

ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 寮生がルールに沿って安全に気持ちよく過ごせるようにし、対応が必要な学生へも個別に支援する。
2. 短大と高校が情報を共有し、寮運営をサポートする。
3. 火災発生時の避難マニュアル・地震避難マニュアル・不審者対策マニュアルの充実

平成28年度 寮務委員会 年次報告

Plan 計画

1. 寮生がルールに沿って安全に気持ちよく過ごせるようにする。
2. 短大と高校が情報を共有し、寮運営をサポートする。
3. 若竹寮に関する地震に関しての避難マニュアル・不審者対策マニュアルを具体的に策定する。

Do 実行

1. ①寮におけるルールづくり等、学生の自治力の育成
②チューター制を設け1・2年生の交流を図る
③寮生活のヒントの活用
④寮生活を学生が楽しめるよう、自主的な活動の支援
⑤門限違反や夜間消灯後のルール違反、朝点呼に出ない等の学生への指導
⑥指導で上がった学生からの要望への対応→ 現在夕食時間が18:00からとなっており、早められないかシダックスと相談中。
2. 寮務委員会での生徒・学生の状況を把握する。
3. ①地震・不審者対策のマニュアルの策定した。
②防犯講座の実施

Act 改善

1. 寮生がルールに沿って安全に気持ちよく過ごせるようにし、対応が必要な学生へも個別に支援する。
2. 短大と高校が情報を共有し、寮運営をサポートする。
3. 火災発生時の避難マニュアル・地震避難マニュアル・不審者対策マニュアルの充実

Check 検証

1. 寮役員会での学生が自ら主体的に寮の問題に取り組む姿勢はある。しかし、個人の違反者に対する指導を通し学生の社会人としての振る舞い方など、今後とも学生に合わせた助言をする必要があると思われる。
2. 後期の避難訓練に高校の意見が反映されなかったことを反省し、次年度には反映させた。高校と連携することで寮生に対する指導や連携面での強化が図れた。
3. 防犯・火災・地震マニュアルについては見直しを図り充実していくものにする必要がある。

平成28年度 「事務局」 年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ **事務局等** ・ 教職員個人 ・ その他（ ）

氏名：三藤 英文（事務局長）

PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 教務システムの構築
2. 施設設備の充実
3. 危機管理マニュアルを踏まえた研修の実施

DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. システム開発企業との連携を強化して、常に情報交換を行いながら年度末までに構築できるよう遂行する。
2. 年度の当初に、設備の状況を把握し計画的に見直しを進めて行く。
3. FD, SD研修の計画的な実施を図る。特に公的研究費の不正防止

CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「 S・A・B・**□**C・D 」
システム開発先のノウハウが乏しく、開発が後手になり計画通りに進んでいない。今後は、学校側サイド主導で対応する必要がある。
2. 自己評価「 **□**S・A・B・C・D 」
執行計画計上分については、計画通りに実行が図れた。
3. 自己評価「 S・A・**□**B・C・D 」
危機管理マニュアル個々についての細かな研修未実施の課題を解決することができなかった。
第1回FD研修会（8月30日）
SD研修会：第1回（8月30日）、第2回（12月26日）、第3回（3月9日）、第4回（3月21日）
特に、第4回では研究倫理教育として研究費の不正使用等について研修会を実施。

ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 早急なシステム構築に向けた方向性の再検討を行う。
2. 未計画の課題も散見されるため、次年度に執行計画を行い実行に結び付けたい。
3. 危機管理マニュアルの内容についてきめ細かいフォローが次年度は必要と判断します。

平成28年度 事務局 年次報告

Plan 計画

1. 教務システムの構築
2. 施設設備の充実
3. 危機管理マニュアルを踏まえた研修の実施

Do 実行

1. システム開発企業との連携を強化して、常に情報交換を行いながら年度末までに構築できるよう遂行する。
2. 年度の当初に、設備の状況を把握し計画的に見直しを進めて行く。
3. FD, SD研修の計画的な実施を図る。

Act 改善

1. 早急なシステム構築に向けた方向性の再検討を行う。
2. 未計画の課題も散見されるため、次年度に執行計画を行い実行に結び付けたい。
3. 危機管理マニュアルの内容についてきめ細かいフォローが次年度は必要と判断します。

Check 検証

1. システム開発先のノウハウが乏しく、開発が後手になり計画通りに進んでいない。今後は、学校側サイド主導で対応する必要がある。
2. 執行計画計上分については、計画通りに実行が図れた。
3. 危機管理マニュアル個々についての細かな研修未実施の課題を解決することができなかった。
第1回FD研修会（8月30日） SD研修会：
第1回（8月30日）、第2回（12月26日）、
第3回（3月9日）、第4回（3月21日）
特に、第4回では研究倫理教育として研究費の不正使用等について研修会を実施。

平成28年度 「玉島 健二」年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ **教職員個人** ・ その他（ ）

部署名：大学運営

職名：学長

PLAN (計画)： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 平成28年度の運営方針の4項目（努力目標）の実現
 ……特に、運営委員会・入試委員会の活性化による進捗管理を行い、それぞれの取組を実現させる。
2. 「現代社会と女性」の授業を通して、初年次教育の可能性を探る。
3. 各学科・コースや学生の抱える課題を把握・整理し、解決に向けて取り組む。

DO (実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 4項目の努力目標の実現
 入試委員会・運営委員会の活性化による目標の進捗管理、国等の制度改革を見据えながら、情報を収集し、運営委員会や合同会議等で提供するとともに、本学活性化策を探る。
2. 「現代社会と女性」の授業を通して、初年次教育の可能性を探る。
 運営委員会に改革案を示し、次年度に向けた具体的な計画を立てる。
3. 各学科・コースや学生の抱える課題を把握・整理し、解決に向けて取り組む。
 運営委員会での協議、各学科長・コース長との協議、情報収集等を密に行うことにより、課題の解決に取り組む。

CHECK (検証)： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。

※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「 S・A・**□B**・C・D 」
 毎回の協議が「努力目標4項目の実現」につながった。しかし、項目によっては、ほとんど進展しなかったものもあるので、それらは次年度に持ち越しとなった。
2. 自己評価「 S・**□A**・B・C・D 」
 協議の結果、次年度の「現代社会と女性」は1年生の第1回目～第3回目については、「初年次教育」を実施することになった。現在、その内容について協議・検討中であり、3月末には固まるものと思う。
3. 自己評価「 S・A・**□B**・C・D 」
 各学科・コース長からの報告、相談等により課題を抱える学生への対応を行ったが、早目早目の対応ができなかった。なお、学生相談室からも情報提供をしてもらい、全体的な把握はできた。

ACT (改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. ほとんど進展しなかった項目について、再度チェックを行い、原因や理由の把握に努める。
2. 「現代社会と女性」における初年次教育については、平成29年度の実施状況を確認しながら、30年度に向けた改善を検討していく。
3. 各学科及びコース長からの報告、学生相談室責任者からの報告を基本としながら、運営委員会全体での情報共有に努めたい。

平成28年度 「橋口 亮」年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名： 栄養士コース	職名： 教授
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 報告・連絡・相談のうち、報告、連絡の大切さを意識して伝える。 2. 今すぐ実行の姿勢でいきたい。教育支援に取り入れる。 3. 期限を守る意識を持ち、早めに仕事を進める。教育支援に取り入れる。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 授業、卒業研究、ガイダンスなど教育支援の場面において、報告・連絡・相談の大切さを伝えた。 2. 学生への対応、業務への対応など意識して今すぐ実行の姿勢で臨むよう努めた。 3. 今すぐ実行は、期限を守ることになる。意識して取組むよう心がけた。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「 S・A・ B ・C・D 」 報告・連絡・相談の大切さを学生に伝える前に、教職員の意識はどうかと考えさせられる場面があった。報告・連絡・相談が不十分なことから、その場の対応で済ませることもあった。できる限り情報は共有し、協働の姿勢で臨みたい。	
2. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 今すぐ実行は意識して進めた。うっかりミスはあったもののその意識は持ち続けた。	
3. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 ほぼ、期限を守る仕事できた。催促される場面はほとんどなかったようだ。一方、全ての学生の期限を守る意識は変えることができなかった。計算して欠席する学生や、レポートの提出期限が守れない学生への対応に労力を割いた。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 報告・連絡・相談の意識の共有は、組織的な問題である。個人レベルでは意識を持つことを心がけたい。 2. 今すぐ実行の意識を持ち続ける。 3. 期限厳守により、業務が流れが良くなる。意識していきたい。	

平成28年度 「森 弘行」年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名：ビジネス・医療秘書コース	職名：教授
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 学生データベースの改良・利用拡大 2. 学内情報システムの安定運用 3. 分かりやすい授業展開	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. jQuery を利用した操作インターフェースの改善。 パスワード暗号化対応によるセキュリティ強化。 2. サーバーのバックアップおよび運用状況の監視 学内PC でのウイルス定義データベースの更新状況およびウイルス検出状況監視 3. 数式入力ソフト MathType および数学作図ソフト GeoGebra を利用しての教材作成	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 紀要第41号で発表。 2. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 学内ネットワークシステム機器の保守・点検の実施。 誤操作によるユーザーファイルの復元作業の実施。 情報演習室機器の保守・点検の実施。 3. 自己評価「 S・A・ B ・C・D 」 数的理解、統計処理の授業の資料作成に利用したが、数的な基礎学力が低い学生の割合が上がっており、十分な効果を上げるには至らなかった。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 次年度導入予定の学務システムへの移行を支援すると共に、不足する機能を補完する。 2. 導入後6年を経過するインターネットサーバーの更新を提案。 3. 補助教材の作成により、分かりやすい授業展開に努める。	

平成28年度 「長尾 久美子」年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ **教職員個人** ・ その他（ ）

部署名：介護福祉士コース

職名：教授

PLAN (計画)： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 介護福祉士養成教育における入学生激減について、現状や課題を把握し、その要因を研究する。
2. 2年生の卒業時共通試験の全員合格と1年生の国試対策の充実を図る。
3. 授業方法・授業内容を、より、学生が主体的に学ぶように工夫・改善する。

DO (実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 介護福祉士養成教育における入学生激減について、現状や課題を把握し、その要因を研究する。
研究の時間が確保できなかったが、県介護人材確保地域会議への参加や、ハローワーク・高等技術専門学校と連携した合同説明会(4回)での説明など、対外的な取り組みに積極的に参加した。
2. 2年生の卒業時共通試験の全員合格と1年生の国試対策の充実を図る。
①2年生は、キャリアアップセミナーで毎回データ分析と学生への戻しなど、正解率アップに努めた。
②1年生は、受験を意識した理解しやすい授業を行い、問題解決力を高める工夫をした。
3. 授業方法・授業内容を、より、学生が主体的に学ぶように工夫・改善する。
わかりやすく、全員参加型の授業に努めた。

CHECK (検証)： 成果を測定(量的・質的データ)し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□(囲み線)を付ける。

1. 自己評価「S・**□A**・B・C・D」
①研究報告としてまとめることはできなかった。
②新年度入学生20名を確保できた。特に、離職者訓練生10名を確保できたのは、合同説明会等の成果である。
2. 自己評価「S・**□A**・B・C・D」
①卒業時共通試験の成績(介護福祉士コース事業報告書記載)は、全国平均点より良かったが、目標に達しない学生が1名いた。成績低位学生の自学の習慣化を図れなかった。
②1年生は、授業態度・成績等も良く、国試に向けた導入ができた。
3. 自己評価「S・**□A**・B・C・D」
全体的に、わかりやすいという評価はあったが、Yの100人を越える講義では関心を示さない学生もいた。授業内容は今後とも工夫・改善が必要である。

ACT (改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 国家試験100%合格のために全力を尽くす。
2. 授業内容をより工夫する。
3. 学生への個別支援をより丁寧に行う。

平成28年度 「白石 景一」年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ **教職員個人** ・ その他（ ）

部署名： 幼児教育学科

職名： 教授

PLAN (計画)： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 長崎女子校応援プランについては、本年度も実施した方が良いか、高校サイドとも話し合いまた3年生だけで良いかも検討したい。また、ピアノ個人レッスンサポート講座については、定着して来つつあるが昨年度は受講者が一昨年度と比べ減少した。高校サイドも入学予定者も期待しているようであるので、案内の方法も含め更に工夫しながら実施の方向で進めたい。
2. 理論については説明の時間を少なめにし、楽譜を実際に書く時間を多くとり、なるべく即時チェックを心がけたい。スキルの中から理解を深めるように計画を立てたい。指導法では簡単な指導の断片をなるべく多くの学生に経験させる計画を立てたい。
3. 全学的にオーガナイゼーションの観点からシンプル化、見える化、効率化を考える機運を作って行きたい。附属幼稚園との連携を深めそれが内外にアピールできるものにする方向を更に進めていきたい。

DO (実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 長崎女子校応援プランについては、本年度も実施を計画し入試広報室へ相談した。ピアノ個人レッスンサポート講座についても予定通り実施した。本年度は初心者のニュアンスを多少変更し案内をだした。
2. 幼児音楽指導法では、ほとんど毎時間五線紙に書いた課題を一人ひとりチェックし、音符を書くことになれることを心がけた。また、指導法では次週の範囲を予告し予習していることを前提に授業を展開した。
3. 幼稚園教諭2種免許の再課程認定を31年度に控え、カリキュラムの再検討やスリム化の検討を進めている。学内組織についてもなるべく効率の良いスリム化を図るべく提案していく。

CHECK (検証)： 成果を測定(量的・質的データ)し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□(囲み線)を付ける。

1. 自己評価「S・A・**□**B・C・D」
長崎女子高応援プランについて、本年度は、高校との連絡調整を入試広報室長が率先して行い日程の確保などスムーズに計画が立てられた。
ピアノ個人レッスンサポート講座について、本年度は、人数的には丁度よかったのではないと思う。本講座はピアノ技術もさりながら、保育者になるための短大生活への心構えを整える機会にもなっていると感じる。
2. 自己評価「S・A・**□**B・C・D」
幼児音楽指導法での一人ひとりのチェックは音符や楽譜の基礎的ルールを身につけるうえではある程度の効果はあると感じるが、待っている学生がもっと主体的に学べるよう工夫が必要と考える。
3. 自己評価「S・A・**□**B・C・D」
今年度、科目名の変更や選択科目のスリム化を試みたが、基礎科目の考え方が専門科目の基礎であるとの考えから名称が成人を対象にする名称では不可。また、本来選択科目である科目を本学独自の卒業必修科目にしている関係から選択科目の単位数が最低ぎりぎりであるためスリム化も不可となった。

ACT (改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 女子高応援プランについては、スケジュール的に女子高も本学も厳しい状態にあり、体験学習との兼ね合いもあるため実施について再検討する。
ピアノ個人レッスンサポート講座はさらに充実させるべくテキストの改定も検討したい。
2. 幼児音楽指導法での課題チェックは待っている学生が無駄な時間にならないような配慮を心がけたい。
3. 29年度は、31年度に向け本格的にカリキュラムを認定を受けるべく検討し、科目担当資格審査にも耐えうる業績も積むべく対応したい。

平成28年度 「草野 洋介」年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ **教職員個人** ・ その他（ ）

部署名：栄養士コース

職名：教授

PLAN (計画)： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 栄養士コースの中身および栄養士資格に対する認知度アップに努める。また栄養士実力認定試験の成績向上を図り広報につなげたい。
2. 担当科目において栄養士として持つべきスキルを涵養できるよう充実深化した講義を行う
3. 「食と健康」を意識できるよう心掛けた講義を行うとともに、卒業研究においてはより進化した公衆衛生・公衆栄養に関する研究を行う。

DO (実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 本コースの特徴としての「長崎食育学の推進」「大量調理技術の取得」の認知度を高校生に浸透することに努めた。栄養士実力認定試験に準じた講義を行うとともに、入学時から学生に対し栄養士実力認定試験の意識を高めるよう努めた。
2. 栄養士として持つべきスキルを涵養できるよう講義プリントと講義内容の充実に努めた。
3. 「健康管理概論」「公衆衛生学」「食品衛生学」「公衆栄養学」「栄養学Ⅰ・Ⅱ」において栄養士の職務において栄養面に加え健康面の重要性を認識できるよう努めた。卒業研究においては「長崎県健康・栄養調査に基づいた健康寿命実現のための健康食の開発」を行った。

CHECK (検証)： 成果を測定(量的・質的データ)し、測定結果を分析して課題を発見する。

※評価のアルファベットに□(囲み線)を付ける。

1. 自己評価「S・**□A**・B・C・D」
入試の面接において「長崎食育学の推進」「大量調理技術の取得」の認知度が高まったことが確認できたとともに入学者増につなげることができた。栄養士実力認定試験においてA判定は微増だったがC判定を7人から3人に減らすことができた。
2. 自己評価「S・**□A**・B・C・D」
担当科目の授業評価はおおむね良好だったが、栄養士実力認定試験の「公衆衛生学」が平均点を下回っていた。
3. 自己評価「S・**□A**・B・C・D」
栄養士の職務において栄養面に加え健康面の重要性を認識向上はできたと思う。卒業研究はメンバー内の意識差がありより協働を図る必要性を感じた。

ACT (改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

- 1 さらなる「長崎食育学の推進」「大量調理技術の取得」の認知度向上に努め学生募集につなげる・栄養士実力試験の成績向上を図るためにより試験を意識した講義と担当教員の連携を図る。
2. さらなる講義プリントと講義内容の充実に努める。
3. 卒業研究メンバーの協働と内容の深化を図る。

平成28年度 「中澤 伸元」年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ **教職員個人** ・ その他（ ）

部署名： 幼児教育学科

職名： 教授

PLAN (計画)： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 弾き歌い、盤奏法が苦手な学生簡単な伴奏コード指導をする。消極的、受動的学生の指導。
2. 声の出し方、ミックスボイス、発声を身に付けさせる。受動的学生を指名し、個人指導。
3. 保育士としての表現力と保育士として必要な最低限の意識改革と音楽基礎の理解。

DO (実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. まったく初めての学生に対しての指導配慮と、レベルに応じた興味関心を持たせる指導。宿題を出す。集中力を持たせる。学生とのやり取りを大切にする。
2. 身につけていない学生の声が出ない学生を個人指導することで、声が出なかった学生でも指導によって、「あんなに声が出るんだ」自分も出るようになるという自信を持たせる。繰り返しの訓練法を自覚させる。学生が感覚で感じた意見を大切にする。
3. 映像化するような歌詞の読み方、イメージ力とコマ漫画、表情訓練の徹底。抽象度を上げながら、臨場感リアリティーを追及する。表情筋などの細かい指導。「何故」の追及。

CHECK (検証)： 成果を測定(量的・質的データ)し、測定結果を分析して課題を発見する。

※評価のアルファベットに□(囲み線)を付ける。

1. 自己評価「 S・A・**□B**・C・D 」

授業時間内で弾き歌いの指導の時間がなかなか取れなかった。またピアノの先生によって楽譜道理に弾かせる先生に学生は、コードピアノに馴染めず抵抗があるらしい。時間ごとに授業の感想を提出してくれる学生には、個人指導ができた。

2. 自己評価「 S・**□A**・B・C・D 」

学生に発声の繰り返しによる訓練、表情訓練、表現法が成果に導けた。全員で声を出すことで、受動的学生も積極的に歌うようになった。

3. 自己評価「 S・**□A**・B・C・D 」

興味関心を持ち食いついてくる学生と、苦手意識を持つ学生に差がついてしまう。日本人は日本語自体が左脳で始まるので、母音の表現を右脳に切り替える訓練は人数が多いため理解が難しかった。

ACT (改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

- 1 楽典の説明から何故このコードを使うのか、簡単コードで弾き歌いができるように自信をつけさせてあげたい。
2. 結果から入る表情訓練、表現、発声の未来志向からの意識、肉体感覚を身に付けながらゴール設定からの徹底指導を取り入れる。
3. 個人個人が教壇に立ち、クラスメイトを園児にたとえ、実践的指導を行う。日本人は本来左脳タイプが多く、感情表現が苦手なので、右脳タイプの感じる心伝える心を身に付けさせる。左脳から右脳へ。マスクラ訓練、第3の目集中力の訓練。ファルセットインパクトへの導入。

平成28年度 「下釜 綾子」年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ **教職員個人** ・ その他（ ）

部署名： 幼児教育学科

職名： 教授

PLAN (計画)： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 「運動遊びの実践 (指導法)」授業において、学生自身が問題解決しながら学習できるように、意見交換の機会を多く設定する。
2. 「動きのリズム」授業において、手あそびや身体表現活動実施時に具体的事例をあげるなど、わかりやすく丁寧な説明を行い、理解しやすい環境を作る。
3. 「幼児体育」授業において、学生の主体的取り組みを喚起しながら、チャレンジの機会をできるだけ多く設ける。

DO (実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 「運動遊びの実践 (指導法)」授業において、例年、1 コマに3 グループの実践を計画していたが、意見交換の時間を十分に取るために2 グループとし、ディスカッションの時間を確保した。また、指導案立案時の相談を受けるよう促し、事前指導ができた。
2. 「動きのリズム」授業において、授業内容をどのように保育に活かしていくのかが理解しやすいうように、子どもの発達段階や保育事例を挙げて説明を行った。
3. 「幼児体育」授業において、それぞれの課題にチャレンジする機会を毎回授業前後に受け付け、さらに全体に向けて2回増やして実施した。

CHECK (検証)： 成果を測定 (量的・質的データ) し、測定結果を分析して課題を発見する。

※評価のアルファベットに□ (囲み線) を付ける。

1. 自己評価「**Ⓢ**・A・B・C・D」

昨年までの慌ただしさがなくなり、学生はじっくり学習内容に取り組むことができたようであった。特に、指導案立案時の授業前相談時間の確保は有効であった。ただ、自分にとって必要かもしれないと気づきながら、時間割構成に左右され、選択した学生が少なかったのは残念である。

2. 自己評価「S・**Ⓐ**・B・C・D」

学習内容をどのように子どもたちの遊びに繋げていくかや発達段階と指導法の説明機会を多く設けることができた。授業内容を教育実習で応用、実践する学生が多くみられた。

3. 自己評価「S・**Ⓐ**・B・C・D」

できるだけ学生ひとりひとりに適切な助言を行い、課題取り組みへの支援ができるよう心掛けた。この授業の目標に到達できたと回答した学生は、いずれの到達目標においても90%台であり、教え方、全体満足度も96%が満足した、ほぼ満足したと評価している。年々、できるようになるとういう気質が年々希薄化していることが懸念されるため、今後も学生の意欲を喚起するきめ細やかな支援が必要であると感じた。

ACT (改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 時間割構成が選択授業の履修率に大きく影響するため、学業に集中できるような組み合わせを行うとよい。授業前学習は個別指導となるため、学生の理解度向上に繋がる。教員の授業外指導時間の確保が必要である。
2. 保育者としての資質向上と指導力育成に有効な教材を開発できるよう、授業研究を充実させる。
3. 評価の方法を知らせ、課題取り組みへの意欲を喚起することや、支援が必要な学生への関わりを充実させることが重要である。

平成28年度 「松尾 公則」 年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ **教職員個人** ・ その他（ ）

部署名： 幼児教育学科

職名： 教授 特専教授 松尾公則

PLAN (計画)： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 「環境」「ヒトと生物」などの講義は、現場で役立つような内容にし、興味関心を持たせる。
2. 卒研では野外観察ができる人材の育成を目指す。
3. 中庭庭園の池の管理を実践する。

DO (実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 毎時間、講義内容に関する資料（DVD、写真、本物の動物など）を持参し、理解しやすい内容となるよう工夫した。授業は園で役立つ具体的な内容の中に、理論を含むよう努力した。
2. 日々の卒研時間に自然と触れ合う内容を盛り込み、室内だけでなく、屋外でのゼミをなるべく多くした。室内では一人一種の動物か植物を担当し、園児に興味を持たせるための研究を目指した。
3. 池内には多くの動物や植物が生息している。しかし、適当な管理をしないと維持することはできない。学生とともに、清掃や調査を実施した。

CHECK (検証)： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。

※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「**S**・A・B・C・D」

学生の関心も高く十分に目的を達成できたと思う。しかし、おもしろい内容を多くするあまり理論的な面が少し不足した感がある。学生の学習意欲を高めることは大事であるが、教科書にあるような事例も多く取り入れるべきと感じた。

2. 自己評価「S・**A**・B・C・D」

身の回りの自然環境に親しみ、関心を持って接することのできる人材の育成を目指したが、週1回のゼミでは時間が不足した感が強い。日常的な取り組みの必要性を感じた。

3. 自己評価「S・A・**B**・C・D」

池の清掃は1回しかできなかった。ごみが捨てられていることもあるので日常的に清掃する習慣を付けていきたい。

ACT (改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 具体的事例の中に環境教育の理論をもう少し付け加えていきたい。プリントの中に教科書のページ等を付け加えていく。
2. 卒研の時間だけでなく普段も研究室を訪問する習慣を付けさせたい。頻繁に来なければならぬ動物の飼育等を試みたい。
3. 来年度は年3回ほどの清掃活動を計画したい。

平成28年度 「武藤 玲路」年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ **教職員個人** ・ その他（ ）

部署名：ビジネス・医療秘書コース

職名：准教授

PLAN (計画)： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 【学習支援】
すべての授業において授業評価アンケートの到達度と満足度を5段階評価の4以上にする。
2. 【ゼミ活動】
ゼミで卒業生インタビューとリーフレット作成を行い、社会人との会話力と文章表現力を身につける。
3. 【研究活動】
職業・キャリア教育や教育の質保証に関するテーマで、紀要等に論文や報告書を2本以上投稿する。

DO (実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 武藤ゼミで
心理学の講義科目で毎回学生への問いかけの場を多く設け、学生の主体的な発言や学習意欲を促進した。
また、パソコンのエクセルの演習科目で応用問題の時間を多く設定して、問題解決能力の育成に努めた。
2. ゼミナールの4名の学生に卒業生6名とのインタビューの場を設け、社会人に対する礼儀・マナーや会話のテクニック、およびリーフレット作成について体験させた。
3. キャリア教育における「教育の質保証」に関する研究と「学修成果の可視化」に関する研究に取り組んだ。

CHECK (検証)： 成果を測定(量的・質的データ)し、測定結果を分析して課題を発見する。

※評価のアルファベットに□(囲み線)を付ける。

1. 自己評価「S・A・**□B**・C・D」
前期の授業評価アンケートの結果、「教員の教え方」と「全体的な満足度」は全ての授業が5段階評価の4以上であった。しかし、定期試験の結果では応用力が十分身についたとは言えない。
2. 自己評価「S・**□A**・B・C・D」
ゼミの最終日のアンケートで、学生は卒業生インタビューとリーフレット作成を大変有意義に感じていた。
3. 自己評価「S・**□A**・B・C・D」
本学の紀要に「学生調査」と「適性検査」に関する研究報告を投稿し、短大コンソーシアム九州の事業報告書に「学修成果の可視化と活用事例」に関する研究報告を投稿した。しかし、研究論文ではなく研究ノートのレベルに留まった。

ACT (改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 次年度の心理学では、毎回の授業で小テストを実施し、心理学の知識の活用と問題解決能力を育成したい。
エクセルの演習でも、応用問題をチームで解決し、コミュニケーション能力と問題解決能力を育成したい。
2. ゼミナールでは、卒業生インタビューと企業インタビューを継続して実施し、学生の社会性を育成したい。
3. 次年度は、統計的手法を駆使して、学習成果の可視化と学修評価システムの構築に取り組みたい。

平成28年度 「島田 幸一郎」年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ **教職員個人** ・ その他（ ）

部署名： 幼児教育学科

職名： 准教授

PLAN (計画)： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 児童福祉に関する時事問題を積極的に提供することでアクティブ・ラーニングの要素を取り入れ、授業の充実と保育者としての資質向上に努める。
2. 試験的に実施した1年次実施の保育実習Ⅲを検証し、その結果を踏まえ実習指導の改善と充実に努める。
3. 統合保育の現況を研究し、「合理的配慮」を主眼にしたインクルーシブ保育の道筋を探る。

DO (実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 新聞記事やテレビ放映の内容を授業の中で積極的に紹介する。その内容に関する個々の意見や感想をグループ学習の中で発表させ、最終的なまとめをプリントに記入させ授業後に提出させる。
2. 昨年実習した15Yの学生10名について、実習報告等を通して実習時期や実習内容等を検証する。併せて、キャリア支援担当と連携して進路動向を確認する。更に、16Yの7月の実習前アンケートと比較し、今後の方向性を総合的に判断する。
3. 保育所に通っている障害児の通所状況や障害種別また特別な配慮の有無とその具体的内容について、過去2年間の実習後の学生アンケートをもとにして分析する。

CHECK (検証)： 成果を測定(量的・質的データ)し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに口(囲み線)を付ける。

1. 自己評価「S・**A**・B・C・D」
時事問題の提供とまとめのプリント提出は、ほとんどの授業で取り組むことができ達成率は90%以上であった。グループ学習については、1科目で十分に実施できなかった。
2. 自己評価「S・A・**B**・C・D」
学生にとっては、障害児・者施設と児童養護施設の両方を実習でき、また2年次の負担軽減にも繋がり満足度はあった。しかし、実習生の内障害児施設に就職したのは1名で、現1年生も保育Ⅲ実習希望者は1名に止まった。このことから、進路選択が不安定である1年次に保育実習Ⅲを実施することは再考する必要がある。
3. 自己評価「S・**A**・B・C・D」
保育所について、障害のある子どもの通所状況や「合理的配慮」に繋がる特別な配慮の有無や配慮内容について研究を進め紀要に掲載することができた。インクルーシブ保育の推進は喫緊の課題であり、今後は幼稚園を含め一層研究を進めていくことが重要である。

ACT (改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 時事問題の積極的活用を今以上に工夫し、アクティブ・ラーニングを推進する。
2. 17年度入学生以降は保育実習Ⅲを9月中旬に実施し、希望する学生の負担軽減に努める。
3. 今回は保育所を対象にしたが、幼稚園についても同様な研究を進める。

平成28年度 「濱口 なぎさ」年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）

部署名： ビジネス・医療秘書コース

職名： 准教授

PLAN (計画)： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 学生の学びを実践力する場を提供する
2. 日商PC検定試験の合格指導を強化する
3. 本コースでの学びに対する満足度を上げるため、学生とのコミュニケーション強化に努める

DO (実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. ゼミナールでの実践
 今年度のゼミナールでは、長崎伝習所の「長崎の町ねこ調査隊塾」の塾長との交流が実現でき、学外の方々とのコミュニケーションの取り方、スキーム図の作成などで学びの実践ができた。また、ゼミ学生が公開講座のスタッフとして活躍し、Wordの技能面で実践力が向上した。
2. 日商PC検定
 今年度は随時試験を5回実施し、1・2年生合わせて14名が受験し全員合格した。各試験の1週間前に対策講座を開いた。
3. 学生とのコミュニケーション強化
 チューター生だけでなく、学生全体への声掛けを積極的に行った。特に2年生については就職活動状況について折々に声掛けを行い、ハローワークの求人情報の紹介などに努めた。

CHECK (検証)： 成果を測定(量的・質的データ)し、測定結果を分析して課題を発見する。

※評価のアルファベットに□(囲み線)を付ける。

1. 自己評価「S・A・B・C・D」
 ゼミ終了時の総括において、コミュニケーション力やWordの技能向上を挙げた学生が多かった。また、「長崎の町ねこ調査隊塾」の塾長様からも、報告書のまとめ方等、学生の実践力を高く評価していただいた。
2. 自己評価「S・A・B・C・D」
 今年度の受験生は全員が1度で合格を果たした。昨年度までの反省を生かして、学生への指導要領を見直したことや対策講座の自作教材が効果的であった。また、3年連続で希望者は卒業までに全員が3級に合格できている。
3. 自己評価「S・A・B・C・D」
 卒業時アンケートにおいて、教員との信頼関係の評価が高かったことは、コース全体の成果ではあるが意識的に取り組んだ結果が評価につながっていると感じている。問題を抱えた複数の学生とのコミュニケーションの取り方に課題を残した。

ACT (改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 地域と交流できる場を設け、学生の実践力強化につなげる
2. 日商PC検定試験の3級全員合格を目指すと共に、2級の合格者を出す
3. 学生とのコミュニケーション強化に努める

平成28年度 年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名：介護福祉士コース	職名：講師 植木 明子
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
<p>1. 各教科、サブノートを作って授業の復習・予習がきちんと記録に残り、学生が意欲的に取り組める工夫をする。各単元の終わりには必ず、国家試験対策の問題を解かせ、全員の理解をはかる。</p> <p>2. 学生を主体的な授業への取り組みを促すために、<i>アクティブラーニング</i>についての研究授業を行う。</p> <p>3. 気になる学生においては各教員の指導内容を把握し、支援できる体制をつくる。</p>	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
<p>1. 配布プリントを毎回作成し、ファイルしやすい工夫をする。 プリント類がバラバラにならないよう、科目名と日付を入れるようにした。1年生は前期ノートチェックをおこなった。1年生・2年生ともに国家試験や共通時試験を毎回の授業の最後に行った。</p> <p>2. <i>アクティブラーニング</i>を実施し、授業参観にて、教員に意見をもらう。 1・2年生ともに積極的に問題を解いてもらうために問題の解説は学生にしてもらった。2年生は特に医療的ケアの演習は日程を3回に分けて、少人数での試験実施をおこなった。医療的ケアの授業では自己決定についてのディスカッションを実施した。</p> <p>3 教員間での情報を交換をし、指導内容を共有する。 課題のある学生に対しては、学生ファイルに記録を密に残した。学生によっては教員との関係性が取れない事態になった時には、コース長や他の教員に相談するようにした。</p>	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
<p>1. 自己評価「S・A・B・C・D」 2年生の卒業時共通試験結果に関しては、こころとからだのしくみ関連は平均点以上であった。しかしながら、70パーセント取れていない学生の多くはこころとからだの仕組み分野の点数が極端に低い科目（特に「障害の理解」があり、底上げするにはこころとからだのしくみ分野の点数アップが、平均点向上につながる。特に「障害の理解」の問題の回答率は他に比べて低い（58%）</p> <p>2. 自己評価「S・A・B・C・D」 2年生の医療的ケアの感想カードにおいては、実技試験を少人数にして実施したことによって、効率よく時間内に集中して実施することができたといった意見があった。、時間内に全員合格点を取れ、余裕を持って実技の確認ができた。卒業時試験も難易度問題は少なく、記憶も新しいためか得点も高かった。（80%）また、医療的ケアにおける実習と関連させ、事前に見学させていることが学ぶ動機づけにもなった。さらに、今年度人工呼吸器を装着した方のお話を聞く機会があり、より学びの動機づけになったので、継続してお話を聞く機会を持ちたい。</p> <p>1年生の問題においては、こころとからだのしくみIIでは再試験者もいて、引き続き基本的問題の理解を図る必要があると感じる。</p> <p>3. 自己評価「S・A・B・C・D」 学生の個別の支援に努めたつもりであっても、チューターとして十分寄り添っていない部分があり、卒業時アンケートでは学生の満足を得られない部分があった。傾聴の機会を設ける必要があった。学生の就職においてもそのかわりにおいて、関係性においても問題が生じ、結果的に3月一杯までには就職させることができなかった。</p>	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
<p>1. こころとからだのしくみ関連の科目の基本事項の理解が全員できる。</p> <p>2. 授業の中に学生の積極的取り組みをはかる。（2年生は事例研究、1年生はからだのしくみに興味を持つこと）</p> <p>3. 課題を抱えた学生へ、傾聴の姿勢でかわる。</p>	

平成28年度 「山口 ゆかり」 年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ **教職員個人** ・ その他（ ）

部署名： 栄養士コース

職名： 講師

PLAN (計画)： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 栄養士実力認定試験において、担当科目（給食管理論）の正解率が短大平均を上回るよう支援する。
2. 研究活動に取り組む時間を確保し、その成果を紀要に投稿（1編）する。

DO (実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 前期授業（給食経営管理論実習Ⅱ、学外実習総合演習）の中で、出題率の高い分野の練習問題を解かせ、意識づけを行った。
2. 冬季休暇中に、クジラの赤身肉を原料としたソーセージを製造し、結着力の強化について考察した。
(橋口教授との共同研究)

CHECK (検証)： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。

※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「S・**A**・B・C・D」

表1と2には、栄養士実力認定試験における「給食管理論」の得点分布、平均点および正解率を示した。今年度は半数以上（52.5%）が5点以上の成績を収め、学内平均が短大平均と全国平均を上回っていた。これには推奨科目（給食経営管理論実習Ⅱ）の受講率（平成27年度47.7%→平成28年度80.0%）が関係しており、資格取得に向けた意識の高さが、学びの質の向上につながったと考える。また、この分野では毎年満点を取る学生が数名おり、授業レベルを含む講義内容は特に問題ないと思われた。しかし一方で、正解率が3割に達していない学生（2点以下）が毎年数名存在していることから、理解力の劣る学生や意欲の低い学生へのフォローを強化する必要があると感じた。

表1 本学学生の「給食管理論」における得点分布

		7点	6点	5点	4点	3点	2点	1点	0点
平成28年度 本学受験者数：40名	人数(名)	3	6	12	13	4	2	0	0
	割合(%)	7.5	15.0	30.0	32.5	10.0	5.0	0	0
平成27年度 本学受験者数：42名	人数(名)	2	7	9	11	9	4	0	0
	割合(%)	4.8	16.7	21.4	26.2	21.4	9.5	0	0

表2 「給食管理論」の平均点および正解率

	本学		短期大学		全国	
	平均	正解率(%)	平均	正解率(%)	平均	正解率(%)
平成28年度	4.6	66.1	4.1	58.6	4.4	62.6
平成27年度	4.3	61.2	4.6	65.9	4.8	69.2

2. 自己評価「S・**A**・B・C・D」

冬季休暇中のみの研究活動ではあったが、紀要に1編投稿する目標は達成できた。

- ①トランスグルタミンナーゼ製剤の添加がクジラ肉のソーセージパテに及ぼす効果について（第2報）
- ②女子短大生の学生調査に関する報告

しかし、上記2編はいずれも共著での投稿であり、一部を担当したに過ぎない。研究活動を能動的に進めていくことが、今後の課題である。

ACT (改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 4月から導入予定の学務システムを用いて学生情報の収集に努め、栄養士コース内の連携を図る。
2. 授業（卒業研究含む）、公務（委員会、学生募集等）、研究活動のバランスを考えながら業務を遂行する。

平成28年度 「古賀 克彦」年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ **教職員個人** ・ その他（ ）

部署名： 栄養士コース

職名： 講師

PLAN (計画)： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 栄養士養成施設協会が実施する栄養士実力認定試験において、担当科目である臨床栄養学と栄養教育指導論の成績向上
2. 学外実習Ⅰおよび学外実習Ⅱにおいて、実習先の評価向上

DO (実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 栄養士実力認定試験において、担当科目である臨床栄養学と栄養教育指導論の成績向上
 - ・ 毎回授業前に栄養士実力認定試験問題出題し、解説を実施
 - ・ 授業において頻出分野の解説強化
 - ・ 定期試験に栄養士実力認定試験を一部採用
2. 学外実習Ⅰおよび学外実習Ⅱにおいて、実習先の評価向上
 - ・ 学外実習総合演習での指導強化
 - ・ 学外実習Ⅰおよび学外実習Ⅱの直前指導および事後指導強化
 - ・ 学外実習担当助手との連携強化

CHECK (検証)： 成果を測定(量的・質的データ)し、測定結果を分析して課題を発見する。

※評価のアルファベットに□(囲み線)を付ける。

1. 自己評価「S・A・**□B**・C・D」

平成28年度の栄養士実力認定試験において、担当科目である臨床栄養学と栄養教育指導論の成績は以下のとおりとなった。平成27年度と同様に両科目とも短大平均を上回ったが、4年制大学の学生を含む全国平均を下回る結果となった。今後、成績を向上させ、学生の質を向上させるためには、授業内容の見直しや、授業内容の取捨選択が必要だと思われる。

科目名	本学(正答率)	短大平均(正答率)	全国平均(正答率)
臨床栄養学(6点)	3.9点(65.0%)	3.7点(61.7%)	4.0点(66.7%)
栄養指導論(6点)	3.9点(65.0%)	3.8点(63.3%)	4.2点(70.0%)

2. 自己評価「S・A・**□B**・C・D」

今年度の学外実習Ⅰ及び学外実習Ⅱの評価は以下のとおりとなった。学外実習Ⅰでは実習先からの評価はA評価が多かったが、学外実習ⅡではA評価は減少しB評価、C評価が増加した。学外実習ⅡでB評価とC評価が増加した理由として、教員の指導力不足、学生が2回目の実習で気が緩んだこと、実習先に評価の厳しい病院が増えたことなどが考えられる。

科目名	A評価	B評価	C評価
学外実習Ⅰ	35名(79.5%)	9名(20.5%)	0名(0.0%)
学外実習Ⅱ	26名(59.1%)	16名(36.4%)	2名(4.5%)

ACT (改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 平成29年度は担当科目の得点を可能な限り全国平均に近づけるため、授業内容の見直しを行うと同時に、教えている内容の取捨選択を行い、重要な部分は確実に正徳させていきたい。
2. 平成29年度の学外実習Ⅰ及び学外実習ⅡではC評価を減らしA評価を増やすため、学生にはなぜ学外実習を行うのか理由や目的納得するまで説明していきたい。また、学外実習直前指導を密に行えるように各教員を支援していきたい。

平成28年度 「中村 浩美」年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ **教職員個人** ・ その他（ ）

部署名： 幼児教育学科

職名： 講師

PLAN (計画)： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 初心者へのピアノレッスンの指導法。弾き歌い奏法も含めて。
2. 声や歌唱にコンプレックスを持っている学生、また、声の出し方に疑問を持ち自信がない学生への指導。
3. 保育者として「先生」と呼ばれることを自覚し、その意識を高めて積極的に授業を受講するための取り組みを行う。

DO (実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 年々ピアノ経験がない初心者が増加し、基本的な音楽理論から手や指の形、筋肉の動かし方や力の抜き方も丁寧に何度も何度も繰り返しながら指導した。この指導においては、初心者だけではなく経験者にもとても必要なことであった。練習の仕方に問題がかなりあり、まずはその点からの注意を持たせた。練習を再三怠る学生や、進度が遅い学生には、授業以外でスケジュールを合わせてレッスンした。また、全員そろって発表会をし、それぞれの良い点課題点を述べながら達成感を感じて次のステップに繋げていった。
2. まずは、自分の声は世界にたった一つの素晴らしい楽器であること、個性があつて当たり前であることに気付いてもらうため、何気ない話からメンタル面の問題なども含めて、信頼関係を築いてレッスンした。声を出すことはメンタル面がとてもしんどいデリケートであることが理由である。口の開け方、表情筋アップ、腹筋、背筋、腰筋の使い方、胸骨やあごの力を抜くことなど、その学生に見合った方法を工夫しながら一音一音の声に、自信のない学生がこんな声は始めて出す！私の声はこんな声も出るんだ！と言う今までコンプレックスや自信のなさで歌が好きなのに拒否していたことを楽しむ方向に導いていった。
3. 「先生」とはある意味「女優」であること。人前に出ると言うことに対して何を意識してどう振舞うかを考えさせそれぞれに実践させた。保育者、あるいは歌のお姉さんになりきれよう、授業を受講する学生に「成りきる」ことを課題に出し、その発表で学生どうしが感想を述べながら、笑顔を含む表情、恥ずかしがらないこと、元気に話せること、姿勢を含めた立ち姿、などに気をつけることの大切さを、自ら確認できる指導をした。

CHECK (検証)： 成果を測定(量的・質的データ)し、測定結果を分析して課題を発見する。

※評価のアルファベットに□(囲み線)を付ける。

1. 自己評価「S・**□A**・B・C・D」
初心者やピアノが苦手、練習を怠る学生達にあきらめたり、手を緩めたりすることなく、時に厳しく、頑張つて練習してきた時、曲が仕上がって達成感を味わった時には上達したこと、一生懸命に努力をしたことを必ず手を握り合い褒めて共に喜ぶことをした。
2. 自己評価「S・**□A**・B・C・D」
楽器も当たり前だが、歌を上達させるためには、コンスタントなレッスンとかなりの時間を要すること、また、個人での練習ではどのような声を出しているかその発声法が正しいかを見極めることが難しいのだが、一人ひとりがコンプレックスを打破しようと努力し、その結果が少しずつ表れてきた。
3. 自己評価「S・A・**□B**・C・D」
人の前に出て話す機会がない学生に、「先生」や歌のお年さんに成りきる授業に取り組んだことで、学生達も何が必要なのかを次第に感じるようになり、「先生」と言う「女優」に積極的に取り組めるようになってきた。しかし、消極的な学生においては、いつも気にかけて声をかけているのだが、なかなか自分の殻から抜け出せずどうしても消極的な授業への取り組みとなってしまう。

ACT (改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 研究室でのレッスンはマンツーマンで行うため、緊張している学生が殆どなので、緊張感を緩和させながらこれからも一層の丁寧なレッスン指導をし、学生と共に達成感や成長を喜んでいきたい。
2. 学生が自分の声に未知の発見や成長が少しずつでもあること、コンプレックスを解消できて楽しむ歌になる学生増えるよう、今までの指導の在り方を生かしつつ学生よっての工夫を強化したい。
3. 保育者になるための意識改革や実践に力をいれてきたが、授業内容や人の前にでることには何が大切かを理解しても、消極的で実践できなかった学生への配慮や積極的な受講と成長に達せられるようにしたい。

平成28年度 「田川 千秋」 年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ **教職員個人** ・ その他（ ）

部署名：介護福祉士コース

職名：講師

PLAN (計画)： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 「生活支援技術」は基本的技術の習得が必須でそのためには根拠を理解することを求められる。「介護過程」は専門科目の知識全般を必要とする。そのため授業のまとめ、配布資料などを含めノートの整理することで、学生が苦手を理解し克服できるように定期的にチェックし、理解力の乏しい学生へ早期に対応し、学生自身が復習しやすい環境を提供する。

DO (実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 授業の中で、必要に応じて質問し、一人ひとりに回答を求め、グループワーク等で知識の共有を図りながら解説を行う
2. 教科書を読ませ、ルビを打たせる、絶対覚えてもらいたい箇所にマーカーを入れる。
3. 後日、再度質問する。再度解説を行う。
ミニテストで理解度をチェック、配布資料の確認を行う。

CHECK (検証)： 成果を測定(量的・質的データ)し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに口(囲み線)を付ける。

1. 自己評価「S・A・**B**・C・D」

回答する学生が決まってくる。グループワークの回答のみ記入する、答える学生に対しては、特に前期は見守ることが多かった。後期はゆっくりと授業を進行させる時間帯を設けノートの記入を促した。しかし時間内にできる学生、数文字しか書けない学生を能力の差がはっきりとした。能力の低い学生に対し、グループワーク中に助言する等した。

2. 自己評価「S・A・**B**・C・D」

学生同士で確認しあいながら教科書をチェックしている内容の不足について最度解説を行った

3. 自己評価「S・A・**B**・C・D」

再度の質問とミニテストで理解度と記憶力の確認を行う。配布資料を授業に持参しているかチェックし、不足分についてはお互い協力し合ってコピーをとるようにさせた。

ACT (改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 学生の得意、不得意を見極め、得意分野から理解度を高め、学ぶ姿勢が身につくことにより、不得意を軽減させる

平成28年度 「本村 弥寿子」年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ **教職員個人** ・ その他（ ）

部署名： 幼児教育学科

職名： 講師

PLAN (計画)： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 保育現場ですぐに活用できる遊びの体験を取り入れたり、VTR等を活用して保育の解説を行ったりし、子どもにとっての遊びの意味や保育者の援助について学生が自ら考え理解できるようにする。
2. レポートや指導案などの提出物へのコメントを、学生の意欲を高めるものに配慮する。

DO (実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 保育内容総論では、3回目の授業で“しっぽ取り”に取り組み、遊びの中で子どもが経験することを洗い出し、保育内容とは何かを考える機会を作った。また、保育内容「表現」では、14回目の授業で“小麦粉粘土遊び”を行い、学生が感じたことを振り返ったり、授業での学びを生かして保育者の目線で活動を見つめたりする機会を作った。さらに保育内容総論では、一人の子どもの3年間の成長記録をDVDで視聴し、子どもの発達の理解や保育の方法、保育者の援助等について考える機会も作った。
2. 1年次は保育に関する学びの初期段階ということを踏まえ、学生の小さな気付きにも好意的に受け止めるコメントを書くよう配慮していった。指導案作成においても、何に配慮すべきか学生が自分で気付くようなコメントを記入することを心掛け、“指導案作成は難しい”という思いが軽減するよう配慮した。

CHECK (検証)： 成果を測定(量的・質的データ)し、測定結果を分析して課題を発見する。

※評価のアルファベットに□(囲み線)を付ける。

1. 自己評価「S・**□A**・B・C・D」

平成24～27年度までの4年間、保育内容総論、保育内容「表現」、カリキュラム論は、C評価が5割ほどであった。しかし今年度は3割前後に減少し、その分AやB評価が増えた。遊びの体験やVTRの視聴が、保育内容等の理解に大いに効を奏したと考えられる。今後も遊びの実践やVTRを活用し、事後の振り返りに時間を取って学生同士意見を伝え合うなどして授業内容理解を一層深めたい。

2. 自己評価「S・**□A**・B・C・D」

保育内容総論、保育内容「表現」と同じくカリキュラム論においても、昨年度までの4年間、評価Cが6割だったものが4割に減った。実際に作成したものは丁寧に書かれているものが多く、意欲的に作成に取り組んでいる学生が多いことが分かった。しかし、書き込みの量は多くても内容が適切でなかったり、その逆もあったりしたので、学生一人一人の学びに合った助言やコメントが必要であると思われる。

ACT (改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 学生が遊びやDVDを体験・視聴し、何をどう感じたのか、どのようなことを考え理解したのか等の把握をより丁寧に行いたい。事後のレポートを利用し、一人一人がどの程度授業内容を理解しているか、いまの子ども観や保育観はどのようなものかを捉えることで、先の声かけやレポートのコメントに一貫性が出て、学生の考えもまとまりやすくなるのではないかと考える。そのために、レポートや課題の内容を明確にし、学生の今の学びが捉えやすいものとして行きたい。
2. 1に挙げたように、レポートやその他の課題の内容を明確にすることで、今の学生の学びが把握しやすくなり、一人ひとりへの助言が行いやすくなるのではないかとと思われる。

平成28年度 「福井 謙一郎」 年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名： 幼児教育学科	職名： 講師
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 配布資料を改善し、授業力を向上する。 2. 学生への精神的支援を強化する。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 学生は投影されるスライドと配布資料というインターフェースに相違があると戸惑いがあるようなので、可能な限り相違がない資料を作成した。 2. 学生の家庭的・金銭的事情を加味しながら、教員として学生の学力向上のための支援を行った。（主に言語的支援）	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 学生の授業理解は概ね良好で、特に大きな不満点もなかった。	
2. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 学生自身の身上や家庭的背景を丁寧に聴き取り、それを踏まえた上で、現時点でどのような改善が必要なのか指導した。基本的には学生主体の指導が多く、教員が決定を下さ無いよう心がけた。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 現時点から更なる授業改善を行う。 2. 学生支援・教育を強化する。	

平成28年度 「光武 きよみ」年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ **教職員個人** ・ その他（ ）

部署名： 幼児教育学科

職名： 講師

PLAN (計画)： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 保育者に必要な知識や技術について、興味や意欲を持ち、学べるような授業を展開する。
2. 学生自らが考え、発言できるような授業の工夫を行う。
3. 学生支援では、良好な人間関係の構築に努め、学生が相談しやすい環境を作る。

DO (実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. パワーポイントやDVDなどの視聴覚教材に加え、赤ちゃん用品に触れさせてからの演習を試みた。またイメージを持ちにくい発達障害などは、当事者が書かれた本やDVDを紹介しながら、障がいの方の気持ちを理解できるよう努めた。
2. 座学では、グループワークを通して他者との意見交換を促し、前に出て発表を行うなどの工夫をした。また演習では、人形1体に対して学生2名の割り振りをを行い、共に評価・協力しながら演習を進めていけるように配慮した。
3. 授業終了時には質問タイムを設けた。理解が不十分な学生には、授業外で質問や演習指導を行う事を伝え、相談しやすい環境を作ってきた。

CHECK (検証)： 成果を測定(量的・質的データ)し、測定結果を分析して課題を発見する。

※評価のアルファベットに□(囲み線)を付ける。

1. 自己評価「S・**□A**・B・C・D」

パワーポイント資料は、重要な部分は()書きとし、視聴覚教材を使用したことで、理解はしやすかったと考える。プリント以外の必要事項は追記してもらっていたが、それができない学生も少数いた。演習については、乳児関連商品に触れ、デモンストレーションを実施したあと演習に入っていたため、学生の興味や関心は大きかったと考える。障がいの部分は、他教科でも学ぶため、今後も大まかな特徴やかかわり方を視聴覚教材、書物の内容紹介などを通して行う必要がある。

2. 自己評価「S・**□A**・B・C・D」

グループワーク、実技演習を通して、各自またはグループで学ぶ機会を設けたことは、意見交換、その後のグループ発表に繋がっていったものと思われる。発表は当初はグループワーク場所で行っていたが、後半は前に(教壇)出てからの発表に切り替えた。人前で意見を述べることや表現する場を設定したことで、少しではあるが保育実習の不安の軽減につながったものと考えている。

3. 自己評価「S・**□A**・B・C・D」

授業終了時の質問タイムや時間外の個別対応は、わからないことをうやむやにしないという事も含めて、人間関係の構築にも良い影響が出ている。また、演習ではベッド毎に巡回指導を行い、質問しやすい環境を作っていたのではないかと考える。

ACT (改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 学生それぞれの能力も関わってくるが、資料にはない重要部分の書き取りができるよう、言葉かけを行う必要がある。
2. 自ら考え、たくさんの人の前で自然に発言できる機会をもっと増やすことが大切である。
3. 今後も質問しやすい環境づくりを行う必要がある。

平成28年度 「江頭 万里子」年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ **教職員個人** ・ その他（ ）

部署名：ビジネス・医療秘書コース

職名：特別専任講師

PLAN (計画)： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 学習意欲を向上させる方法を検討する。
2. 学生が主体的に検定に取り組むよう、検定対策の指導法を改善する。
3. 学生支援に力を入れる。

DO (実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 2 について

クラスを6~7人のグループに分け、検定対策遂行チームとした。「秘書検定100%合格プロジェクト」と題し、「目標の提示(各チーム秘書検定2級合格率100%)→PDCAサイクルで対策遂行(C:振り返り・対策変更は2回実施)→検定受験→最終振り返り」の流れで行った。

3 について

オフィスアワー以外であっても、学生が気軽に研究室を訪問できる環境を作った。併せて、疑問等があるときはいつでも研究室を訪問するように日常的に声掛けし、訪問した学生には真摯に対応した。

CHECK (検証)： 成果を測定(量的・質的データ)し、測定結果を分析して課題を発見する。

※評価のアルファベットに□(囲み線)を付ける。

1. 自己評価「S・A・**□**B・C・D」

プロジェクトには、検定合格以外に職場での働き方の実践という学びもあることを認識させることで、学生の意欲を喚起し、主体的な学びへと繋がることを意図し実施した。学生による中間振り返り、最終振り返りによれば、メンバー間での相互連絡、授業外でのチーム活動におけるリーダーシップ、メンバーシップがやや不十分であった。しかし、多数の学生が職場における業務遂行を疑似体験でき、チームで働く上でのリーダーシップ、メンバーシップの大切さが理解できたと答えており、教育効果があったと考えられる。併せて今後の一層の積極的取り組みに言及した学生も多く、一層の学習意欲の向上が期待できる結果となった。

2. 自己評価「S・A・B・**□**C・D」

目標である秘書検定合格実現のために、チーム内でリーダーを中心に自分たちで作成した計画に沿って切磋琢磨することで、モチベーション向上と自主的活動へ繋がるのではないかとこの思いでプロジェクトを実施した。しかし、学生の最終振り返りによれば、複数回の途中振り返り実施にもかかわらず、ねらい通りの主体的な取り組みには至らなかった。理由として、入学直後の2か月間という開講期間及び学生間の空き時間のずれによる共同活動時間確保の困難さが考えられる。

3. 自己評価「**□**S・A・B・C・D」

学習意欲及び自己肯定感共に低い学生が、研究室を複数回訪問し個別指導を受け、3級ではあるが秘書検定に合格することができ、自己肯定の様子に変化が見られた。秘書検定の勉強のために自主的に研究室を訪問する学生が複数いたことから、質問しやすい環境を作ることができ、学生支援に繋がったのではないかと考える。

ACT (改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 授業改善：動機づけを工夫し、学習意欲の向上を図る。
2. 学生支援：自主的な学習活動の支援のため、引き続き、研究室を訪問しやすい環境作りに努める。

平成28年度 「樋口 誠」年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ **教職員個人** ・ その他（ ）

部署名： 幼児教育学科

職名： 特別専任講師

PLAN (計画)： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 学生一人ひとりの運動能力に応じた個人指導まではいかなかったので、授業時間内での配分を考慮して技術指導もやっていくように心掛ける。
2. 学外での研究発表会をもっと多く取り入れて、研究テーマ「実践腹話術」についての取り組みを充実させ、研究成果を論文発表出来るよう努力する。
3. 部活動（バレーボール部）については、部の活動に必要な新入生の入部を確保する。（6名）

DO (実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 体育実技では、運動の実践を等して体育実技の指導法を学ばせることが出来た。
体育種目の特殊性・ルール・運営の理解を促すよう心掛けた。
2. 卒業研究はパペット人形作成に時間がかかり、授業進行が遅れたため技術指導に大変苦勞した。
なんとか無事に卒業研究発表まで修了したが、来年度は最も充実した内容のある卒業研究に取り組みたい。
3. 学生同士のコミュニケーションを大切に活動した。九州インカレについては満足のいく結果ではなかったがレベルの高い試合内容だったように思える。1年生中心のチームだったので課題も多くあり来年度に期待したい。

CHECK (検証)： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。

※評価のアルファベットに**□**（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「 S・A・**□B**・C・D 」
学生すべてが同じ運動能力かというところかなり能力は違う。最終目標は同じだが最後までついてゆけるか心配の学生もいる。
2. 自己評価「 S・A・**□B**・C・D 」
パペット人形の作成に多くの時間がかかり、実践腹話術の技術指導の日程調整が大変だった。
今年度は学外発表を4回行いましたが、個々に応じた授業内容・技術指導を行う。限られた時間を有効にし、研究実践できるように再確認する。
3. 自己評価「 S・A・**□B**・C・D 」
練習時間の確保と、技術力のアップを行い目標達成に努力する。

ACT (改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 体育実技 学生一人ひとりの運動能力に応じた個人指導を行いながら、授業時間内での配分を考慮して授業内容の充実をはかり技術指導もやっていくように心掛ける。
2. 体育講義 学生一人ひとりの理解度をもっと把握し、講義内容を再度見直し実践に活かしてもらえるような内容に検討する。また、講義資料についても検討しなければいけない。
3. 卒業研究（腹話術） 学外での発表会をもっと多く取り入れて、実践腹話術についての取り組みを充実させ、研究成果を論文発表出来るよう努力する。
4. 部活動（バレーボール部） 新戦力になる新入生の入部を確保する。（6名）

平成28年度 「山本 尚史」年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ **教職員個人** ・ その他（ ）

部署名： 幼児教育学科

職名： 助教

PLAN (計画)： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. アクティブラーニングの視点から、学生の学びを可視化することに努める。
2. 現代の保育改革を踏まえた教材研究・講義を行う。
3. 保育の国際化、食育に関する研究を行う。

DO (実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 保育者論、保育内容「ことば」の講義を通じて、1・2年合同フィールドワークによる聞き取りの実施とそのレポート課題の全員での共有と意見交換を行った。
2. 新制度下の制度改革を踏まえた教材研究を積極的に推進し、講義において現代の保育者が置かれた環境を重点的に講義した。
3. 日本保育学会での発表と学内外の紀要において保育関連の研究発表を行った。

CHECK (検証)： 成果を測定(量的・質的データ)し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□(囲み線)を付ける。

1. 自己評価「S・**A**・B・C・D」

1・2年合同のフィールドワークは2年目であるが、学生たちは自ら課題を見つけ、その克服に向けて行動をしていた。その成果はレポート課題として提出させたが、多くの学生は保育者としての自分の在り方、将来の展望について向き合っていたプロセスが読み取れるものであった。

2. 自己評価「S・**A**・B・C・D」

新制度下における保育者の置かれた環境、保育職の意義、今後の教育保育行政についての情報収集に努め、最新の情報を学生に提供し、講義において授業者と受講者が共に考えることを行った。ディスカッションでは遠慮しながらも、学生は積極的に意見を述べる様子も見られた。これらのことから

3. 自己評価「S・A・**B**・C・D」

明治時代から長崎では多国籍の子どもの対象に保育を実施していたことを確認した。食育については今年度は卒業研究において学生と議論をし、考察を深めることができた。

ACT (改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 1・2年合同のフィールドワークについて次年度以降、映像・音声による録画・録音した資料を活用し、学生とともに学びを深められるよう努力したい。また、学生の学びの経過を経年的に把握できるよう研究を行っていく。
2. これまでは行政の資料や各機関への聞き取りを主な資料として教材開発を行ってきたが、次年度はより保育の現場に密着した教材研究を行っていきたい。そのため保育現場への聞き取り等を実施する。
3. 明治期の長崎の保育に関する研究を行うとともに、食育に関する歴史的史料の発掘に努めたい。

平成28年度 「蛸原 正貴」年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ **教職員個人** ・ その他（ ）

部署名： 幼児教育学科

職名： 助教

PLAN (計画)： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 運動の特性に触れながら、運動が及ぼす心身の発達への影響を理解するため、運動、発育、発達に関する語句について、穴埋め形式の問題を用いながら理解を深める。
2. 幼児の運動遊びに関する教材、教具、取り扱い、援助の方法について理解を深めながら、運動の基礎的技能を身につける。
3. 生涯にわたる健康の基礎となる乳幼児の心身の発育・発達について、穴埋め形式の問題を用いながら理解を深める。

DO (実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 「体育講義」の授業において、運動が及ぼす心身の発達への影響を理解するため、穴埋め形式の小テストを毎回実施した。前回の授業内容を復習してから当日の授業に臨ませることで、前回からの学習の流れが把握しやすい状況を作り出すことができた。
2. 「幼児体育」の授業において、器械運動、素材遊び、遊具を使った運動遊び等の基礎的技能を高めるため、定期的に技能テストを行った。また、技能が修得できていない学生については、授業以外でも取り組む機会を設けた。
3. 『保育内容「健康」』の授業において、乳幼児の心身の発育・発達について、穴埋め形式のワークシートを作成し、パワーポイントを用いながらワークシートに沿って授業を進めた。

CHECK (検証)： 成果を測定(量的・質的データ)し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□(囲み線)を付ける。

1. 自己評価「S・**□A**・B・C・D」
毎回の小テストの結果から、全体の74.9%の学生が平均80点以上の結果を残していた。前回の復習であるため問題の難易度は高くないが、8.4%の学生が平均60点台という結果であったため、復習方法についての指導、または授業内容について見直す必要がある。
2. 自己評価「S・A・**□B**・C・D」
技能テストの結果から、全体の68.8%の学生が課題の8割以上を達成していた。しかし、9.75%の学生は課題達成率が6割にもとどいておらず、基礎的技能が修得できているとはいえない状況であった。技能の習得には個人差があるため、引き続き授業外での練習等が必要になると考えた。
3. 自己評価「S・A・B・**□C**・D」
穴埋め式のワークシートを作成しながら授業を行い、期末試験も97%の学生が合格点にとどいていた。しかし、授業中は穴埋めさえすればよいという学生が見られ、授業への取り組みに問題が見られたため、授業形態の見直しが必要である。

ACT (改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 授業内容に関して、視聴覚教材を有効に活用し、より記憶に残る授業内容の検討が必要である。パワーポイントの内容を改善し、視覚的に訴える授業内容を検討する。
2. 課題の数を減らし、現場に出てから最低限必要な技能を集中的に高める必要がある。そのため、授業計画について見直し、技能習得の時間を確保する。
3. ワークシートを見直し、自己解決能力を高める内容に変更する必要がある。また、アクティブラーニング形式の授業形態を取り入れ、学生間での意見交換の機会をより増やしていく。

平成28年度 「原田 由貴」年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ **教職員個人** ・ その他（ ）

部署名： 栄養士コース

職名： 実習助手

PLAN (計画)： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 学生のパソコン操作基礎技術の習得

学生がパソコンを用いて作成した資料を見ると1枚で収まる内容でも枚数が多い。これは「余白を設定し、調整する」という概念がないことが原因で、パソコン初心者によく見られる。パソコンを使って資料を作成する機会は今後一層増えるため、基本操作（入力、設定、調整）を理解し、習得してもらう。

2. 美化活動の推進

自治会活動の一環である「4S活動」は、昨年発足したが活動内容や方法が定まらず運営が出来ていなかった。今年度は、担当の自治会員とともに早期に計画や方法を考え、活動を推進する。

DO (実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1.

- ・パソコン初心者は説明を聞いても、そのキーの名称や操作方法が全くわからないので、担当科目の情報処理演習（選択科目）における課題のワード文書の裏面に、予め操作手順と操作に必要なキーの名称を記載する。
- ・積極的に声かけし指導する。
- ・学生同士教え合うことで本人たちの理解も早まるので、一学生に指導し、付近の学生への説明はその学生にしよう。

2.

- ・教室の汚れ具合を学生たちに認識してもらうためのチェックを行う。
- ・各クラスの担当者がその日の授業の終わりに清掃を呼びかける。
- ・ロッカー清掃を年に2回実施する。
- ・活動後、総括用アンケートを実施する。

CHECK (検証)： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「S・**A**・B・C・D」

- ・解説資料の作成や声かけ（指導）はできた。
- ・学生によっては、方法が解れば自ら他学生に教えていた。
- ・同じ操作方法でも、課題内容が変わると前回学んだことを応用できない学生もいた。

2. 自己評価「S・A・**B**・C・D」

- ・（学生が）発表用の媒体作成後は、消しカスや紙ごみが多く出るので、各自ごみを捨てるよう声かけできた。
- ・授業の終わりにクラスの担当学生が声かけすることになっていたが、それを聞いたことがなく、自身もそれを気にかけていなかった（その活動のことを忘れていた）。
- ・授業の前後に、教室を見回してゴミを回収した。学生がいたときは一緒に行った。
- ・ロッカー清掃の様子や清掃後の状態を見ることができ、自治会役員と今後の活動に向けた反省が行えた。

ACT (改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1.

普段からパソコンの扱うようになれば基本的な操作は難しいものではない、という事を理解した学生もいた。一部の学生は、始めから苦手意識を以って臨んでいるようなので、導入時はその意識を変えさせることが重要だと感じた。

2.

自治会役員が行った活動に関するアンケートの集計結果を見ても、やはり“学生同士で声かけする”ということが難しく、原因としては、担当学生自身も活動を忘れていた、クラス全員が清潔さを保つという意識が低いことが挙げられた。この活動は“学生主導の下”行うものとして発足したが、その（声かけの）きっかけを作るためには、教職員の存在が必要である。状況を見て、こちらから積極的に担当学生に声をかけて、活動の促進につなげたい。

平成28年度 「太田 智子」年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名： 栄養士コース	職名： 実習助手
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 学内環境美化を学生に意識させ、共に考え、活動する。 2. 実習助手間における学生情報の共有強化を行なう。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 自治役役員の4S活動担当者と共に計画立て、具体的な助言を行なう。 実習室や教室の使い方について状況に応じた指導を行なう。 2. 実習助手間で共有すべき情報は速やかに口頭で伝え、必要に応じて書面に残しておく。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに口（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「 S・A・ B ・C・D 」 担当学生との連携は取れていたが、全学生に意識付けをすることは学生自身の心がけによることも大きく、呼びかけやポスターだけでは難しいと思われた。また、授業後に使用した実習室および教室の美化を呼びかけることは可能であるが、それも一部学生に対する指導に留まってしまうという課題が残った。	
2. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 特に出席関係についての報告は密に行なった。自身の担当する授業だけでなく、実験実習全体をとおしての出席状況を把握することで、早めに担当教員へ連絡することができた。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 環境美化の意識を高めることが一番の課題である。初歩的ではあるが、授業後に自分が使った場所は自分できれいにするという意識を持たせるような指導から行なう必要があると考えられる。 2. 引き続き、速やかな伝達を行なっていく。	

平成28年度 「住吉 真美」年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ **教職員個人** ・ その他（ ）

部署名： 栄養士コース

職名： 実習助手

PLAN (計画)： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 昨年度と同様、助手室内での情報共有をさらに密に行う。
2. 授業を休む、提出物を出さない学生に対してのフォローを細かく行い、そのような学生が1人でも減るように支援する。
3. 昨年度の実験科目の反省を踏まえ、スムーズに効率よく実験ができるように準備をする。

DO (実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 学生の出席の状況等その都度助手室内で共有する。助手室内に掲示板のようなものを設置し、決定事項などを書き込む。
2. 欠席が2回になった学生に対しては声かけを行う。提出物に関しては、提出しなかった場合、いつまでに提出するかを事細かに学生と1対1で約束し、提出を促す。
3. 昨年度の記録を読み返し、授業担当の先生と話し合いながら準備を進める。

CHECK (検証)： 成果を測定(量的・質的データ)し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□(囲み線)を付ける。

1. 自己評価「S・A・**□B**・C・D」

今年度は、学期途中で助手の欠員があり、2人体制になった時期があったため、情報共有を密に行いながら業務を行うことができた。しかしながら、欠員分の業務内容について把握していないことが多々あり、業務の遂行に支障が出た。

2. 自己評価「S・A・**□B**・C・D」

学生への声掛けについては頻繁に行うことができたと思う。しかし、声をかけたにも関わらず、欠席してしまう学生、提出物を出さない学生も一部見られた。

3. 自己評価「S・**□A**・B・C・D」

授業担当の先生と相談しながら準備を進めることができた。後期の担当科目はすべて非常勤の先生の科目であったため、事細かい相談はできなかったが、昨年度の記録などを参考に準備を行った。

ACT (改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 自分の業務外であっても、他の2人の助手が何をしているか大まかに知っておく必要があると思った。また、引継ぎ資料を事細かに作成し、いつ何が起きてもいいように対策をしておきたい。
2. 何度声かけしても改善されない点については、学生の自己責任の範囲ではあるが、実験実習科目では出席およびレポートの提出が成績に直結するので、引き続き声掛けを続けていくと同時に他の方法も考えなくてはならない。
3. 来年度も非常勤の先生の科目を担当することが多いので、早め早めの報告連絡相談を心がける。

平成28年度 「三藤 英文」 年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）

部署名：事務局

職名：事務局長

PLAN (計画)： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 教務システムの構築
2. 「タイプ1 教育の質的転換」の取組の推進
3. SD研修の計画的実施と個々の事務レベル向上

DO (実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. システム開発企業との連携を強化して、常に情報交換を行いながら年度末までに構築できるよう遂行する。
2. タイプ1の内定に向けた取組を遂行する。
3. 計画的に課題に向けたSD研修会を実施し情報交換を行い、個々のレベルアップに繋げていく。

CHECK (検証)： 成果を測定(量的・質的データ)し、測定結果を分析して課題を発見する。

※評価のアルファベットに (囲み線)を付ける。

1. 自己評価「S・A・B・・D」
システム開発先のノウハウが乏しく、開発が後手になり計画通りに進んでいない。今後は、学校側サイド主導で対応する必要がある。
2. 自己評価「S・A・B・・D」
昨年度に続き申請を実施する事ができたが、設問事項について未実施項目が散見されたため、評価点数が低く次年度までに改善に向けた取組が必要となった。
3. 自己評価「S・A・B・・D」
事務職体制が構築できず(事務職員の長期休職等)SD研修の計画的な実施ができることができなかった。

ACT (改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 早急なシステム構築に向けた方向性の再検討を行う。
2. 次年度の内定に向けて、未実施項目について取組を実施する。
3. 計画的なSD研修会の実施を目指す。

平成28年度 「久原 和敬」年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ **事務局等** ・ 教職員個人 ・ その他（ ）

部署名：事務局

職名：入試広報室長

PLAN (計画)： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 入試広報室としての業務を明確化するとともに、「組織」として機能する室を目指す。
2. 学長をはじめとする本学教職員及び事務局メンバーとの連携を図り、円滑な業務運営を目指す。
3. 様々な取組を通して、前年度以上の入学生確保に努める。

DO (実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. ガイダンス、学校見学会、オープンキャンパス、高校訪問、入試業務など、その都度、実施要項を作成するとともに、全教職員が参画する体制づくりを進める。
2. 運営委員会、教授会（教職員会議）、募集広報委員会等を通して、情報提供・情報共有を行い、全学体制で臨むよう計画する。
3. 入学生確保に大きなウエイトを占める、「進路ガイダンス」、「オープンキャンパス」、「高校訪問」に力を入れ、志願者数確保に努める。

CHECK (検証)： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。

※評価のアルファベットに口（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「S・**A**・B・C・D」

ほぼすべての取組において、実施要項を作成して取り組むことができた。特に「オープンキャンパス」、「入試業務」については、全教職員で対応することができた。

(1)オープンキャンパス：高校生249名、保護者81名参加。（高校生の延べ参加者数は前年比－8名、実参加者数－10名）、推薦入試にはOC参加の高校3年生の69%が出願した。

(2)進路ガイダンス：会場型に20会場、校内型に51校参加、延べ面談者数は652名（2月末現在）

※県外の進路ガイダンスには、天草会場（熊本県）に参加

(3)高校訪問：延べ約250校を訪問

2. 自己評価「S・**A**・B・C・D」

ほぼ毎週開催された運営委員会では、情報提供と協議を通じて、考え方の統一を図ることができた。また、月1回開催される教授会でも、資料をもとに説明し、意識の上でも全学体制を築くことができた。

3. 自己評価「S・**A**・B・C・D」

11月の推薦入試において、174名（前年比－2名）を確保し、その後一般前期入試と自己推薦2期入試の手続き者を合計すると、最終的な入学予定者数は187名+αとなる見込みであり、前年度をわずかに上回る見込みである。

ACT (改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 高校訪問計画、募集要項作成（入試日程、封筒等）、オープンキャンパスの取組など、次年度はさらに手直しする必要がある。また、進路ガイダンスでは、県外・離島地区なども積極的に参加したい。
2. 運営委員会では28年度以上に積極的に提案して、学生募集の改善策・活性化につながる取組を模索したい。
3. HPを含めた広報について、更なる改善を図り、190名程度の入学者数確保に努める。

平成28年度 「原田 実輝」年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 事務局等 <input type="checkbox"/> ・ 教職員個人 ・ その他 ()	
部署名：キャリア支援センター	職名：キャリア支援センター長
PLAN (計画)： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 学生の満足度を高める就職支援を行う。 2. 関係部署との連携を深め、業務の効率化を図る。	
DO (実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 受験先の手続き時、受験後の報告書の提出の際や、可否の結果報告の際には極力一人ひとりの学生とコミュニケーションを取るように心がけ、その学生に必要なタイミングで支援、アドバイスを適宜行った。 2. 幼児教育学科には昨年度から活動状況一覧作成を復活してもらい、繁忙期はほぼ毎日報告し合う体制を整えることができた。	
CHECK (検証)： 成果を測定 (量的・質的データ) し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに <input checked="" type="checkbox"/> (囲み線) を付ける。	
1. 自己評価「 S・ <input checked="" type="checkbox"/> A・B・C・D 」 学生が必要とするタイミングで適切な支援ができるよう、学生とのコミュニケーションを増やし、学生の状況をよく観察するよう努めた。 3月28日現在の就職率は96.3%で、昨年並みの就職率を維持することができた。また、未活動者は2名と、例年に比べ減少した。 就職支援体制に対する全体的な学生の満足度の平均は昨年度同様、4.4であった。 今年も学生にとっては売り手市場で、ほとんどの学生が1社めの受験で内定し就職活動で苦勞をすることが少ない為、学生にとっては特別に支援を受けた感が低いと思われたが、最終的に希望するところに就職出来た事がこの数字につながっているようである。 2. 自己評価「 S・A・ <input checked="" type="checkbox"/> B・C・D 」 今年度は学籍簿がきちんと入力されていたので、学生の家族構成や家庭環境等を考慮しながら個別相談に応じることができた。しかし、成績や実習評価、奨学金や家庭の事情に関してはその都度関係部署に確認を取らなければならず、時間がかかった。今後の学務システムの充実による効率化に期待したい。 昨年度よりは改善されてきたが、一番情報が欲しい就職活動に積極的でない学生 (科目履修予定者や、実習で評価の低かった学生、専門就職を希望しない学生等) の状況把握が難しかった。また、求人時期の早期化に学科の意識が追いついておらず、活動初期に必要な情報が得られず混乱した。	
ACT (改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. できる限り学生に関するあらゆる情報を収集し、必要なタイミングで適切な個別支援の充実を図っていきたい。 2. キャリアセンターの書籍の充実や、企業情報ファイルの整備等、環境整備に取り組みたい。	

平成28年度 「森 綾果」年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 事務局等 <input type="checkbox"/> ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名：事務局	職名：事務（学生）
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 担当業務の資料整理を行い、全教職員（特に教務課）との情報共有を徹底し、協力しながら事務の効率化につなげていく 2. 学生（特に学友自治会役員）への学生支援・指導・相談に、今まで以上に積極的に取り組む	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 他の教職員とも学生課として行うべき業務について相談・検討していく 2. 学生とのコミュニケーションを密にとることで、学生個人の小さな悩みに気付く	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに <input checked="" type="checkbox"/> （囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「 S ・ A ・ <input checked="" type="checkbox"/> B ・ C ・ D 」 学務関係の業務については、教務課との連携を図りつつ他の教職員とも相談し、現時点で抱えている業務については遂行することができたが、現在、学生課として抱えている業務が多く、効率を上げていくことが難しくなっていた。	
2. 自己評価「 S ・ <input checked="" type="checkbox"/> A ・ B ・ C ・ D 」 学生とのコミュニケーションを密にとることができたことにより、学生支援業務へ積極的に滞りなく取り組むことができた。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 更なる教職員・学生とのコミュニケーションを図り、学生課業務整理を行う。	

平成28年度 「石本 琳」 年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 事務局等 <input type="checkbox"/> ・ 教職員個人 ・ その他 ()	
部署名：事務局	職名：事務（入試広報・庶務）
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 優先順位の高い業務から、迅速かつ効率的に処理するよう努める。 2. マニュアル化を進め、計画性を持って業務を遂行する。 3. 学生募集に係る最新情報を収集し、資料として整理する。より充実した広報活動、募集活動を行う。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 前以て動きが予測できる業務は、計画的に処理しておく。 年間スケジュールをこまめに確認し、業務に遅れがないよう事前準備を心がける。 2. 学内行事（オープンキャンパス等）開催前は、昨年度にまとめたデータを元に、進捗状況表を作成し、業務を確実に遂行する。 3. 学生募集に関する学内の最新情報を資料化するだけでなく、広報資料として、広報チラシや本学ウェブサイトに反映させる。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに <input checked="" type="checkbox"/> （囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「S・A・ <input checked="" type="checkbox"/> B・C・D」 入試広報業務と庶務業務の繁忙期が重なることから、事前準備を行っていても、慌しく業務を行うことが多かった。そのため、効率化を考えるべき部分を、例年通りで対応することも多々あった。	
2. 自己評価「S・ <input checked="" type="checkbox"/> A・B・C・D」 進捗状況表を詳細に示すことにより、業務の確実性が向上したように思う。昨年度よりも業務整理も進み、特に、課題であったマニュアル化が、全体的に進んできたため、他の事務局職員との協力連携が強化されスムーズに学内行事を終えることができた。	
3. 自己評価「S・ <input checked="" type="checkbox"/> A・B・C・D」 広報物を充実させることにより、ガイダンス等での告知がより印象的なものとなり、オープンキャンパスの参加や、入試出願へつなげることができた。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 繁忙期における業務の効率化及び遂行の確実性を向上させる。 2. 学生募集に係る最新情報を収集し、より充実した広報活動、学生募集活動を行う。 3. 業務整理を進め、計画的に業務を処理するよう努める。	

平成28年度 「横山 和美」年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ **事務局等** ・ 教職員個人 ・ その他（ ）

部署名：事務局

職名：事務（教務）

PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 課内の業務分担を明確にし、業務の効率化を図る
2. 課内に限らず、他の課と情報・データを共有・連携し円滑かつ迅速に業務を行う

DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 保管書類を整理し、教務規定等を正しく理解し業務を遂行できるよう取り組んだ。必要となる情報の整理等他課と連携し取り組んだ。
2. 他課職員と連携を取りながら、情報・データを共有するよう心掛けた。

CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「S・**□A**・B・C・D」

書類や仕事の過程を段階に分け、整理することで作業効率の向上に努めた。結果としてファイリング等手順や資料作成の見直しを図る事が出来た。

2. 自己評価「S・A・**□B**・C・D」

事務局内での情報共有に努めたが、自分の課が人員不足ということもあり、データ共有や連携等出来なかった。自分の仕事で精いっぱい連携を取りながら遂行する余裕がなかった。

ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 学務システム導入に向け、しっかりと知識を得る。
2. 業務効率化を図るため、さらに情報共有に努める。また、事務局において業務分担や連携が出来るようフォローアップ体制の強化に努める。
3. 課内での業務分担の徹底。

平成28年度 「林田 翔太郎」年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ **事務局等** ・ 教職員個人 ・ その他（ ）

部署名：事務局

職名：事務（会計）

PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 週・月ごとにやるべきこと、優先順位を意識しながら業務を遂行する。
2. 既存のPC ファイルを生かしつつ可能な限り改善し業務の効率化を図る。
3. 業務に必要な書類をまとめたファイルの作成と整理

DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. カレンダーを作成し、日ごとのやるべきこと等を確認できるようにした。
2. これまで手作業で行ってきた業務をPC上で処理できるよう Excel ファイル等を新たに作成した。
3. 業務ごとに必要な書類をまとめたファイルの作成や管理、保管場所の整理を行った。

CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「 S・**□A**・B・C・D 」
カレンダーを作成し、予定を入力することで日ごと、週ごと、月ごとにやるべきことや優先順位の把握ができるようになり、次にやるべきことを考えながら日々の業務に取り組むことができた。
2. 自己評価「 S・**□A**・B・C・D 」
PC上で処理が可能になった業務については、手作業で処理する手間を可能な限り省くことができ、効率化を図ることができた。
3. 自己評価「 S・A・**□B**・C・D 」
業務上必要な書類等は随時まとめて必要な時に確認ができるようにしたが、収納が少ないため保管場所の確保に困った。

ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 教務課の業務を理解する。
2. 学務システムについて理解する。
3. 業務分担等で効率化を図る。

平成28年度 「木下 綾子」年次報告書

区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ **事務局等** ・ 教職員個人 ・ その他（ ）

部署名：図書館

職名：司書

PLAN (計画)： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 実習に役立つ図書館での利用促進
2. 学生・教員図書選定の充実
3. 学習支援

DO (実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 図書の展示を実施
 幼教の実習期間、絵本貸出上限を5冊に変更
 学内電子掲示板で図書館からのお知らせを掲示
2. 前期・後期で学生・教員による選定図書の実施
3. 幼教教員からの依頼により、附属幼稚園での「わくわく講座 やってみよう！読み聞かせ講座」講師を担当

CHECK (検証)： 成果を測定(量的・質的データ)し、測定結果を分析して課題を発見する。
 ※評価のアルファベットに□(囲み線)を付ける。

1. 自己評価「S・**□A**・B・C・D」
 貸出上限をあげたことで貸出数増加にもつながった
 学内電子掲示板で、おすすめする本の紹介をし読書推進に役立てた
2. 自己評価「S・**□A**・B・C・D」
 前期・後期の2回実施にしたことで、より多くの学生に選定の機会をあたえることができた
3. 自己評価「S・**□A**・B・C・D」
 保護者支援の一環として役立てた

ACT (改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 図書館利用、OPACの使い方・資料の探し方を周知し利用者増につなげる
2. 書架が飽和状態であるため、消耗図書や改訂などにより情報が古くなった図書を中心に除籍を検討する
3. 図書館サービスで学習支援につながることはできるだけ実施していく

**平成28年度
「研究業績」**

氏名	職名	研究業績				国際的活動の有無	社会的活動の有無	頁
		著作数	論文数	学会等発表数	その他			
橋口 亮(S)	教授	1	3	0	9	無	有	97
森 弘行(L)	教授	0	4	0	0	無	有	98
長尾 久美子(F)	教授	0	2	0	2	無	有	99
白石 景一(Y)	教授	0	2	0	2	無	有	100
草野 洋介(S)	教授	1	5	5	15	有	有	101
中澤 伸元(Y)	教授	0	0	0	6	無	有	102
下釜 綾子(Y)	教授	0	1	6	0	無	有	103
松尾 公則(Y)	教授	0	2	1	0	無	有	104
武藤 玲路(L)	准教授	0	7	1	6	無	有	105
島田 幸一郎(Y)	准教授	0	2	0	3	無	有	106
濱口 なぎさ(L)	准教授	0	4	0	0	無	有	107
植木 明子(F)	講師	0	3	1	0	無	有	108
山口 ゆかり(S)	講師	0	6	0	1	無	有	109
古賀 克彦(S)	講師	0	4	0	1	無	有	110
中村 浩美(Y)	講師	0	1	1	17	無	有	111
田川 千秋(F)	講師	0	0	1	0	無	有	112
本村 弥寿子(Y)	講師	0	3	1	0	無	有	113
荒木 正平(F)	講師	0	11	3	2	無	有	114
福井 謙一郎(Y)	講師	0	1	0	0	無	有	115
光武 きよみ(Y)	講師	0	3	1	1	無	有	116
江頭 万里子(L)	講師	1	3	1	0	無	有	117
樋口 誠(Y)	講師	0	1	0	7	無	有	118
昆 正子(Y)	助教	0	4	3	0	無	有	119
山本 尚史(Y)	助教	0	5	3	10	無	有	120
蛭原 正貴(Y)	助教	0	4	3	0	無	無	121

平成 28 年度 研究活動報告書

職名：教授 氏名：橋口 亮

研究 題目	トランスグルタミナーゼ製剤の添加がクジラ肉のソーセージパテに及ぼす効果 について（第2報）
研究 活動 の 概 要	<p>昨年度に続き、クジラの赤身肉を原料としたソーセージの加工法について検討した。前報¹⁾では、ソーセージパテの結着力の増加を目的に、5種類のトランスグルタミナーゼ製剤（以下、TGase と略す）を配合してソーセージを製造したところ、2種類のTGase に効果がみられたことを報告した。ところが、ソーセージに加工する際の条件として、酵素の至適温度、時間、加熱温度の調整など課題があり、商品化できるレベルのソーセージに至っていない。そこで今回、効果がみられた2種類のクジラ赤身肉に対する効果を確認し、商品化できるレベルにまで引き上げることを目的とし、実験を行った。</p> <p>結果は下記のとおりである。</p> <ol style="list-style-type: none">(1) ソーセージパテの調製温度と調製後のパテの pH は、トランスグルタミナーゼ活性に必要な条件を満たしていた。(2) 40℃で放置したソーセージパテに対するトランスグルタミナーゼの効果がみられ、放置時間が長いほど加熱後のゲルの硬さが増加した。(3) クジラ肉のソーセージパテに対するトランスグルタミナーゼの効果は、2種類の製剤とも差はみられなかった。(4) クジラ肉のソーセージの官能検査では、ポークソーセージの食感に比較すると歯ごたえの点で弱さを感じたが、これまで試作した中では最も良い食感であり、魚肉ソーセージ程度の食感を示した。

平成 28 年度 研究活動報告書

職名：教授 氏名：森 弘行

研究 題目	データベース、統計処理技術を利用したソフトウェアおよび利用技術の研究、教材開発
研究 活動 の 概 要	<p>本学紀要 41 号において学習支援システムについて報告した。このシステムは、学内 LAN の Web 環境で学生の成績や面談等の情報を提供しているもので、Windows サーバーで稼働する仮想計算機 (Oracle Virtual Box) 上の Linux (Ubuntu) 環境で MySQL データベースと PHP によるプログラムを用いて開発している。このシステムは本学の学内専用ウェブサイトリンクが設けられており、教職員だけではなく学生も自分の成績等を閲覧することができる。</p> <p>前回報告時において課題として残されていた事項への改善や新たな機能として、以下のような改良を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 履修登録機能 ・ 成績票出力機能 ・ Excel へのデータエクスポート ・ 成績登録機能 ・ 高等学校コード選択機能 ・ 学生の休退学等の履歴表示 ・ jQuery による操作インターフェース改善 ・ Google Map による地図表示 ・ メール送信機能 ・ 学生による就職活動記録および検定取得記録の入力 ・ ログインパスワードを暗号化して記録することによるセキュリティ対策の実施 ・ Float Header 機能による画面スクロール時の表見出し表示の改善 ・ Microsoft Access と SQL Express によるデータベース構築の試みについて

平成 28 年度 研究活動報告書

職名：教授 氏名：長尾 久美子

研究題目	介護福祉士国家試験合格と実践力の修得に向けた教育方法・対策について																																								
研究活動の概要	<p>目的 平成 28 年度入学生からの国家試験本格導入を控え、これまでの卒業時共通試験の成績やキャリアアップセミナーの成績データ等を基に課題や効果的な方策を検証し、2 年生は卒業時共通試験の 100% 合格をめざすとともに、本格実施対象となる 1 年生の国試に向けた授業方法の構築に役立つ。</p> <p>方法</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 年間の「キャリアアップセミナー」の授業で実施した試験成績データをもとに検証した。 「キャリアアップセミナー」の授業では、主に過去問題の 5 者択一問題を実施し、この方法が学生の成績向上に役立っているかについて検証した。 成績低位学生の年間の学習進捗状況や課題の把握を行った。 <p>結果</p> <p>H28 年度 卒業時共通試験成績 (H29.2.15 実施 介護福祉士養成施設協会主催)</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>得点 (125 点満点)</th> <th>ランク</th> <th>本学 人数 (%)</th> <th>全国 (%)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>本学平均 92.80 点</td> <td>A (80 点以上)</td> <td>13 名 (86.67%)</td> <td>70.39%</td> </tr> <tr> <td>全国平均 86.67 点</td> <td>B (60 点以上)</td> <td>2 名 (13.33%)</td> <td>25.94%</td> </tr> <tr> <td>本学順位 89 位/383 校</td> <td>C (59 点以下)</td> <td>0 名 (0%)</td> <td>3.68%</td> </tr> <tr> <td></td> <td>計</td> <td>15 名 (100%)</td> <td>100%</td> </tr> </tbody> </table> <p>H27 年度 卒業時共通試験成績 (H28.2.17 実施 介護福祉士養成施設協会主催)</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>得点 (120 点満点)</th> <th>ランク</th> <th>本学 人数 (%)</th> <th>全国 (%)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>本学平均 93.80 点</td> <td>A (80 点以上)</td> <td>10 名 (100%)</td> <td>72.53%</td> </tr> <tr> <td>全国平均 86.42 点</td> <td>B (60 点以上)</td> <td>0 名 (0%)</td> <td>24.59%</td> </tr> <tr> <td>本学順位 51 位/390 校</td> <td>C (59 点以下)</td> <td>0 名 (0%)</td> <td>2.88%</td> </tr> <tr> <td></td> <td>計</td> <td>10 名 (100%)</td> <td>100%</td> </tr> </tbody> </table> <p>①全国平均よりも 6.13 点高かったが、昨年度より平均点が 1 点下がった。 ②B ランク 2 名で、うち、入学時から課題のある学生 1 名が基準点に達しなかった。(H27 全員 A)</p> <p>まとめ</p> <ol style="list-style-type: none"> ①全体的には、キャリアアップセミナーの過去問の 5 者択一問題は効果がある。 ②全体の進め方として、過去問のマンネリ化が見られたので、前期に基礎的項目の暗記など徹底理解を図ることにより、教科書ベースの基本問題の正解率を高めることが必要である。 ③毎回データ化したが、特に成績低位学生への個別指導に活用するに至らなかった。データの有効活用を図ることを改善する必要がある。 ④自学の習慣化 (特に、成績低位学生) が十分でなく、計画的な学習ができなかった。 <p>今後に向けて 最大の課題は全員の正解率を高めることであり、全員が、”みんなが正解できるところは自分も正解する”という意識をもって計画的に学びを進めていくような支援に結び付けたい。</p>	得点 (125 点満点)	ランク	本学 人数 (%)	全国 (%)	本学平均 92.80 点	A (80 点以上)	13 名 (86.67%)	70.39%	全国平均 86.67 点	B (60 点以上)	2 名 (13.33%)	25.94%	本学順位 89 位/383 校	C (59 点以下)	0 名 (0%)	3.68%		計	15 名 (100%)	100%	得点 (120 点満点)	ランク	本学 人数 (%)	全国 (%)	本学平均 93.80 点	A (80 点以上)	10 名 (100%)	72.53%	全国平均 86.42 点	B (60 点以上)	0 名 (0%)	24.59%	本学順位 51 位/390 校	C (59 点以下)	0 名 (0%)	2.88%		計	10 名 (100%)	100%
得点 (125 点満点)	ランク	本学 人数 (%)	全国 (%)																																						
本学平均 92.80 点	A (80 点以上)	13 名 (86.67%)	70.39%																																						
全国平均 86.67 点	B (60 点以上)	2 名 (13.33%)	25.94%																																						
本学順位 89 位/383 校	C (59 点以下)	0 名 (0%)	3.68%																																						
	計	15 名 (100%)	100%																																						
得点 (120 点満点)	ランク	本学 人数 (%)	全国 (%)																																						
本学平均 93.80 点	A (80 点以上)	10 名 (100%)	72.53%																																						
全国平均 86.42 点	B (60 点以上)	0 名 (0%)	24.59%																																						
本学順位 51 位/390 校	C (59 点以下)	0 名 (0%)	2.88%																																						
	計	10 名 (100%)	100%																																						

平成 28 年度 研究活動報告書

職名：教授 氏名：白石 景一

研究 題目	<p>1. 音楽表現における感性・知性・理性・思想等などの運動・呼吸・音色感などとの関係について</p> <p>2. 保育者養成校の音楽教育における教材研究および指導法について</p>
研究 活動 の 概 要	<p>1. のテーマについては、チェロ奏法・指導法およびアンサンブル法などによる取組である。 昨年度は本学紀要に J.S.Bach 作曲 無伴奏チェロ組曲第 5 番ハ短調 (BWV1011) より 第 2 曲 アルマンド 第 4 曲 サラバンド 第 5 曲 ガボット I / II。同じく、無伴奏チェロ組曲 第 6 番ニ長調 (BWV1012) より第 1 曲プレリュード ～演奏に取り組んで (小さい手のための) ～をテーマに投稿し、本年度も、引き続きバッハの無伴奏チェロ組曲の奏法について取り組んだ。</p> <p>2. のテーマについては、(1)音楽教育における DTM などの利用について、(2)保育者養成校における 音楽初心者への基礎能力教育について取り組んでいるが、本年度は(2)について本学紀要に、 保育者養成校における音楽指導法の研究—第 9 報—「幼児音楽指導法」の教授内容について～ のテーマで投稿した。</p> <p>(1)の DTM などを利用したマルチメディアによる教育システムについてはハード、ソフトの両面に おいて刻々と進化し続けており導入は非常に難しいようである。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>

平成 28 年度 研究活動報告書

職名：教授 氏名：草野 洋介

研究 題目	<ol style="list-style-type: none">1) 長崎県島嶼地区におけるアロスタティック老化指数の全身的協関2) 長崎県民の健康寿命の延伸の研究
研究 活動 の 概 要	<p>1)本年度は主として平成 27 年度に下崎山地区で 5 年前に行った対象者に対するアロスタティック老化指数の全身的協関を探るための健診の結果解析を行っている。今後解析結果をもとに 5 年前の健診から個々の老化の進行度の要因の解析を行っていく。</p> <p>2)男性 45 位女性 39 位である長崎県の健康寿命順位がなぜ低いかについて、長崎県健康栄養調査、長崎県生活習慣調査などの調査結果および文献の解析により、ロコモティブシンドロームの関与、その要因として運動量の少なさがあることを明らかにし、日本生理人類学会シンポジウム、九州農村医学会シンポジウム、長崎県国保地域医療学会特別講演で発表するとともに、日本生理人類学会誌 22 巻 1 号に論文「健康寿命のとらえ方」を掲載した。その要旨は下記のとおりである。</p> <p>Japan's health life expectancy, which was requested based on the Basic Life Survey in 2010, was 70.42 for men and 73.62 for female. The healthy life expectancy in this survey is defined as "period without restriction on social life". In this study, prevention of locomotive syndrome and metabolic syndrome was considered important for prolonging healthy life span.</p>

平成 28 年度 研究活動報告書

職名：教授 氏名：中澤 伸元

研究 題目	歌表現における一人一人の感情表現行動の違い
研究 活動 の 概 要	<p>曲による詩の内容を一人ひとりが、どう捉えているだろうか？ この問題はとても深く、大切なことである。詩から生まれるイメージはその人の思いや、考え方によって、まったく違うものになるからだ。またその結果、その人なりの感情を生み、行動表現に繋がるということだ。 ここで大切なことは、一人一人の、思考の差、感情の差、行動の差が生まれるのは当然であるが、この差が生まれ育った環境の差、勉強したレベルの差が表れるからまったく違った形になって、表れてくるのである。このことを一人一人が納得理解した上で追及すべきである。</p> <p>思考について 同じものを見ても見ているものが同じではない、という現実気がつくべきである。たとえば、テーブルの上に自分が読みたいと思っていた本があったとしよう。他の本は興味がないから目に入っていないのと同じである。しかし友達は友達で、自分と違う読みたい本に目が行って、その本を取ったとしたら、二人とも同じ喜びは生まれるが、内容について語り合ったら当たり前だけど、まったく違うものである。ということは、本は同じテーブルにあっただけ、興味関心を持った本は違うということになる。これがコーラスなら違う楽譜の曲を演奏してもハマらないことになる。</p> <p>これがソロなら違ってくる。ソロは、それぞれの自分の感情表現であるから、歌による詩の内容をイメージしたら、それを感情にのせて表現すればいいわけである。一人一人が興味を示すところも、関心持つところも違うわけだから、二人以上が、ハーモニーを作るということは、とても難しいことである。それはお互いが、お互いの思いを話し合い、何をどう感じているかを話し、感じ合ったことをきちんと行動表現する。ここに至るまで共感し合えるかが問題である。抽象度の高い共感するという感情を生まなければならないからだ。素直にその共感を表現することでこんな楽しくゴール設定に迎えることに、共鳴し、信頼関係が生まれてくるのである。</p> <p>思考は感情を生み、 感情は行動表現を生むということである。</p> <p>この研究は、かなり大変な問題であり、自分に対しての研究でもあるため学生には理解できないが、少しでも自分と他人の違いを分かりやすくいろいろな例題を駆使し、挑戦していきたいと思っている。</p> <ul style="list-style-type: none">○思いと考えがこんなにも違う事実。○思い考えによりいかに感情を引き出すか。○感情が生まれた後の表現の仕方。

平成 28 年度 研究活動報告書

職名：教授 氏名：下釜 綾子

研究 題目	1. 保育者養成校における身体表現指導力育成について
研究 活動 の 概 要	<p>幼児に身体表現活動を展開するとき、保育者の身体表現能力が必要となる。平成 20 年に中学校でのダンス必修化が告示され、保育者養成校に進学してくる学生は中学時代にダンスを経験した年代であるが、当時、ヒップホップダンスが注目され、イメージを表現するという創作ダンスを経験した者は少ない。保育者として感じたことや考えたことを表現できるようになるために、身体表現活動への入口で躓かないような授業への誘いを行い、意欲的に課題に取り組む態度を引き出すことが重要だと考えた。さらに、幼児に身体表現を楽しむ場面を提供することができるよう学生の理解度に即した支援のあり方について検討する必要がある。</p> <p>今年度は、選択授業「動きのリズム」において、「表現力豊かな先生」「確かな指導力を持った先生」の育成を目指した授業展開法について検討した。</p> <p>〈受講学生の受講姿勢〉</p> <p>1.オリエンテーションにおいて、学生自ら動きを楽しむ姿勢をもって臨むよう要求した。 教授側だけでなく受講する学生自身が授業の性格を理解し能動的に臨むよう教育することで、授業開始時からの雰囲気が変わってくる。身体表現は感性やひらめきが重要なアイテムとなるため、思考のベクトルを開放性へと向けておく必要がある。</p> <p>〈教室の環境整備〉</p> <p>1.空気の清浄感、明るさ、温度に配慮し、学生が体育館に集合したときに、快適に過ごせるよう教室環境を整えて迎えた。 2.教材の準備については、学生が使用する様々な用具の整備に努め、スムーズに活動に入ることができるよう配慮した。</p> <p>〈課題克服型の導入〉</p> <p>全学生一人一人が取り組むべき教材研究課題を出し、順番に発表を行うことで表現力、課題解決力、発表能力、コミュニケーション力を育成する場面を作った。</p> <p>〈教材の選択〉</p> <p>学生や幼児の身体表現力を引き出すために必要な、動きの変化の要素及び動きの極限化と繰り返しの動きについて理解しやすい教材であること、幼児にも適用できることの条件を満たすことができる教材を選択した。</p> <p>〈授業の進め方〉</p> <p>身体表現の分野で保育者として身につけておきたい能力として、基本ステップの修得を始めとし、考えたこと感じたことを表現する力、教材研究推進力、幼児の身体表現活動の場面を作る力を育成したいと考えた。特に配慮した点は、第 1 回、第 2 回の授業で、恥ずかしくて動けないという学生の心ほぐしと体ほぐしである。また、毎回の授業開始をスムーズに行うことも重要であった。これは、身体表現活動が精神活動であるという特性を持っているからである。 さらに、授業展開においては、感性を一方通行の授業展開ではなく、学生が「考える・実践する・振り返る・改善点を見つける」という流れを作ることである。 つまり、身体表現活動の授業においては、教員が授業の計画と準備を丁寧に行い、学生の学びへの意欲を引き出していくことが不可欠であると言える。</p>

平成 28 年度 研究活動報告書

職名：教授 氏名：松尾 公則

研究 題目	<p style="text-align: center;">長崎県におけるヤモリ類の分布について</p>
研究 活動 の 概 要	<p>現在、日本に分布している Gekko 属は 8 種である。その中で、長崎県には 4 種生息することが知られている。筆者は、島嶼におけるヤモリ属の分布について 30 年にわたって調査を継続している。日本全体で島の数（海岸線の長さが 100m 以上）は 6,852 であり、その中で長崎県は日本一の 971 の島を有している。有人島も無人島も対象としており、今年度は、3 つの無人島と 12 の有人島を調査した。無人島は長崎市の野島、神楽島、新上五島町の相ノ島であり、有人島は長崎市の伊王島・高島・樺島・池島・牧島、佐世保市の黒島、平戸市の平戸島・生月島、五島市の福江島、新上五島町の中通島、対馬市の対馬島、壱岐市の壱岐島である。確認したヤモリ属は次の通りである。調査した島の中で、初めての調査地点は新上五島町の相ノ島だけであり、その他の島々は現状調査とヤモリ相の変化を調べている。</p> <p>ニホンヤモリ (Gekko japonicus) 伊王島・高島・樺島・牧島・黒島・平戸島・福江島・対馬島・壱岐島</p> <p>ニシヤモリ (Gekko sp.) 池島・平戸島・福江島・中通島</p> <p>ミナミヤモリ (Gekko hokouensis) 相ノ島・中通島</p> <p>ヤクヤモリ (Gekko jakuensis) 野島・神楽島</p> <p>ニホンヤモリは 16 世紀ごろに大陸から移入種であるといわれており、現在も日本での分布域を拡げている。長崎県でも、中通島や福江島・平戸島では、在来のニシヤモリの分布域と重なっており、詳しいデータはないが、ニホンヤモリの分布域が広がっているように感じている。</p> <p>ニシヤモリは五島灘周辺の島嶼や西彼杵半島が分布の中心であり、県外では鹿児島県の甬島や宇治諸島まで拡がっている。池島・平戸島・福江島・中通島では再確認できたが、黒島ではニホンヤモリしか確認できなかった。小さな島における 2 種のヤモリの競合について調査を継続したい。</p> <p>ミナミヤモリは南西諸島が分布の中心であり、なぜか、中通島の一部と西海市の平島だけに生息することが知られていた。今回、中通島の分布地と平島に近い無人島の相ノ島について調査したが、予想通りミナミヤモリを確認することができた。なぜ、この地域だけに分布するのかは不明だが、海流の影響で偶然住み着いたのではないかと考えている。</p> <p>ヤクヤモリは、鹿児島県の屋久島周辺の海岸域が分布の中心であり、なぜか、長崎市にある 3 つの無人島だけに生息している。今年度の調査で、小さな島であるが、ある程度の個体数が生息していることが分かった。3 つの無人島だけに生息している理由は不明だが、一つの説として、江戸時代の薩摩藩の貿易により持ち込まれたのではないかと考えている。根拠は、薩摩藩が長崎港で密貿易を行っていたこと、DNA 分析で鹿児島のものほとんど変わらないことから近い過去に侵入したことが分かっているからである。</p> <p>長崎県は複雑な海岸線と多くの島嶼を有しているため、生物の生息状況には特徴が多い。ヤモリ属もそのうちの一つであり、今後とも調査を継続し、長崎県だけではなく、日本全体のヤモリ相の解明を行いたい。</p>

平成 28 年度 研究活動報告書

職名：准教授 氏名：武藤 玲路

研究 題目	長崎女子短期大学における学生調査の活用事例
研究 活動 の 概 要	<p>1. 学生調査の目的</p> <p>長崎女子短期大学では従来実施してきた学生調査の目的と位置づけを改めて見直し、教育の改革・改善と内部質保証に取り組むこととした。以下は、今回実施した学生調査の目的である。</p> <p>①学生調査の結果を教育の質保証の根拠資料として明確に位置づけ、教育課程の評価の方針（CAP：カリキュラム・アセスメント・ポリシー）の評価指標とする。</p> <p>②短期大学コンソーシアム九州7（JCCK7 短大）の学生調査の結果を6分野（教育、家政、キャリア探索型、人文、社会、芸術）に分類・集計し、学科系統別の学修成果の到達度を比較検討する。</p> <p>③長崎女子短期大学の学生調査の結果を教務データのGPA成績別に集計し、学修成果の到達度を比較検討する。</p> <p>④長崎女子短期大学の学生調査の結果をJCCK7短大の平均値を評価基準（ベンチマーク）として比較検討し、学修成果の到達度の強みと弱みを明確にする。</p> <p>⑤長崎女子短期大学の学修成果と学生支援、学業成績と学修行動と学生支援について学生個々の評価の分布をグラフに表示し、授業改善と学生支援に活用する。</p> <p>2. 学生調査の結果と所見</p> <p>今回の学生調査の概要と今後の教育の改革・改善について以下に示す。</p> <p>(1) JCCK7 短大の全体および6 学科系統別の学修成果の経年変化</p> <p>①「リーダーシップ」「自分に対する自信」の自己評価は低いが、「最後までやりぬく力」「一般的な常識・礼儀・マナー」の自己評価は高い。また、14 項目の能力の殆どが1年時より2年時に上昇しており、1年間の学修成果がみられる。</p> <p>②「社会」分野の学修成果の伸びが最も高く、「キャリア探索型」分野の伸びが最も低くなっていることが分かる。これには、入学時の基礎学力や学習行動、学習意欲の差か、あるいはカリキュラムや授業形態の差が影響しているのではないかと考えられる。</p> <p>(2) JCCK7 短大の全体および6 学科系統別の学修成果の能力別の経年変化</p> <p>○「学問に対する興味関心」の伸びは低迷しているが、「自分に対する自信」「ひとつの問題を深く探究する態度」「職業や進路選択への方向づけ」「社会の現実的な問題への関心」には大きな伸びがあり、1年間のキャリア教育の学修成果がみられる。</p> <p>(3) JCCK7 短大の全体および6 学科系統別の学修成果の5 段階評価の割合</p> <p>○1年時より2年時は「とても劣っている」「少し劣っている」という自己評価の割合が減少し、学修成果に対する苦手意識が減っていることから、得意分野の促進よりも苦手分野の克服に力点を置いたキャリア教育になっていることが伺える。</p> <p>(4) 長崎女子短大の GPA 成績ランク別の学習行動・学習時間・学修成果・学生支援</p> <p>①学業成績を示すGPA ランクが高い学生ほど学習行動の自己評価も高いことから、成績が優良な学生はそれなりに十分努力して学習に取り組んでいることが分かる。従って、学習意欲・学習行動の促進が必要であると言える。</p> <p>②学業成績を示すGPA ランクが中程度の学生が最も家庭等での学習時間が長いことから、学業成績は必ずしも学習時間と対応せず、学習の方法や密度、能力によると思われる。従って、今後は学習方法の支援が必要であると言える。</p> <p>③学業成績を示すGPA ランクが中程度の学生が最も学修成果の自己評価が高いことから、自己評価は教員評価と必ずしも一致せず、成績のフィードバックが必要であると思われる。従って、課題・試験のフィードバックが必要であると言える。</p> <p>④学業成績を示すGPA ランクが中程度の学生が最も学生支援の満足度が高いことから、学生支援は成績が中程度の学生を基準にして実施されていることが多いと思われる。従って、今後は能力別の個別支援が必要であると言える。</p>

平成 28 年度 研究活動報告書

職名：准教授 氏名：島田 幸一郎

研究 題目	<p style="text-align: center;">統合保育からインクルーシブ保育への課題 ～保育実習からみた「特別な配慮」～</p>
研究 活動 の 概 要	<p>1. 目的 わが国の保育現場では、1974年の保育所における障害児保育制度の開始以降、統合保育の名のもとに、障害のある子どもを保育現場が受け入れるという形での障害児保育が行われてきたが、「障害者の権利条約」批准や「障害者差別解消法」の施行により、新たに「インクルーシブ保育」への流れが進展しつつある。二元論に立った統合保育から一人ひとりの保育的ニーズに応じたインクルーシブ保育への移行期である現在、保育所における障害児保育の現状と課題を検証しておくことは大変重要だと考える。 障害のある子ども・気になる子どもの通所状況や配慮の有無、今後の大きな課題となる「合理的配慮」に繋がる特別な配慮等について、実習後の学生アンケートによって探っていく。</p> <p>2. 方法と内容及び留意点 (1) 方法 平成 26・27 年度の本学幼児教育学科 2 年生の保育所実習後アンケート調査の分析をとおして、現行の統合保育の現状と合理的配慮に繋がる特別な配慮を考察する。 (2) 内容 アンケート調査にあたっては、「身体・知的障害」「発達障害」「気になる子ども」の 3 カテゴリーに区分し、それぞれ通園状況や配慮の有無と内容について集計する。 なお、配慮事項の内容については、「人的な配慮」「特性に対応した配慮」「物理的配慮」「連携による配慮」の 4 点に大別する。 (3) 留意点 複数名が実習した保育所があり、全ての項目において集計が重複している。また、学生個々の障害に対する理解に差があり、各回答が事実を適切に反映しているのか判断できない。学生が直接関わった子どもの事例がある一方で、実習先での伝聞に基づく回答がある。</p> <p>3. 結果 (1) 障害のある子どもを受け入れている保育所の全国平均は約 75%であるが、本県も同様な比率 (26 年度 78%、27 年度 71%) を示している。また通所しているのは、比較的軽度の障害のある子どもたちであることが分かる。 (2) 発達障害である自閉症スペクトラムや ADHD と診断されている子どもが少なからず存在する。また、気になる子どもの中には発達障害と考えられる子どもが多数存在していることが、アンケートの主な行動内容から窺い知ることができる。 (3) ほとんどの保育所で、障害の特性や行動の特性に応じた配慮がなされているが、個々の実態に応じた工夫ある対応のより一層の充実が求められている。 (4) それぞれの保育所では、「特性に応じた配慮」が多数を占め、「人的配慮」「物理的配慮」それに次いでいる。「連携による配慮」は少数に止まっている。</p> <p>4. まとめ (1) 「共に生きる社会」の実現のためには、インクルーシブ保育が重要な役割を果たすと考える。保育に関わる者は、その理念や核となる「合理的配慮」の理解と推進に向け尽力する必要がある。 (2) 保育者は、子ども一人ひとりの基本的人権の保障を基盤におき子どもと関わるのが大事であり、保育者養成に関わる者はそのことを肝に銘じておくことが重要である。</p>

平成 28 年度 研究活動報告書

職名：准教授 氏名：濱口 なぎさ

研究 題目	(1) 能動的学修の実践に関する研究 (2) e-ラーニング教材に関する研究
研究 活動 の 概 要	<p>(1) 能動的学習の実践に関する研究 「実践力を養成するための課題設定の試み」というテーマで、アクティブラーニングの手法の一つであるプロジェクト学習の視点を用いた授業内容の構築を試みた。</p> <p>昨年度「オフィス情報演習」(2年後期開講・演習科目)において、「学生の実践力強化」のため新たな課題設定を試みた結果、若干の成果が得られており、今年度は、特にグループで取り組んだ課題について、その概要と実践力養成の成果について研究した。</p> <p>学生の実践力養成については、学生達が授業で計画した内容を元に「弥生祭模擬店企画」を運営し黒字を出したことから、授業を実施したことにより一定の成果が得られたと考えている。</p> <p>昨年度と同様、自分とは異なる意見に耳を傾け、自分の意見をきちんと伝え、受け入れてもらう難しさと楽しさを感じた学生が多かったことも収穫であった。しかし、課題に取り組む前と終了後に学生達が具体的に何を身につけることができたのか、学習成果をデータとして比較できる評価法を検討する必要がある。</p> <p>評価方法についても課題が残った。各課題について教員評価と学生による相互評価、自己評価を総合して学生個人の評価を行った。特に教員評価においては、グループ活動の場合、学生個々人の課題への取り組み状況を把握することが難しく、目立つ場面だけでなく裏方で活動している学生に対して正当な評価ができるような仕組みを考える必要があると感じた。</p>

平成 28 年度 研究活動報告書

職名：講師 氏名：植木 明子

研究題目	<p>1. 地域交流活動を通しての学生の学びと課題 (3)</p> <p>— 介護予防自主グループへのアンケート調査の分析から —</p> <p>2. 本学学生の靴の選び方に関する研究</p>
研究活動の概要	<p>1. 研究の背景と目的</p> <p>近年、大学や短期大学においては、その有する資源を活用し社会貢献を進めること、とりわけ地域との積極的な交流を行う事が重要視されている。本学では、平成 26 年度より、地域コミュニティのつながりに資することを目的の一つとし、学生の地域貢献活動を行っている。</p> <p>学生が関わらせていただく自主グループ等の介護予防活動は、要支援・要介護状態になる前に介護予防を推進するために平成 18 年より施行された介護保険の地域支援事業の介護予防事業の一つとして始まった。団塊の世代が 75 才に達する 2025 年を見据えて、住民主体型の活動は平成 27 年から 29 年度にかけては介護予防・日常生活支援総合事業のなかの通所型サービスの一つとして、従来の介護予防通所介護に合わせて、地域の多様なサービスの一つとしておこなわれる予定である</p> <p>そこで今回、短大周辺において介護予防のための自主グループ活動をしている 7 つの団体を対象としたアンケート調査と、各グループのリーダーへのインタビューを実施した。その結果の分析から、①参加者のグループ活動への満足感にどのような要因が関わっているのか、②各グループのリーダーに悩みはないか（あるとしたらどのようなものか）、そして③本学に望むものは何か、以上 3 点を明らかにすることを目的に考察を行った。</p> <p>①について</p> <ul style="list-style-type: none">● 参加の理由に「足腰を鍛え、転ばないように」をあげた方は、グループ活動への満足度が高い傾向がうかがえる ($p < 0.05$)。その背景には、自身の体調への不安を、活動参加によって多少なりとも改善できたと実感していることがあると考えられる● 「活動に参加しての変化」と満足感との関連については、「物忘れをしないよう、工夫するようになった」「趣味が増えた」($p < 0.05$)、「楽しみが増えた」($p < 0.01$)といった結果から、会への参加者自身にとって有用な何らかの変化が、満足感を実感することにつながると思われる。● 「活動に参加しての変化」の項目について「今のところ変わらない」へ回答した群と、「活動内容への満足度」との間に、特に強い関連があることが確認された ($p < 0.01$)。 <p>②について</p> <p>「自主グループのリーダーの悩みの把握」について述べる。インタビュー結果から、各リーダーに共通して聞かれた、会運営上の悩みとしては「会員数の増加・会の拡大」、「後継者の確保」であった。長期にわたって会の運営を行われているところからは、実施する企画の内容がマンネリ化していることや、参加者に要望を聞いてもなかなかアイデアがあがらない、といった悩みも出ていた。</p> <p>③について</p> <p>「長崎女子短期大学への要望を知る」については、「公開講座のことを知りたい」、「学生との交流を深めたい」、といった声があがっていることがわかった。</p> <p>大学や短大等においても、新しい住民参加による総合事業の取り組みによって、参加した住民にどのような変化がもたらされたかを実証していく調査研究といった役割を果たすことが、今後ますます必要となると思われる。地域貢献を実践型授業をシラバスに反映させ、学校全体で共有しながら、「地域に愛される学校」を目指したい</p> <p>2. 靴の選び方については次回の研究テーマとして継続していく。</p>

平成 28 年度 研究活動報告書

職名：講師 氏名：山口 ゆかり

研究 題目	<p>クジラ肉を原料としたソーセージの加工法に関する研究 ～トランスグルタミナーゼ製剤の添加がクジラ肉のソーセージパテに及ぼす効果について～</p>
研究 活動 の 概 要	<p>昨年度に引き続き、クジラの赤身肉を原料としたソーセージの加工法について検討した。具体的には、結着力の弱いクジラ肉に効果があった2種類のトランスグルタミナーゼ製剤を使用し、背脂の配合と40℃における酵素の作用時間を変えて試作を行った。結果は、以下のとおりである。</p> <ol style="list-style-type: none">(1) ソーセージパテの調製温度と調製後のパテのpHは、トランスグルタミナーゼ活性に必要な条件を満たしていた。(2) 40℃で放置したソーセージパテは、トランスグルタミナーゼの効果のみられ、放置時間が長いほど加熱後のゲルの硬さが増加した。(3) クジラ肉のソーセージパテに対するトランスグルタミナーゼの効果は、2種類の製剤とも差はみられなかった。(4) クジラ肉のソーセージは、ポークソーセージの食感に比較すると歯ごたえの点で弱さを感じたが、これまで試作した中では最も良い食感であり、魚肉ソーセージ程度の食感を示した。

平成 28 年度 研究活動報告書

職名：講師 氏名：古賀 克彦

研究 題目	食物繊維が血糖値に及ぼす影響について
研究 活動 の 概 要	<p>1. 研究の概要</p> <p>近年食事の順番を見直すことにより、良好な血糖コントロールを行う「食べ順ダイエット」が注目されている。これは食物繊維を先に食べることにより、消化管通過時間延長、急激な血糖値上昇抑制、インスリン分泌量減少などの作用が期待され、その効果により良好な血糖値コントロールが期待される。</p> <p>そこで今回、食べ順ダイエットと食物繊維の種類を調べるため、健常女子大生 4 名を対象に、白飯の前に水溶性食物繊維として難消化性デキストリンを摂取した場合の血糖値変化および、水溶性食物繊維として難消化性デキストリン、不溶性食物繊維としてセルロースを食事前に摂取した場合の血糖値の変化について調査を行った。</p> <p>2. 方法</p> <p>健常な女子大生 4 名(19~20 歳)を調査対象とし、①食事前に摂取する難消化性デキストリン量の違いが糖値へ及ぼす影響、②食事前に難消化性デキストリンとセルロースを摂取した場合の血糖値へ及ぼす影響について調査を行った。なお対象者には事前に研究内容について説明を行い、同意を得て実施した。血糖測定はニプロ株が発売している自己検査用グルコースキット・ニプロ TRUEpico 用いた。</p> <p>3. 結果・考察</p> <p>①食事前に摂取する難消化性デキストリン量の違いが糖値へ及ぼす影響について</p> <p>水溶性食物繊維である難消化性デキストリン 5g を白飯 200g より先に摂取した場合の血糖値は、すべての時間帯において白飯のみ摂取した場合の血糖値より低い値を示した。これは水溶性食物繊維が持つ消化管通過時間遅延効果が表れたためだと思われる。次に難消化性デキストリン 10g を先に摂取し白飯を摂取した場合の血糖値は、食事 30 分後と食事 1 時間後で白飯のみを摂取した場合より高い値を示した。これらの結果より血糖値上昇抑制効果を期待して水溶性食物繊維を摂取する際には、血糖値上昇抑制効果示す適量が存在し、それ以上に摂取した場合は逆に血糖値の上昇を促進させてしまう可能性が考えられた。</p> <p>②白飯を摂取する前に摂取するサラダの量を変更した場合の血糖値の影響</p> <p>水溶性食物繊維の難消化性デキストリン 5g を先に摂取した場合の血糖値は、白飯のみの場合に比べ食事 30 分後は 17.0mg/dl、食後 1 時間後は 5.8mg/dl、食後 2 時間後は 4.7mg/dl 低い値を示し水溶性食物繊維の血糖値上昇抑制効果が示唆された。不溶性食物繊維としてセルロース 5g を先に摂取した場合の血糖値は、白飯のみの場合に比べ食事 30 分後は 12.0mg/dl、食後 1 時間後は 22.8mg/dl、食後 2 時間後は 16.7mg/dl 低い値を示した。本来血糖値上昇抑制効果がないといわれる不溶性食物繊維でも、食後 1 時間後、食後 2 時間後も強い血糖値上昇抑制効果が見られた。</p> <p>4. 結語</p> <p>今回、食物繊維の種類や摂取量が血糖値にどのような影響を及ぼすか調査を行った。その結果、一定量の水溶性食物繊維を摂取した場合は血糖値上昇抑制効果が見られたが、多量の水溶性食物繊維を摂取した場合逆に血糖値上昇効果が見られたこと、また、従来血糖値上昇抑制効果があるとされていた水溶性食物繊維だけではなく、機序は不明だが不溶性食物繊維にも血糖値上昇抑制効果が見られた。</p>

平成 28 年度 研究活動報告書

職名：講師 氏名：中村 浩美

研究 題目	<p>1. ソプラノ音域からメゾ・ソプラノへの移行をもとに、オペラを含むクラシック楽曲とミュージカルの発声法を基盤とした歌唱法の同一点と相違点、及び音楽表現、演技法について</p> <p>2. 保育者養成校の音楽教育における教材研究と指導法について</p>
研究 活動 の 概要	<p>1. ソプラノからメゾ・ソプラノへの移行はまだ課題点が多く、頭では理解しつつも、あらゆる筋肉の使い方や抜き方、響きのポジションが身に付かない状況である。</p> <p>今年度は初心に返ってオペラのアリアからの研究を、歌曲からの研究とした。以前より、ソプラノで勉強していた歌曲を中声用に換えて、発声法をイタリア歌曲やドナウディー、ドイツ歌曲の中声用を用いながら行ってみた。</p> <p>現在においては、以前と違って中間音域が安定しており、逆に高音域での発声に悩みを多く抱えている。中声用で研究した歌曲は歌いやすくはあったが、少し重い感じに聴こえ、響きのポジションの課題注意事項を、3月に東京より来崎した先生のレッスンで指摘を受けた。歌いやすい中間音域から2点Gまではメゾ・ソプラノとしてのある意味の声の太さや響きに相当しているようだが、2点Aから上の音域になると、頭声だけを感じる声や、または声帯が付いてない状態でのかすれ声や、全く出ないことが頻繁にあり、研究課題として大きくとらえている。重たい響きには、深く掘ったような声になる時があるため、下顎の力を取り上顎部への意識と筋肉の使い方、そして体をほぐしながらでの筋肉の使い方を学んでいきたい。また、息の流れがコンスタントに回ることも大きな課題で、2点AかBまでは確実に出せるよう研究しながらレッスンを受講したい。授業ではどうしてもミックスボイス、つまり、地声とファルセットの混じりでの歌声となり、その歌声を継続することと、学生への指導する声の出し方で、メゾ・ソプラノの響きとは違う重い声、そして高音域が声帯に負担をかけているため出なくなることを再認識した。</p> <p>オペラでもその発声法の課題点、問題点が影響しており、アリアでは役になりきっていても、その役に見合った声の出し方に疑問を感じ、根本的な発声法の見直しをしながらメゾ・ソプラノの響きと音域の幅を広げていくことを今後も研究したい。それによってミュージカル発声法の同一点と相違点の考え方、演奏法にも新たな発見ができるように思う。</p> <p>2. ピアノ初心者が年々増加し、音楽基礎知識の理解も8割がたがないという現状で、どのようなレッスンが学生の力を伸ばすのかかなり悩んだ。</p> <p>個人レッスンは研究室で一对一の演習のため、まずは緊張状態を緩和させるために学生が話しやすい雰囲気を作り、ピアノ以外の話も含めながらその学生の性格を早く把握するように努めている。学生個人の性格を早く知ることは、その学生のピアノ技術の進捗や音楽的な感受性をどのように引き出せるかとても重要である。これまでの学生のレッスンでも経験したことで、今年度も性格を早く知ることで学生の質を高め、保育者になる意識を高められたことを確認できた。</p> <p>また、学生の性格を知ることだけではなく、学生と教員との信頼関係もとても大切である。ピアノも歌もメンタル面はかなり左右されるため、その学生に見合った声掛け、指導の仕方は異なる。練習を怠っている場合は、何か理由があるかもしれないことを先に考えて理由を聞く。怠けて練習をしなかった場合には保育者になる意識がどれくらいなのかを確認しながら厳しく指導する時もある。しかし、曲が仕上がったか否かは別として、一生懸命努力をしたことを感じる事ができた場合は、その学生を心から褒めて一緒に喜び、達成感を維持できるよう促す言葉を必ずかけている。ただ練習をするのではなく、練習の仕方のノウハウは徹底的に丁寧に時に厳しく、繰り返し繰り返し指導していくことで、今まで積み重ねて努力することが少ない学生には苦痛でもあるが、確実に上達していることを学生自身も感じる事ができた。</p> <p>どんなに厳しくとも、万人ではないが、愛情を持って心から応援する気持ちで指導することで、学生もなぜ厳しく指導されたのか、なぜ上達したのかを理解してくれた。</p> <p>今後もさらに学生に愛情ある指導をしていきたい。</p>

平成 28 年度 研究活動報告書

職名：講師 氏名：田川 千秋

<p>研究 題目</p>	<p>1. 地域交流活動を通しての学生の学びと課題 (3) — 介護予防自主グループへのアンケート調査の分析から — 2. 高齢者施設の職員のケアに対する悩み</p>
<p>研究 活動 の 概要</p>	<p>1. 研究の背景と目的 近年、大学や短期大学においては、その有する資源を活用し社会貢献を進めること、とりわけ地域との積極的な交流を行う事が重要視されている。本学では、平成 26 年度より、地域コミュニティのつながりに資することを目的の一つとし、学生の地域貢献活動を行っている。 学生が関わらせていただく自主グループ等の介護予防活動は、要支援・要介護状態になる前に介護予防を推進するために平成 18 年より施行された介護保険の地域支援事業の介護予防事業の一つとして始まった。団塊の世代が 75 才に達する 2025 年を見据えて、住民主体型の活動は平成 27 年から 29 年度にかけては介護予防・日常生活支援総合事業のなかの通所型サービスの一つとして、従来の介護予防通所介護に合わせて、地域の多様なサービスの一つとしておこなわれる予定である そこで今回、短大周辺において介護予防のための自主グループ活動をしている 7 つの団体を対象としたアンケート調査と、各グループのリーダーへのインタビューを実施した。その結果の分析から、①参加者のグループ活動への満足感にどのような要因が関わっているのか、②各グループのリーダーに悩みはないか(あるとしたらどのようなものか)、そして③本学に望むものは何か、以上 3 点を明らかにすることを目的に考察を行った。 ①について <ul style="list-style-type: none"> ● 参加の理由に「足腰を鍛え、転ばないように」をあげた方は、グループ活動への満足度が高い傾向がうかがえる ($p < 0.05$)。その背景には、自身の体調への不安を、活動参加によって多少なりとも改善できたと実感していることがあると考えられる ● 「活動に参加しての変化」と満足感との関連については、「物忘れをしないよう、工夫するようになった」「趣味が増えた」($p < 0.05$)、「楽しみが増えた」($p < 0.01$)といった結果から、会への参加者自身にとって有用な何らかの変化が、満足感を実感することにつながると思われる。 ● 「活動に参加しての変化」の項目について「今のところ変わらない」へ回答した群と、「活動内容への満足度」との間に、特に強い関連があることが確認された ($p < 0.01$)。 ②について 「自主グループのリーダーの悩みの把握」について述べる。インタビュー結果から、各リーダーに共通して聞かれた、会運営上の悩みとしては「会員数の増加・会の拡大」、「後継者の確保」であった。長期にわたって会の運営が行われているところからは、実施する企画の内容がマンネリ化していることや、参加者に要望を聞いてもなかなかアイデアがあがらない、といった悩みも出ていた。 助言・アドバイスする立場の関係者から、実施する新しいことへの取り組み内容の準備ができないことを悩みとしている。それはリーダーの悩みである「実施する内容のマンネリ化」と一致している。 ③について 「長崎女子短期大学への要望を知る」については、「公開講座のことを知りたい」、「学生との交流を深めたい」、といった声があがっていることがわかった。 大学や短大等においても、新しい住民参加による総合事業の取り組みによって、参加した住民にどのような変化がもたらされたかを実証していく調査研究といった役割を果たすことが、今後ますます必要となると思われる。地域貢献を実践型授業のシラバスに反映させ、学校全体で共有しながら、「地域に愛される学校」を目指したい</p> <p>2. 認知症ケアに対する職員の関わり方 認知症の人のケアについて施設・在宅ケア事例を収集し課題解決の方法を探ることを継続する。</p>

平成 28 年度 研究活動報告書

職名：講師 氏名：本村 弥寿子

研究題目	保育内容「表現」における学生の学びについて																																				
研究活動の概要	<p>1 保育内容「表現」について 保育内容「表現」は、1年前期に開講される科目である。保育について学び始めたばかりの学生にとって、保育内容「表現」の授業内容を理解することは難しい。そこで、学生が保育の基本を学びつつ、“保育内容とは何か”“領域「表現」とは何か”について理解を深められるよう、実際に遊びを体験し、子どもの目線に立って子どもの気持ちを考えたり保育者の目線で活動を振り返ったりする活動を取り入れることとした。</p> <p>2 保育内容「表現」の内容 本科目は、幼稚園教諭免許・保育士資格を取得するための必修科目である。平成28年度は1年生108名全員が受講した。授業は108名を2クラスに分け、週に1回、90分ずつを15回行った。授業計画は以下のとおりである。 <保育内容「表現」の内容></p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th style="width: 5%;">回数</th> <th style="width: 45%;">内 容</th> <th style="width: 5%;">回数</th> <th style="width: 45%;">内 容</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1</td> <td>保育の基本・目的 保育内容について</td> <td>9</td> <td>造形に対する感性と表現</td> </tr> <tr> <td>2</td> <td>領域「表現」について</td> <td>10</td> <td>造形に対する感性と表現（VTR視聴）</td> </tr> <tr> <td>3</td> <td>領域「表現」における保育内容の歴史的変遷</td> <td>11</td> <td>子どもの感性と表現を育む保育者の役割①</td> </tr> <tr> <td>4</td> <td>子どもの存在と表現</td> <td>12</td> <td>子どもの感性と表現を育む保育者の役割②</td> </tr> <tr> <td>5</td> <td>表現を育む環境</td> <td>13</td> <td>保育内容「表現」の課題</td> </tr> <tr> <td>6</td> <td>諸感覚を通しての感性と表現</td> <td>14</td> <td>表現遊びの実践（小麦粉粘土遊び）</td> </tr> <tr> <td>7</td> <td>生命に対する感性と表現</td> <td>15</td> <td>保育内容「表現」で大切にしていること（確認とまとめ）</td> </tr> <tr> <td>8</td> <td>音楽に対する感性と表現</td> <td></td> <td></td> </tr> </tbody> </table> <p>3 表現遊び（小麦粉粘土遊び）の実践と学生の学び 保育者は子どもの表現の理解者となるとともに、自身も表現者として存在することが大切である。授業で学んだことを実感しながら学生自身が表現力を高める経験となるよう、14回目に小麦粉粘土遊びを実践した。実践しての感想からは以下のような学びがあったと捉えられた。 ①「楽しい」「気持ちいい」など充実感を味わい、同じ思いを子どもに経験させたいという気持ちを持つ ②子どもが活動を楽しめる環境構成や、作品の取扱いについて考える ③子どもは主体的に活動する時、様々なことを学ぶということを実感する ④子どもは表現活動によって心が解放され、身の回りの人や物等に親しみを持つことを実感 ⑤自分が保育者になった時、何を大切にしてい保育を行うべきか考える 以上のように、子どもの気持ちを体験しながら客観的に活動を見つめることができるようになっていく感想が見られた。このことから学生は、授業の内容を理解し、保育者としての目が育ってきていると考えられた。</p> <p>4 保育内容「表現」の課題 表現遊びの実践における学生の感想から、遊びの実践とそれまでの授業内容が、学生のより良い学びにつながっていることがうかがえた。しかし、このような学びを確認できたのは、受講学生の約半数である。これからさらに表現遊びの内容や回数、学生の気付きや考えを深める授業者のかかわり等を工夫・改善していきたい。</p>	回数	内 容	回数	内 容	1	保育の基本・目的 保育内容について	9	造形に対する感性と表現	2	領域「表現」について	10	造形に対する感性と表現（VTR視聴）	3	領域「表現」における保育内容の歴史的変遷	11	子どもの感性と表現を育む保育者の役割①	4	子どもの存在と表現	12	子どもの感性と表現を育む保育者の役割②	5	表現を育む環境	13	保育内容「表現」の課題	6	諸感覚を通しての感性と表現	14	表現遊びの実践（小麦粉粘土遊び）	7	生命に対する感性と表現	15	保育内容「表現」で大切にしていること（確認とまとめ）	8	音楽に対する感性と表現		
回数	内 容	回数	内 容																																		
1	保育の基本・目的 保育内容について	9	造形に対する感性と表現																																		
2	領域「表現」について	10	造形に対する感性と表現（VTR視聴）																																		
3	領域「表現」における保育内容の歴史的変遷	11	子どもの感性と表現を育む保育者の役割①																																		
4	子どもの存在と表現	12	子どもの感性と表現を育む保育者の役割②																																		
5	表現を育む環境	13	保育内容「表現」の課題																																		
6	諸感覚を通しての感性と表現	14	表現遊びの実践（小麦粉粘土遊び）																																		
7	生命に対する感性と表現	15	保育内容「表現」で大切にしていること（確認とまとめ）																																		
8	音楽に対する感性と表現																																				

平成 28 年度 研究活動報告書

職名：講師 氏名：荒木 正平

研究 題目	<p>(1) 介護実践場面におけるコミュニケーションのあり方に関する研究</p> <p>(2) 地域交流活動を通しての学生の学びと課題関連</p> <p>(3) 保護者支援・教育研究所の活動に関連して</p>
研究 活動 の 概要	<p>(1) 介護実践場面におけるコミュニケーションのあり方に関する研究</p> <p>介護実践現場におけるコミュニケーションのあり方についての研究は、昨秋の社会福祉学会及び介護福祉学会において報告した通り、前年度までに得られた知見を生かすかたちで今年度も継続して実施した。成果の一部については、本年度紀要において報告しており、以下その概要を示す。</p> <p>表題は「認知症高齢者の意思の「理解」をめぐって－パッシング・ケアの意義に関する介護者の意識から－」とし、研究の目的は、認知症高齢者の意思を「理解する」という営みの有する意味について、認知症高齢者を介護する者の「語り」の分析を通して明らかにすることである。</p> <p>作業を進めるにあたっての主たる資料は、2006 年から約 3 年間にわたり認知症対応型共同生活介護（以下、グループホーム）において参与観察を実施した間に作成したフィールド・ノートと、2006 年から現在までに、グループホームの他に軽費老人ホームや特別養護老人ホーム等を含む介護職員または介護経験者を対象に実施した、直接面接（半構造化面接）方式インタビューにより得られたデータである。</p> <p>本研究において主として取り上げたのは、介護実践場面における「理解」の問題についてである。「理解」を過剰に重視する志向性が、介護職員から認知症高齢者へ、あるいは介護職員から家族介護者へ、「理解している（知っている）はず」という期待、「理解がなさすぎる（知らなさすぎる）」「理解すべき」という教化の眼差しとして向けられる可能性について、またそのいずれのベクトルにおいても、関係する主体相互にとってのストレス要因として機能しうることを介護職員への聞き取りから得られたデータを用いつつ指摘した。職員間のごく自然な何気ないやりとりのなかで、たとえ無意識にであれ、過剰な「理解」が要求するような言動が頻回に表出されることで、特定の家族に対して「理解の過剰」を強要する集団意識が醸成され、その結果として介護場面におけるコミュニケーション実践が、居心地の悪いものとなりうる。さらにパッシング・ケアに関する介護者のスタンスの差異を手がかりに、「理解」を軸にした関わりの意義と限界についての考察を進めた。</p> <p>(2) 地域交流活動を通しての学生の学びと課題関連</p> <p>前年度までに引き続き、介護福祉士コース教員共同で地域交流活動に関する研究も実施した。今年度は、昨年度までの学生の活動からの学びの分析も継続しつつ、新たに介護予防自主グループへのアンケート調査の分析についての報告も行った。</p> <p>(3) 保護者支援・教育研究センターの活動に関連して</p> <p>南島原市と連携しての親育ち講座については継続中である。(1)における研究の延長に、センターにおける実践の研究的振り返りに関連付けて論じることは今後のひとつの方向性として検討中である。</p>

平成 28 年度 研究活動報告書

職名：講師 氏名：福井 謙一郎

研究 題目	学生支援の実態とその支援（事例報告）
研究 活動 の 概 要	<p>高等教育機関に在籍する学生は、生活の中で様々な悩みを抱えている（藤井、1998）。その悩みは学力面の適応困難だけでなく、人間関係や社会生活など多岐にわたっており（及川、2006）、抑うつ傾向を示すものも少なくない（白石、2005）。近年、学生が抱える悩みの中で増加傾向を示す内容が、学生自身の家族関係に関するものである（川上、2014）。その実態について高石（2009）は、“巣立てない学生”の存在を明示した上で、近年における学生と保護者の密着度が非常に高く、「巣立てない」＝「子離れしない」現状を示唆している。このように、保護者自身が共に住む子ども（学生）から離れられない状況は学生自身を悩ませる原因ともなっており、大学生になってもとどされた家庭内における保護者が過保護、過干渉であるために自立を妨げていること、そして中にはうまく循環していない親子関係が原因による摂食問題は、少子化核家族化等などの社会問題などを反映したものとなっている。本報告では本学で扱った二件の学生相談事例を元に、本学における学生支援の姿について考察した。その結果、①カウンセリング・マインドの重要性、②相談員と教員の両立、の二点が重要であることが明らかとなり、また保護者とも連携しつつ支援を行っていくことが効果的であると示唆された。</p>

平成 28 年度 研究活動報告書

職名：講師 氏名：光武 きよみ

研究 題目	保育実習における養護技術習得の現状と課題
研究 活動 の 概 要	<p>保育士養成課程で学ぶ学生は、少子化、子育て不安、児童虐待などの社会問題が取りあげられた時代に誕生し、子どもとの接触体験は少ない。本学では「乳児保育」、「子どもの保健Ⅰ・Ⅱ」を通して、子どもの成長・発達、疾病と対処方法・予防法、地域との連携について学び、調乳、おむつ交換、着脱等の日常生活に必要な養護技術に関しては、「子どもの保健演習」として、座学および実技演習を実施している。しかし、学生においては、乳幼児の発育・発達に対するイメージがつきにくく、演習時に養護技術に対しての不安などがある。このような現状において、保育士として、子どもたちの健康の保持増進や衛生・安全管理を行う上で、心身や疾患についての基本的知識と日常生活の援助方法の習得は必須である。本学では、1年前期および後期の通年で「乳児保育」30コマ、1年後期で「子どもの保健Ⅰ」15コマ、2年前期で「子どもの保健演習」15コマを終了した後に保育実習となっている。それまでの期間で、ある程度の知識や技術を習得しないとイケない。</p> <p>本研究では以上のことを踏まえ、「子どもの保健演習」の座学や養護技術の演習項目を、現在の教授法で、どの程度理解しているのか知る必要があると考えた。そこで、実習終了後の2年生99名を対象として、講義・演習と実習で行った養護技術項目について、実習現場での実施状況、養護技術への不安、また実習を通して保育士として必要と感じた養護技術項目のアンケート調査を行い、結果を基に教授法を検討することを目的とした。</p> <p>結果</p> <ol style="list-style-type: none">1. 「子どもの保健演習」の講義演習については、ほとんどの学生が理解できていた。2. 講義で使用する教材に関しては、学生の満足感も得られていた。3. 学内演習や実習では、調乳や着脱に自信が持てない学生がいた。4. 演習での練習時間不足やテスト終了後の時間の使い方に問題があった。5. 実際に動きがある乳幼児に対しての養護技術提供が難しい。6. 乳幼児に多い疾患や対応について知識を得たいという希望が多い。 <p>以上の結果から「乳児保育」「子どもの保健Ⅰ・Ⅱ」を通して、しっかりと子どもの成長・発達、疾患等を学び、「子どもの保健演習」および保育実習に繋げることが重要になってくると考える。</p> <p>練習不足に関しては、空きコマを利用する事や個別対応を継続し、学生自らが練習に対して意欲が持てるような言葉かけが重要だと感じた。さらに手順記入用紙を作成して、時間をうまく使えるよう配慮したい。また、職場で起こり得る様々な事例を伝えながら、安全安楽、スムーズに技術提供できるよう演習を数多く行う必要がある。</p> <p>このように、次年度から新たな取り組みを実施し、講義・演習が保育実習に結びつくような教授法を、今後も模索していきたい。</p>

平成 28 年度 研究活動報告書

職名：講師 氏名：江頭 万里子

研究 題目	<p>保育者養成校におけるマナー教育について —規範意識の視点から—</p>										
研究 活動 の 概要	<p>本学は、初年時教育として全学生を対象としてマナー教育に力を入れているが、近年、他の保育者養成校においても保育者となる学生のマナーを育成することの必要性が認識され、正規の授業としてマナー教育がなされている。本学の入学生はバスマナーについて近隣から苦情を受けるなど入学時点でマナーが良好であるとは言い難い。マナーを育成するためには、マナーを守らない理由を知ることが意味があると考え。本研究は、マナーを守らないことにはその人の規範意識が関係しているのではないかと考え、本学学生のマナーと規範意識について調査した結果と今後の指導法について検討したことを報告する。</p> <p>調査について</p> <p>(1) 調査対象 本学幼児教育学科1年生 107名 (2) 実施時期 マナー学第1回目の授業時 (平成28年9月) (3) 調査方法 質問紙 マナーチェックシート (江頭、2016) 質問項目：学内 (公共) のマナー 10項目 受講マナー 6項目 バスの乗車マナー 5項目 家庭内のマナー 1項目 計22項目</p> <p>(4) 評価方法 (4段階評価) 自己評価 自身がそれを行なっているか (4. 大変当てはまる 3. 少し当てはまる 2. あまり当てはまらない 1. 全く当てはまらない) 他者評価 人がそれを行なわなかったときに悪いと思うか (4. 大変悪いと思う、3. 少し悪いと思う 2. 余り悪いとは思わない 1. 全く悪いとは思わない)</p> <p>調査結果と考察</p> <table border="1" style="display: inline-table; margin-right: 20px;"> <caption>表1 自己評価と他者に対する評価</caption> <thead> <tr> <th>自己評価</th> <th>他者に対する評価</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>4</td> <td>3.63</td> </tr> <tr> <td>3</td> <td>3.29</td> </tr> <tr> <td>2</td> <td>3.09</td> </tr> <tr> <td>1</td> <td>2.35</td> </tr> </tbody> </table> <p>質問項目全てのマナーが当てはまる訳ではないが、全体としてはマナーの自己評価が高いほど、他者がそれを行なわなかったとき、より悪いと思う (規範意識が高い) という結果となった。1項目を除き、自己評価を4とした人の他者に対する評価の平均点は、自己評価を3~1とした人の平均点より高かった。中には、規範意識は高くてもマナーを守れない学生も存在する。これは、規範に対する意識が十分に内面化されておらず、規範の価値基準が他律的になっている状態である (小暮、2012) と考えられる。規範の価値基準を自律的にするためには、教員が一方向的に教える授業ではなく、学生自身が考えるディスカッションやディベート等を用いた授業法が有効であると考え。</p> <p>調査結果から規範意識が高ければマナーが良好になる傾向にあることが示唆された。しかしマナーに対する意識が高くても適切な表し方を知らなければ良好なマナーとはならない。そこで、実践力を養う為にマナー学の授業では、規範意識を高め、併せて職場におけるマナー (ビジネスマナー) 習得に有効とされているロールプレイングを採用している。しかし、ロールプレイングはあくまでも疑似体験である。幼児教育学科では、学内の学びを活かし深化させる場として、「教育実習」、「保育実習Ⅰ・Ⅱ」という科目がある。実習後は、「保育者論」や「保育・教職実践演習」等において学内での学びが実践できたかどうか実習の振り返りを行う。規範意識の涵養・学内での演習 (ロールプレイング) →学外実習→振り返りという一連の学びの中で、マナー教育の効果をより向上させるためには、マナー学と学外実習の教員間で実習の振り返りなどの情報を共有し、改善点などを見出し、今後の授業に活かすことが有効であると考え。</p> <p>本研究は、幼児教育学科 本村弥寿子講師との共同研究である。</p>	自己評価	他者に対する評価	4	3.63	3	3.29	2	3.09	1	2.35
自己評価	他者に対する評価										
4	3.63										
3	3.29										
2	3.09										
1	2.35										

平成 28 年度 研究活動報告書

職名：講師 氏名：樋口 誠

研究 題目	腹話術研究に取り組んで
研究 活動 の 概 要	<p>腹話術研究の取り組みは、昨年につき4年になりますが、今年度は、昨年より観客と一緒に楽しみながら演技発表ができ、少し高いレベルに達することが出来ました。</p> <p>「実践腹話術」を研究テーマに掲げ、本年度も多くの施設・会場を訪問し、研究発表をさせていただく機会を得ました。毎回課題を持って臨んだ腹話術実演会でしたが、会場によって観客の反応は様々でした。</p> <p>例えば、発達障害の施設ではステージだけでなく、参加者の席を回りながら発表するスタイルを取り入れ大変好評でした。手遊び・クイズなどを取り入れたことにより、全員が一体になり大変良い発表会になったように思えました。</p> <p>各実演会場で施設の方々や反省会を持つ機会があり「腹話術発表を皆、真剣に見て楽しんでいましたよ。」と仰っていただきました。参加者の中には、重度の障害者がいて、ベッドのまま移動して参加して、担当者が付きっきりで参加していただいたことに頭が下がる思いでした。ご協力いただいた関係者には大変感謝いたします。今後も研究を続け、自分に満足の出来る結果が出せるように努力致します。</p> <p>11月の弥生祭では本年度も「全日本あすなろ腹話術協会」会長の福小介氏を特別ゲストでお迎えし、野外ステージに出演して頂きました。素晴らしい演技を披露していただき、その後211教室において、腹話術講義を開催いたしました。腹話術講義参加者は子供から大人まで40名の参加があり、全員腹話術を楽しみながら腹話術の魅力が十分に伝わる内容の講演会となりました。私自身にも、大変参考になり、今後の研究課題が少し見えたように思えます。</p> <p><これからの取り組み></p> <p>腹話術も4年目に入り、昨年よりもっと高い技術での課題を達成できるよう努力したい。</p> <p>また、本年度の反省を参考にして良い成果が出せるよう研鑽を積みたい。</p> <p>「人形を使いながらすべての役を一人で演じる。そしてメルヘンの世界を創り出し、見る人の心を動かし、感動を与える。」このことを目標に努力を重ね、発表する内容（発声・間の取り方・ネタ・衣装）を工夫しながらすべての年齢層に楽しんでもらえる腹話術の研究実践に取り組みたい。</p>

平成 28 年度 研究活動報告書

職名：助教 氏名：昆 正子

研究 題目	<h2>「子どもと美術」における造形技法指導の展開</h2>
研究 活動 の 概 要	<p>子どもたちは日常生活の中で、事象が変化する不思議さ、楽しさを様々な形で自然に体験している。そのような子どもたちの興味を大切にしながら、その体験を造形活動へと導いていくことのできる保育者を養成したい。</p> <p>そこで平成28年度は、技法遊びを用いた自己紹介絵本の制作・発表を行うこととした。様々な造形技法に取り組み、出合った色や形からイメージをふくらませ、あるいは既にあるイメージに近づけようと色や形をコントロールし、何かに見立てたり、温度や感情等を表現したりする活動は、子どもたちと学生が心通わせる教材づくりにも活かせるのではないかと。今回制作する教材を「自己紹介絵本」とした理由は、子どもとのかかわりを深めることの意義や保育の具体的な展開について、学生の意識しやすさを考慮したためである。</p> <p><結果></p> <p>活動時の学生の言動や、終了時の学生アンケートから考察した。</p> <p>○学生の主体的な学び</p> <p>学生にとって必要感のある題材であり、自ら手を動かし、課題解決と資質向上に取り組むことのできる教材であったと考えられる。</p> <p>○造形技法を用いた活動を保育現場で展開するために必要な知識と技術の習得</p> <p>自分本位ではなく子どもの視線や自らの立場を意識したことで、作品は全体的に丁寧な仕上がりになっており、技巧が光るものも目立った</p> <p>○造形技法やモチーフ、配色・仕掛け等の効果的な使い方の理解</p> <p>アンケート結果では、学生の理解度が、自分が選んだ造形技法と用いた場面のイメージが「とても合っていた」、「合っていた」と答えており、今回の場合、部分的ではあるが、造形技法を効果的に用いるための知識や理解が深められたのではないかと考える。またコメントからは、形や構図等の工夫を心がけていたこと、相手の見やすさ・伝わりやすさを意識した画面構成についても理解する機会となったことがうかがえた。</p> <p>自分が取り組んだ造形技法について、やり方や特性等の理解が深まったか尋ねると、「深まった」とする学生が多かったが、多くが「マーブリング」のみを使用しており、取り組んだ造形技法に大きく偏りがあったこと、その技法の選択については「場面のイメージに合っているから」との理由が半分を占めたことがアンケート結果から分かった。</p> <p>自己紹介絵本の制作に入る前に、学生の発想や表現の幅が広がるよう、各技法についてより詳しい参考資料（活動展開写真や作例）を示し、学生が作品イメージを持ちやすいよう配慮すべきであった。子どもの年齢や発達段階に応じた材料・用具の選択や環境構成等、保育現場で各種造形技法を実践するにあたり必要となる知識について、十分に理解を深められる授業の工夫が今後の課題である。</p> <p>○子どもとの交流をイメージした言葉がけや活動の展開に関する学び</p> <p>作品発表における自己評価・相互評価によって、学生は笑顔や明るい雰囲気を中心がけること、作品そのものできばえにとらわれたり、子どもとのかかわりが独善的にならないようにすること等の基本的な姿勢の大切さを再認識できていた。</p> <p>まとめ</p> <p>学生の造形技法の選択に大きく偏りが見られ、この実践のみでは、学生が各種造形技法についての知識と技術について十分習得できたか不確かである。そのため1年前期からの丁寧なポートフォリオ作成等、この実践に至るまでに一通り体験してきた造形技法の知識を確かなものにし、本実践によって応用へと制作体験を重ね理解を深めていくための授業の工夫を行ってきたい。</p> <p>学生が技巧を凝らした作品づくりに終始するのではなく、保育実践現場で求められる専門性や保育に向かう態度を自然と認識できたことは、今回の実践において評価できる点であろう。</p> <p>また、実習に対し漠然とした不安感を持っている学生たちがそれぞれの課題意識や、これから始まる実習の準備への意欲が持てたことが何よりであった。今後とも専門科目から実習指導へとつながりを持たせた授業展開を意識したい。</p> <p style="text-align: right;">(平成28年度本学紀要に掲載)</p>

平成 28 年度 研究活動報告書

職名：助教 氏名：山本 尚史

研究 題目	保育者としての資質・能力に関する考察
研究 活動 の 概 要	<p>今年度は保育者としての資質・能力に関する考察を深める上で、「保育者の協働性」に着目した。新制度下、保育者の活動領域は拡大を続けている。子どもとの関わり、子育て支援、保育に教材の研究、園の職務等々、日常の業務は想像に余りあるのが現状である。このような多忙な保育者にとって必要な資質・能力には様々あるが、今年度は「保育者の協働性」に着目した。</p> <p>「保育者の協働性」は市販されている保育のテキストではどの本も取り上げているものの、学術研究としては研究論文も少なく、まだその端緒を拓いたばかりである印象を持っている。加えて、保育者養成校で学ぶ学生が「保育者の協働性」についてどのように考え、イメージしているのかという視点で語られることはこれまでのところ確認できない。</p> <p>本研究では、本学の2年生を対象に「保育者の協働性」をどのように考えるのかを考察したものである。保育者論の講義をフィールドにして研究を進めた。学生は「保育者の協働性」について「協力」という言葉で語る者が多かった。しかし、その内実を確かめていくと、単なる「協力」というものではなく、学生はより多様な意味をその言葉に込めて考えていることが分かってきた。</p> <p>学生の考えた「協働性」は業務の協力体制を築くこと、報告・連絡・相談を密にすることだけでなく、実習やボランティアを通じて学んだ結果、園全体の業務を見通しての職員間の連携、職業人としての在り方にまで及んでいた。</p> <p>この結果は、幼稚園教育要領、保育所保育指針、保育士倫理綱領という保育者が確実に遵守し、職務に励む際の基本となる規則、規範とも合致したものであり、学生が本学での学び、現場での学びを通じて、確実に保育者としての在り方を見つめ、保育者という職業人に近づいていることを示すものとして考えられる。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>

平成 28 年度 研究活動報告書

職名：助教 氏名：蛭原 正貴

研究 題目	伝承遊びが覚醒水準に与える影響について
研究 活動 の 概 要	<p>世代を問わず、いつの時代も子ども達に親しまれている遊びの一つとして、伝承遊びが挙げられる。伝承遊びは過去、現在、未来といった時間軸に左右されることなく、長期間にわたって親しまれている遊びの総称であり、縄跳びや鬼遊びといった身体活動量の豊富な遊びから、あやとりやお手玉といった手指の器用さが求められる遊びまで多種多様な遊びが存在する。そのため、子どもの発育にとって重要とされる要素を多分に含んでおり、多くの教育的価値が認められている。</p> <p>幼児教育に必要とされる要素を多分に含む伝承遊びではあるが、数ある遊びの中でも手指を中心とした伝承遊びは感覚器官や脳の発達に好影響を与えるとされている。先行研究では手指の運動を伴う遊びについて、あやとりが脳の不快な気分を解消することを報告している。しかしながら、手指を中心とした伝承遊びが身体の諸器官与える影響について、生理的指標を用いて行われた研究はごく僅かしか報告されていない。</p> <p>脳の覚醒水準の測定については、近年、棒反応時間測定が注目されている。棒反応時間測定は、落下する棒をできるだけ早く握るだけの簡便なテストであるが、棒反応時間測定を用いた研究は高齢者を対象としていることが多く、幼児や学生を対象とした研究は少数である。</p> <p>そこで、本研究では手指の運動を中心とした伝承遊びが脳の覚醒水準に与える影響について、棒反応時間を用いて検討することを目的とした。</p> <p>対象は幼児教育学科に所属する女子学生 30 名（年齢 19.3±0.7 歳）とし、課題は、手指の運動を中心とする伝承遊びとして、「お手玉」「あやとり」「けん玉」の 3 つを設定した。「お手玉」は基本的な振り技とされる「両手二つゆり」及び「片手二つゆり」を課題とした。「あやとり」は一人あやとりの基本とされる「山」「川」「あみ」「うまのめ」「つづみ」「ふね」を一連の流れとして行うことを課題とした。「けん玉」は大皿と中皿に玉を交互に移動させる「もしかめ」を行うことを課題とした。なお、学生は本学の授業でそれぞれの課題に取り組んだことがあり、実施経験があることを前提とした。課題はそれぞれの内容を繰り返しながら 5 分間行った。</p> <p>反応時間の測定は、リアクション-BG (T. K. K. 5008, 竹井機器工業製) を用いて、課題実施の前後に行った。各伝承遊びと課題実施前後の棒反応時間の比較については、二元配置分散分析を行った。統計解析には、SPSS Statistics19.0 を使用した。</p> <p>検討の結果、お手玉を実施した前後の棒反応時間に有意差がみられ、あやとりとけん玉の実施前後では有意差はみられなかった。この結果は、設定した 3 つの伝承遊びの中で、お手玉における課題を苦手としていたり、未習熟であったりする被験者が多かったことから、課題の難易度や習熟度が覚醒水準の上昇に起因しているものと考えられた。そして、伝承遊びがもつ固有の手指の運動が与える影響は弱いものであることが示唆された。</p> <p>今後は、各伝承遊びにおける主観的困難度について検討するとともに、手指を中心とした伝承遊びに限らず、他の伝承遊びが覚醒水準に与える影響について検討していきたい。</p>